



ISBN978-4-8401-4336-3
C0193 ¥580E
9784840143363

定価：本体580円(税別)
メディアファクトリー
1920193005806

ISBN978-4-8401-4336-3
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)
メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない7

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する白動人形と、人形使いにより用いられる魔術。「誤解を恐れずに言えば、この夏、夜々と雷真は一線を超えるました」「嘘……よね？」そんなわけで夏が終わり、《迷宮》の魔王グリゼルダのもとでの修行で実力を上げた雷真は、ロキやフレイとともに順当に夜会を勝ち進んでいた。だが、シャルが何者かの呪いを受け、人形サイズに小さくなってしまうという事件が起きた。一方で、学生総代にして、《十三人》の第三位、オルガ・サラディーンに迫られる雷真。そして、雷真とオルガの婚約が発表され——!? シンフォニック学園バトルアクション第7弾!



最新情報はこちらをチェック!
<http://www.machine-doll.com/>

【著者】



海冬レイジ
かいとうれいじ

トイとかプラモとか大好き！

いまだに新人気分が抜けないキャラアーティストの職業作家。
札幌市在住。1月8日生まれ。A型。

【イラストレーター】

るろお

キムチ鍋が食べたい。

かべー(イラスト／るろお 演丁／百百原ユウコ(ムシカ)グラフィックス)



機巧少女は傷つかない

Facing
"Gennin
Legends"

Inevitable
Machine-Doll

るろお



9784840143363

ISBN978-4-8401-4336-3
C0193 ¥580E

1920193005806

定価：本体580円(税別)

メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない7

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。「説解を恐れず」に言えば、この夏、夜々と雷真は一線を超えたままであります」「嘘……よね?」そんなわけで夏が終わり、《迷宮の魔王》グリゼルダのもとでの修行で実力を上げた雷真は、ロキやフレイとともに順当に夜会を勝ち進んでいた。だが、シャルが何者かの呪いを受け、人形サイズに小さくなってしまうという事件が起きる。一方で、学生総代にして、《十三人》の第三位、オルガ・サラディーンに迫られる雷真。そして、雷真とオルガの婚約が発表され——!? シンフォニック学園バトルアクション第7弾!

MC文庫

海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1 Facing "Cannibal Candy"

[イラスト るろむ]

機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"

[イラスト るろむ]

機巧少女は傷つかない3 Facing "Elf Speaker"

[イラスト るろむ]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kaveller"

[イラスト るろむ]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kaveller"

CD(Side-A)付き特装版

[イラスト るろむ]

機巧少女は傷つかない5 Facing "King's Singer"

[イラスト るろむ]

機巧少女は傷つかない6 Facing "Crimson Red"

[イラスト るろむ]

機巧少女は傷つかない7 Facing "Genuin Legends"

[イラスト るろむ]

マンドール
機巧少女は傷つかない7
Facing "Genuin Legends"

海冬レイジ

マンドール
機巧少女は傷つかない7

海冬レイジ

マンドール
J

マンドール
J



海タマレイヤの
るるぶ

機巧少女は 傷つかない

Facing
'Gemini
Legends'



「美味しいです！
フレイさん、

お料理上手ですね！」



シャルロットさん、
もう雷真のことは
あきらめてください！

貴女こそあきらめたつ
わ、私はあきらめない
何もないけどね！

やつぱリシマルだ。やつたりしている。

「何やつてんだこいつは！
急いで人工呼吸！」

「てやりようがねえ！」



「フォローを頼めるか、
雪月花の人形？」

「できるよ。」



「チャンスは一度よ

「う、わかった」

「俺に気づいていたか、
剣帝」



「偉大なる者」……



contents

Unbreakable
Machine-Doll

Prologue 天使が誘う p11
Chapter 1 女王の寝室 p27
Chapter 2 おとぎ話の小妖精 p60
Chapter 3 魔女と騎士の盟約 p91
Chapter 4 敗者は誰か？ p125
Chapter 5 それぞれの理由 p157
Chapter 6 この再会に感謝する p192
Chapter 7 君臨者たち p250
Epilogue 悪魔が誘う p271



マシンドール
機巧少女は傷つかない7
Facing "Genuine Legends"

海冬レイジ

MF文庫J

□絵・本文イラストを描るるお
福井・庄司智

Prologue

天使が誘う

「誤解を恐れずに言えば、この夏、夜々と雷真は一線を超えました」

いつもの学生食堂で、黒髪が美しい自動人形——夜々は高らかに宣言した。

ヴァルブルギス王立機巧学院の昼休み。雷真は前期にそろしていた上手に、相棒の夜々、妖精のような美少女シャル、仔童の姿のシグムントと同席していた。

夜々の問題発言は既におなじみなので、近くの学生たちも気に留めない。

「誤解を恐れないところか、全力で誤解させもうとしてるよな?」

とりえず、雷真はおざなりなツッコみを入れた。夜々は無視して、

「いいですか、シャルロットさん。夏は恋の季節です。夏が終われば、少女は女になるんです。ちょっと危険な火遊びが、ほろ苦い思い出を残すんです」

「またそんな嘘……よね、ライシン?」

バスターを巻く手を止めて、シャルは心配そうに訊いてくる。

「超えたは超えたが、おまえの考へてるようなもんじゃな——」

「な——シグムント——この不埒者を消し飛ばすわよ——」

「落ち着け、シャル。雷真が言っているのは魔術的な技量の話だ。魔術回路（マジック回路）の



効果を第三者にも及ぼせるようになった……という意味だろう」

「違います、雷真と夜々は男女の一線を超えたんですね」
半ぐそをかきながら主張する夜々。普段通りの平和な光景だ。

「ふう、モード——

「ほう、何やら楽しげだな」

背後から、聞き覚えのある声がかかる。

夜々が警戒の色を見せ、周囲の学生からは感嘆の息が漏れた。

おそるおそる振り向くと、案の定、見知った女性が立っていた。

胸元を強調するエミニンなドレスと、太のしつばのよくなボニー・テールが特徴的だ。

年齢は二十そこだが、夜々やシャルに比べると大人の色氣がある。

前回の夜会を制した（運営の）魔王、グリゼルダ・ウェストン男爵。

例によつて、腰には大ぶりの剣をぶら下げている。

初対面のシャルが目に見えて硬くなつた。雷真もまた、シャルとはまたたく間に違う理由で身構えてしまつ。

「……よう、お姫さま」

「何だ、その顔は。怪物にでも出くわしたような顔をしおつて」

「魔王」に比ぐりや怪物だって可愛いもんだよ。頼むから、こんなふうなやつを振り回さ

ないでくれよ？」

「誰にものを言つてゐる。私は教授だぞ。そんな無分別なことをするか」「あんたの」とを連さに振つたら、「分別」なんて言葉が出てへるんだよ？？

——などと考えた瞬間、鋭い手刀が振り下ろされた。

眉間を割られそうになり、真剣白刃取りの要領で、とりかに受けた。

「いきなり何だ！」 分別はどこ行つた！

「剣は抜いていない！」

「もう！」 やめてください！

見かねた様子で夜々が割り込んでいた。

「いくら魔王さまでも、雷真を傷つけぬ！」 今は夜々が許しません！

「……」の私に生意氣を言う。貴様、何様のつもりだ？！

「夜々は雷真の妻です！」

「ほう。ところでバカ弟子、貴様のカリキュラムのことだが——

「流されました——」

泣き出す夜々。グリゼルダはうるさそうに手を振つて、

「大人をなめるな。自動人形が使い手に好意を寄せるのはよく自然なこと、人形の嫁宣言など信じるに足らん。事実なら解体してやるだけだしな——」

「全力で子どもじやねーかー　大人ってほど年上じやねーしなー」

「人形相手に欲情するなど不潔ー　斬り落としてソテーにしてやるー」

「何をだー　つか、結局とはつちりは俺にくるのか!!」

「皆、落ち着け。公共の場だぞ」

シグムントが首をもたげ、低い声で注意する。

叱つたわけではないが、相手を諭す威厳がある。これこそ大人の言動だ。グリゼルダも雷真も、そろつて赤面した。

「む、この自動人形——まさか〈魔剣〉か?」

グリゼルダが目を丸くする。さすが魔王は博識だ。観察眼も鋭い。

そこでようやく、グリゼルダはシャルの存在に気付いたようだ。

「では、そこ」の娘は、アリニー伯爵の……

「エドガー・アリニーの娘、シャルロットです。ウエストン男爵

シャルは腰を浮かせ、硬いお辞儀をした。

「いや、へりくだる必要はない。生まれではそちが上だ。……むむ、耳には聞いていた

が、大した器だ。それに、おまえには〈精靈使い〉の素質があるようだ」

精靈使い。雷真はほんやり記憶をたどる。確か、古い魔術の講義で聞いた。

「子どもの頃、妖精を見ただろう?　あるいは、ユニコーンと会話をしたか?」

シャルはうつむいてしまった。思い当たるフシがあるらしい。だが、その件にはあまり触れたくないようだ。雷真は気を利かせて、

「それより、何の用だよ。俺のカリキュラムがどうしたって？」

「そうだった——貴様、私のゼミに一つとして参加しないつもりか？」
グリゼルダは戦史の知識を買われ、史学部の教授に就任した。ただし、座学はほとんと受け持たず、白兵戦演習、野戦演習、実戦下の生存術などが専門だ。

「いや……俺は一応二回生だしな。専門的には気後れするつりーか」「心配無用だ。私のゼミは全学年に参加資格がある」

「だが、希望者が殺到してんだろ？ 俺は申請で出遅れたしつ……」

「察するな。貴様のために、あらかじめ空きを作つてあるのだ！」

「逆差別じゃねーかー フェアにやれー」

「黙れー 最高の教育は最高の素材にこそ施されるべきだ。それがひぶとは、魔術世界の発展に寄与することになる。学院生なら、誰もがわきまえいぶる」とだ」

叫んだわけではなかつたが、その声は食堂中の者に届いたようだ。

皆が瞼みしめるような顔をする。ただ一人、雷真だけが大いに不服だった。
グリゼルダは申請用紙をテーブルに叩きつけ、

「どうかとサインして、学生課窓口に提出しろ。——それからシャルロット、おまえの席

も用意する。その気があるなら、くるがいい」

「え？、私も……ですか？」

「少し稽古をつけてやる。(魔剣)の主^{おも}がそんなもまでは、魔王^{マジン}に無禮だ」

シャルは痛みをこらえるような顔をした。たぶん、悔しかつたのだろう。

(……さすがは魔王^{マジン}ってところか。まったく容赦^{ヨウセ}しねえな)

シャルは(畢竟)と恐れられ、(十二^{トトロ}人)に列せられる実力者。シャルにあんな言い方ができる者は、教授の中にもそうはない。

「言うだけ言うと、グリゼルダはミニのスカートをひるがえし、去つて行つた。

ふと気がつくと、夜々が目にいっぱい涙を溜めていた。

「雷真^{カミナリ}……あの女狐の授業を受ける気ですか……？」

「仮にも俺が師匠と呼ぶ人だぞ？、女狐なんて、そんな言い方するな」

「うううう、個人授業なら夏休みにさんざんやつて、たつぶりしほられたはずなのに……しほり取られたはずなのに……」

「妙な言い方するなー、魔術の修行しかしてないからな？」

「ふん。カラダ日当でで魔術を決めるなんて、最低の色魔野郎ね」

「おまえまで何だシャル！、つか俺、あいつの授業は受けねーぞ」

「何ですか？……？」魔王^{マジン}がじらじらに説つてくれたのに？」

「まあ……な。深謀遠慮つてやつだ」

「そ、そう言えば貴方、時間割どうなつてるのよ。もう決まつてるの？」

シャルは急に拳銃不審になつた。あさつての方をにらみ、頬を染める。

「ゆ、優等生の私が相談に乗つてあげてもいいわよ。み、見せなさるよー」

「別にかまわねーが……」

夜々が不自然に瞳孔を開く横で、雷真は手帳を開き、時間割を見せた。

シャルは引つたくるように手帳を奪い、そして、目を丸くした。

「何よこれー すつかすかじやないー」

その通り、雷真が予定しているのは必修科目だけだった。

「こんななんじや卒業できないわー 卒業証書がなくちゃ、マダナスに勝つても魔王になれ

ないのよ。ただでさえ中途編入で単位が足りてないのに——」

「いや、いいんだ、それでー」

「……という意味？ だつて貴方、補講は真面目に受けてたわよね？」

「前期末の成績次第じや、放校の危険があつたからな」

あまりに成績が悪い者は、途中で退学になつてしまふのだ。

「だが、もうその心配はない。夜会は期末試験の前に終わる」

後期日程は三月まで。だが、夜会はあと一か月少々——年を越す前に終わる。

年を越す前に、マグナスとの決着はついてるはずだ。

「俺の目的はあいつを殺すことだ。卒業証書はいらない」

「……それならなおのこと、ウェ斯顿男爵のゼミには参加すべきじゃない？」

確かに、グリゼルダの授業は戦闘の役に立つかもしれない。

だが、その前につぶされる危険もある。

万全のコンディションを整えておくのも、実戦では重要な要素だ。せっかく薙が^なえた

のに、マグナスとやる前に満身創痍では、ますます勝利が遠くなる。

その後は大して会話も弾まず、何となく気まずいランチとなつた。

それぞれの皿がカラになり、シグムントが前脚で顔を洗つていると——
さわつと学生たちにどよめきが起つた。

見れば、あらびやかな女子学生がひとり、食堂の入り口に立つてゐる。
目立つ。とにかく、目立つ少女だ。

まばゆい金髪。しゃんと伸びた背筋。高貴な顔立ち。いかにも貴族的な雰囲気はシャル
に似ているが、シャルのようにツンケンしたところがない。そして、ある部分がシャルと
は決定的に異なつてゐる。

肩飾りのついた白い礼服は、夜会執行部（専用）のもの。

「あれは学生總代——（十三人）の第三位、オルガ・サラティーンだわ」

言われてみれば、見覚えがある。ヒドマンと振返のとき、巨大結界パリアトライアルの構築を指揮していた少女だ。

「雷真、こちにきます」

夜々の言葉通り、オルガは堂々とした足取りで、雷真の前にやつて来た。立体的に盛り上がりた胸をそらし、悠然と見下るす。

「（ト）か（ト）雷真」というのは通だんな。」

周囲の注目が一齊に集まつた。雷真はやれやれという気分で、

「今日は千客万来だな。天下の学生総代さまだが、劣等生の俺に何の用だ？」

「今夜、君と話がしたい。一人きりでな」

食堂は蜂の巣を突ついたような騒ぎになつた。

「（金色のオルガ）」指名だやー」「学生総代から夜のお説いかねに」「そんな

……オルガお姉さまーー」

オルガは周囲の雜音など意にも介さず、言葉を続ける。

「夜会が終わってからでいい。いやせ長くはかかるまづか。」

「いや……それは相手次第だる」

「からんよ。まあ、遅くなつてもかまわないがね。ここを訪ねてきて欲しい」

テーブルの上にカードを置く。名刺のようだ。裏には地図が描かれている。

こちらの返事も待たず、優雅にあびすを返す。裏表と遡かかる背中に、男子学生はもろん、女子学生までもが目を奪われていた。わけがわからず、雷真は呆然と見送った。

「何だ、ありや……」

「夜々がにゅうと顔を突き出」、潤んだ瞳で見上げてくれる。

「雷真……夜々が嫌いですか?」

「またそれか。嫌いじやないって言ひただろ」

「ぐすう……でも、将来的には嫌いになります……」

「ならなうひよ」

「嘘です……」

「嘘じやない」

「……夜々が女氣ひめを皆殺しにしてやる。」

「何とんでもない条件つけてんだー、やめろー」

「もうう、いい加減に自覚してくださー、雷真はああいうタイプに弱いんでー、出る

「……ルバートそこで私を見るのよ?」

ふきなり険悪になり、火花を散らすシャルと夜々。雷真はふきなりかられ、やめられ

椅子を引いて、一人の少女から距離を取つた。

グラスの水を喉に流し込みながら、考へる。

学生時代が、俺に何の用だるや？

そう言へば以前、似たようなことがあつた。

学院に着いて間もない頃、この食堂で風紀委主幹に声をかけられた。

——嫌な予感がする。そして、決定的な違和感も覚えていた。

〔下から二番目〕 ふうのは君だな？」

オルガは確かにそう言つた。その言葉が引っかかる。

そう——それは決定的に、オルガらしくない。

「シャルロットさん——もう雷真のことはあきらめていいださー——」

「貴女こそあきらめたら？ わ、私はあきらめるも何もないけどねー」

にらみ合う夜々とシャルに閉口しつつ、雷真はグラスの水をあおつた。

同刻。ロキは理学部裏手の林で、精神統一の訓練を行つていた。

念動を駆使して自らの体を浮かせ、ヨガの行者のように〈座〉を組む。

相棒のケルビムは大剣の姿で、近くの樹にもたれかかっていた。光点のような双眸が、ロキのやるところを見つめている。

ふと、ロキのこめかみがびくりと動いた。

鋭い視線を走らせる。その途端、木と木のあいだを、白い影が横切った。ふわりと揺れたのは、白いワンピース——

「ソフィー——」

既に駆け出している。ケルビムが機械の天使に変形し、あわててロキを追いかけた。百メートルほど行ったところ、ロキは足を止め、あたりを見回した。気配を見失った。確かに今、懐かしい気配を感じたのだが。いや——無論、幻覚だ。

わかつていて。そんなはずはない。

あいつはもう死んだ。このオレが殺したんだ。

だが、どういへ」とだろう。なぜ今になりて、あんなものを見たか。何かの予兆か。あるいは、第六感が何かを感じ取ったのか。

「——誰だ——」

背後に誰かの気配を感じ、ロキは二十メートルの距離を一瞬で詰めた。エプロンドレスの少女が驚き、腰を抜かしてへたり込む。見覚えのある顔だった。シャルの妹、アンリか。

「ロキ……さんか。」

自分でも不思議なくらい、ロキは失望した。

ソフィアではなう——そんなリヒは、初めからわからうたのに。

「あの、どうかしたんですか……？」

「……何でもなう」

背を向けたとき、がうり、と犬の吠え声がした。

複数の息遣いが駆け寄り合っている。そもそも見ると、黒いオカミの大に黒黒り、した、姉の姿があった。真珠のように白い髪、紅い瞳はロキと同じ色だ。

オオカミ犬のラビを含め、十三頭もの半機巧犬（ガルム）を引も連れてくる。

フレイはラビから降り、スリルリル歩いても、責めるような目をした。

「や……ロキが、アンリを泣かしてやる。」

「なに——？」

ロキが振り向くと、アヘリはあわてて唇を噛んでいた。

「ち、違うまー、あの、あ、うとび、くり……！」

顔に口を出さなかつたが、ロキは内心、狼狽した。

何だ、これは、オレの責任……なのかな？

「その……すまない。驚かせた……ようだ」

「あ、ふえー、私、いや、惡虫やー」などねる。

アンリもやうやく止まつた。お互に気恥ずかしい沈黙。死ぬほどの心地が悪い。空気を変えようかと、ロキは珍しく気を回して、フレイに別の話を振つた。

「えりかしたんだ。ライシンに昼飯を届けに行つたんだろう?」

テビの背中にくへりつけられた、大きなバスケットを示す。フレイはたちまち悲しそうな顔になり、しょほん、と肩を落とした。

「お昼、終わつてた……。学食で済ませたりて……」

「相変わらず、トローニ。あんたは」

「う……」しょほん。

「そ、そりまで落ち込むなー、悪いとは言つてないー」

「あ、フレイさん。だつたら、わたしが一緒にいただいてもいいですか?」

アンリにそう言われ、フレイは暗しをうにバスケットを持ち上げた。

「うん、一緒に食べよう。ロキも。いいやしょ?」

「悪いが、オレは調練に戻る——」

「う、だめー」

腕をつかんで、『止』^{ハセ}と微笑む。

「ね?」

……麗子が狂う。だが、姉の笑顔には弱いのだ。

二二二二二二頭で昼食をむくる。ガルムには朝晩、専用に調合した圓形飼料が与えられるが、おこほれにあすからうと、二二二頭が（お座り）して待機していた。

「美味しいですー、フレイさん、お料理上手ですねー」

サンドイッチを手に、アンリが歓声をあげる。ロキは半個半廢で、サンドイッチを口に放り込んだ。

……普通だ。普通に美味しい。少しは學習したのか、毒物混入はやめたようだ。

姉の手料理を食べる——そんな普通のことだが、少し前まで、想像もできなかつた。

心が安らぐのを感じる。らしくない。でも、悪くないとも思う。

穏やかな時間。その優しさを楽しむ一方で、ロキの心の奥には、得体の知れない不安が影を落としていた。

何かが起きようとしている。また。

元ほど感じた気配、あれは幻覚にすぎないかもしれない。

だが、その幻覚を見せた原因がある。

おそらく、ロキの第六感はとらえていたのだ。

ソフィアが知らせてくれた、なんとか考えるのは感傷的にすみゆるだろうか。

これが感傷ではないとすれば、ソフィアの残り香を連れてくるような連中——

あいつらが、近くで暗躍している？

ふと、ガルムたちが一齊に顔を上げた。耳を立て、鼻をひくつかせ、見えない敵を探すように、周囲に注意を向ける。

「……何か感じるのか？」

ロキは姉を振り向いた。フレイは困ったような顔をした。
「このあいだから、この子たち、ちょっと変」
「何を感じた？ あんたも感じるんだろう？」

「う……ひょっとしたら、だけ？」

自信がないのか。フレイは視線を落とす。それからアンリを見た。

アンリは不思議そうに小首を傾げる。

「……あの人たちが、またくる。……騎士を名乗った、あの人たち」

ロキの全身に貫くような衝撃が走る。

やはり、魔術師とは因果なものだ。優れた魔術師の「氣のせ」だとか、「血の響」だとか、「嫌な予感」なんでものは——
ほほ確實に、当たるのだ。

Chapter 1 女王の誕生日

1

秋の気配が深まる、一〇月初旬の王立魔術学院。

雷真、ロキ、フレイは順調に夜会を勝ち上がっていた。
たとえ、三日前の夜は――

「おふ、決まるんじゃなか?」

「決まる? いや……まだ始まつたばかりだぞ?」

交戦フィールドをぐるりと廻る客席で、学生たちが口々に叫んでいた。

彼らがいるのは《ロロセウム》。古代の円形劇場のよへなぞ! が、夜会の舞台となつてゐる。再開初日に比べれば少ないものの、けつこうな数の学生たち、街の名士たちが詰めかけていて、客席の埋まり具合は六分と云つたところだ。

舞台では立て続けに爆発が起き、黒煙が立ち込めていた。



「押し切れー 虎戦車ー」

清国からの留学生——劉が、車輪つきの自動人形に命令している。

操っているのは虎に似た自動人形。虎の口から砲塔が突き出し、それがガトリング式に回転して、ファイアーボールを次々と吐き出していく。ながら移動砲台だ。

凄まじい火力。空気があふられ、客席にまで熱風が届いた。

あれならば、相手が誰であれ、一方的に押し切れる。だが——

「見る、(下から)一番目) はダメージを負けていないー」

言葉通り、火炎の中から、無傷の雷真と夜々が現れた。

着物の袖が焦げている程度で、二人とも傷ひとつ負っていない。

「やつぱり、あんな程度の攻撃じゃ、あいつは倒せないんだー」

「誰だよ、(下から)一番目) なんて名前をつけたやつは?」

客席の悲鳴を苦笑混じりに聞き流し、雷真は夜々に魔力を送りだす。

「裏から行こう。吹鳴八結」

「はいー」

雷真の魔力を受け、夜々は撃発された弾丸のように飛び出した。

舞台を高速で駆け抜け、弧を描いて回り込む。

虎戦車は生きた虎のように、機敏に跳んで向きを変えた。

「撃撃なん！」叫せるが――

「いや、決まりだ」

回頭した虎戦車の真後ろ、空中に雷真が出現していた。

劉の想像よりもはるかに速く、雷真が距離を詰めていた――

コマのように回りながら、ひねりを加えた斜め上からの蹴り。虎戦車はもんとり打って吹き飛んでいく。分厚い装甲は蹴りの衝撃に耐えたようだが、そのときにはもう、夜々が上空にいた。

「……僕の負けだ――」

悔しげに吐き捨てる劉。それから弱々しく微笑み、雷真に手袋を放り投げた。

雷真が手袋をつかんだ瞬間、わいと客席が沸いた。

「すいぶん手間取ったな」

フィールドの外から、雷真に声がかかる。

振り向くと、機械人形ケルビムを連れたロキル、ラビを連れたフレイが立っていた。二人とも今の戦いを見ていたのだ。フレイはぱちぱちと拍手で祝福してくれたが、ロキルは厳しい視線を投げてくる。

「一撃加えるだけで開始から八分もかかっているや、愚図が」

「文句があるならおまえがやれよー 毎晩毎晩、俺たちにやひせやがうヒー」

「オレが手を下すまでもない相手だ」

「俺を前座扱いするなー 少しは動け怠慢バカー」

「黙れ怠慢バカ。貴様から消されたいのか?」

「ケンカは、めりー」

フレイに仲裁され、雷真^{カミナリ}ヨロキは同時にそっぽを向いた。

翌日は対戦者が現れず、翌々日——つまり昨日。

先の戦いとは打って変わらず、雷真は思わず苦戦を強いられていた。

「夜々ー 下だー」

警告より一瞬早く、地面から跳び突起物が飛び出してくる。

剣のような物体。夜々がかわすと、地面に引っ込んでしまへ。舞台^{ハシ}回化^{ハシガタ}してくるのか、突起が引っ込むと、舞台は元通りきれいな平面になった。

物質に「溶け込む」魔術だらうか。あるいは、物質を変形かわら……。

「確かめてみるか。夜々、森闇^{ムカシヤ}八衝^{ハチショウ}、つかまえろ」

夜々が構えを取って、タイミングをはかる。

直後、夜々の足もとから攻撃がきた！ 今だー

夜々は剣をすれすれでかわし、すり抜けざま、つかまえた。

ところが、触れた瞬間、剣は泡が弾けるように消えてしまった。

「何だ、これは？ せっけんの泡……？」

しゃほん玉のようなものが飛び散る。気を取られた瞬間、夜々の背後にハンマーが出現した。強烈な一撃が夜々を吹っ飛ばし、雷真を巻き込んで吹き抜ける。

「こなま背中を強打して、雷真は思わず頭をしかめた。

「くそ、面倒な相手だな……」

本体が見つからない。魔術の正体がつかめない。

昨日の相手は倒せていない——と云うか、現れなきだ。うかうかしていたら、敵側の救援に駆けつける可能性もある。

急がなければ……と焦りを覚えたとき、誰かが雷真の横に立った。

「下がっていろ。オレが手本を見せてやる」

口キだ。そのとなりに、作動音もなくケルビムが降り立つ。

「よく見ておくんだな。」のオレと、今の貴様の隔たりを——ケルビム——

「I'm ready」

ケルビムの翼から線のような短剣が飛び出し、一直線に飛んだ。

フィールドの片隅に次々と突き立つ。泡が割れるような音がして、その一角だけ空気が

至^{いた}んだ。いや——至^{いた}んでいた空気が、元に戻^{もど}つた！

そこに、一人の男子学生と、カニのような自動人形が潜んでいた。

カニが吐き出す巨大な泡で、可視光を歪めていたようだ。

ケルビムの短剣が再び宙に浮き上がる。相手が反応する暇もなく、短剣はカニの関節を精確に貫き、バラバラにしてしまった。

それで、魔術の効果は消えたらしい。フィールドにもう一体、別の自動人形が出現する。こちらは劍だの槍だの斧だのハンマーだの、無数の武器を全身にくくりつけた、重武装の自動人形だった。格闘戦に主眼を置いた、直接攻撃タイプか。

「あいつら……一人がかりだったのか！」

察するに、カニの魔術で姿を隠し、もう一体が攻撃していただけ——

相手が一人だと思い込んでいたから、魔術の発生源がつかめず、正体が把握できなかつた。実戦ならば絶対にしない油断を、いつの間にかしていたようだ。

タネが割れた以上、もう勝負は見えていた。

板状のバーツを噛み合わせ、ケルビムが大剣に姿を変える。

回転しながら炎をまとい、武装した人形を一刀両断。

かくして、ものの数分で、ロキは二体の自動人形を破壊してしまった。

ロキは雷真を振り向く、

「これがオレと貴様の闘たりだ」

「ドヤ顔やめる! 俺だって「人だとわからんや!」

「気付かんのが今の貴様だ」

雷真は口をつぐんだ。悔しいが、その通りだ。

「直感に優れる者ほど、思考の死角に気付かない。せいぜい気をつけろ!」
冷たく言い捨て、ロキはフィールドのすみ、フレイの方へと戻つてこらへ
ちよ! と小首を傾げて、フレイがロキを出迎える。

「ロキ……ライシンにもりと、強くなつて欲しけりの?」

「……何を言い出した! バカ筋貴。ユリをふう考へたら、そやなる」

「だつて、ライシンにアドバイス……」

「見ていでイラついただけだ。くだらん! とを言へな!」

吐き捨てる、不愉快そうに顔を背ける。

そんな弟を見て、フレイは嬉しそうに微笑んだ。

そして今夜は――

ロキと雷真はフィールドにも入らず、入場ゲートの前で言ふ争つていた。

「聞いたや、貴様。魔王じきじきの誘いを断つたそやだな」

「シャルのやつ……よりこむかのやつに言いやがったのか……」

「魔王の授業を蹴るなど愚の骨頂だな。何のために学院に籍を置いている」

「うるせー俺の深謀遠慮に気付かないバカは黙つてろー」

「バカは貴様だ。オレは謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある。言葉の通じない阿呆、理屈を理解しない阿呆、そして何かと突っかかっちゃくる阿呆だ」

「全部俺だらーつか、そりくりお返しするからなー」

「どうもむどうちです……。あ、フレイさんが戻つて来ました」

横で聞いていた夜々が、ああれたようにため息をつく。
言葉通り、フレイがトリムリと歩いてくる。

「おう、フレイ。今、フィールドの方に行かなかつたか？」

「う……行つた」

「今日の敵はユカーハだ。まだきてなかつたのか？」

「勝つた……」

フレイさかみりと類を紅潮させ、諂ひしげに言つた。オオカミ犬のラビも自慢そうにしつぽを握つてゐる。

一人と一頭の力だけで、ユカの面にか撃していたから。

「マジかよ。ふうの間に……うか、すげえな」

「ふん。やはり注意力が足りんな。オレはとうくに気付いてた」

「うるせえー 気付いてたんなら手助けしてやれー」

「貴様にとやかく言われる筋合いはない。いざとなれば、フレイは《十三人》にささえ対抗できる。この階級の連中に一对一で敗れるものか」

「——何だつて？ いや、それは」

さすがに言ひすぎでは？

雷真は改めてフレイを見た。フレイは「？」と疑問符を浮かべて、可愛らしく首を傾す。頭の横で結った髪が揺れ、胸がたゆんと揺れた。

確かにフレイは力量を上げた。それはこうして、向かい合つただけでもわかるほどだ。だが、ロキやシャルに匹敵するかと言われたら——

(……そ、うか、やっぱフレイは)

強力な奥の手を隠しているのだ。二ヶ月の夏休みが、彼女に切り札を与えた。だとしたら——

「何を呆けている。オレたちには今日のあなたの特機義務がある。さうぞ義務を果たしに行くぞ、最下位バカ」

「おまえとひとつしか違わねーよ九九位バカー」

ロキと罵り合いながら、夜々を連れてフィールドに向かう。

舞台の上で一時間、時間をつぶさないではならぬ。

ふと、ロキの様子がおかしいのに気がいた。

じつと雷真をにらんでいる。仕掛けてくる気はないようだが、殺氣……と言やが、攻撃衝動を感じる。それはもう、肌にびりびりくる感じに。

客席のギャラリーはもう帰り支度を始めている。雷真とロキが戦わないことは、彼らにもわかっているのだ。

三人の進撃を止めるには、（十三人）の登場を待つしかなんのでは。

そんな空気が垂れ込め——の夜、四〇位の（手袋持ち）が脱落した。

2

一時間の（戦場持機義務）を果たし、雷真はロキと別れた。

時刻は午後九時を回っている。舗装された小道を歩いて、雷真は学院の中心部に向かう。寮に戻らないのだと気付いて、たちまち夜々の嫌が悪くなつた。

「雷真……やつぱり……女狐のよ」ふう……？」「ううう。

「ああ。まあな」

気のない返事。夜々は姫姫もれて、心配そうに主を見上げた。

「えへかしたんですか雷真。何か、気になる」

「……ロキのやつ、言ひたよな。フレイはもう《十三人》に對抗できるうやめ」

「はい。それが何か?」

「ロキはハツタリをかますよ^{うな奴}じやない。本当にそう思^{うな}てるんだ。フレイがこの短
期間で、そこまでの実力をつけたんだとしたら……」

「訓練の成果とは考^えにくいでしょ。何か機^き巧^{こう}的な——あー」

「夜々も氣付いたようだ。雷真はうなずき

「あいつらの心臓は魔力を高める機巧装置^{機械装置}で話だ。これまでとは違う、上手^{うまい}運用方法
を思^{うな}ついたのかもしれない。だとすると……」

「……フレイさんだけじゃなくて、ロキさんも……」

ため息とともにうなずく。

夜会参加者の中で、フレイの実力はかなり下位だった。ロキの自主降格や雷真の参加に
よって順位が動いてしまつたが、本来なら第百位——最下位なのだ。

そのフレイが《十三人》級にまで強化された「何か」。

その「何か」がロキにも適用されているのなら。

ロキの実力は、一体どこまで伸びているのだろう?

「……考^えても仕方ねーな。とりあえず、学生総代に会いに行^{こう}」

足を速める。夜々はいじけて小石を蹴りつつ、それでも素直につらうべる。

歩きながらオルガの名刺を確認。地図に示されていたのは、意外な場所だった。

「（）の場所、よくよく見りやグリフオン女子寮じゃねーか」

「よかつたですね雷真……」そんな時間に、男子禁制の女子寮に入れて……」

「瞳孔を開くな。つか、寮監は入れてくれるのか？」

それでも、行くだけ行ってみる。整備された小道を抜けると、三階建ての豪華な建物が見えてきた。どの窓にも明かりがともっている。

シャルとアンリ、フレイもここに寄宿していると思つと、何となく落ち着かない気分になる。夜々が敵愾に察知して、もの言いたげに顔を寄せられた。雷真は逃げるようにな扉を開け、中に入った。

ほわほわした雰囲気の「寮長先生」に事情を話す。

オルガの名前を出すと、以前のように「男子禁制ですか」と突き返される（）もなん、案外すんなり入れてもらえた。学生時代という役職は、雷真が思つてはいる以上に、権力を持つ存在らしい。

オルガの部屋は二階の奥、二室ぶち抜きの大部屋だった。

明らかに特別待遇。おまけに、専属のメイドまでついている。

「（）そのお運び、いたみります」

ドアの前でメイドが丁寧にお辞儀をする。魔力の流れは人間のそれだが、ひょいとする
と超精密な自動人形かも知れない。目つきが鋭く、剣呑な気配を漂わせている。

メイドがドアを開け、雷真を中心と案内した。

入つてすぐは応接間兼書斎になつていた。重厚な本棚が設えられ、参考書が綺麗に整頓
されて並んでいる。右手の壁にはドアがあり、となりの部屋へと続いていた。

「お連れの自動人形はこちらでお待ちを。奥にはおひとりでお入りください」

「えつ——夜々は雷真と一緒に行きますー」

「オルガさまは自動人形を連れておりません。ご理解くださいませ」

「ご理解ください——謙恭する気がまつたくない」という意味だ。

「仕方ないさ。待たつて、客に会うときは刀を置くだろ」

扇をすくめて、夜々をなだめる。何があったとしても、雷真の魔力は壁一枚くらい貫通
できる。夜々の「金剛力」は起動できるだろう。

「でも、夜々が倒れない」と、雷真は……

「言ひとくが、別に変なことはしないからな?」

「先回りするなんて、怪しい……」ソノリ。

「怪しくない——学習しただけだー」

夜々はしなしなと引き下がり、勧められるままソファに座つた。

メイドが開けたドアを抜け、雷真は奥の部屋へ。

部屋は豪勢だった。雷真が押し込められているトータス寮とは比べ物にならない。飾りつきのベッド、ゆったりとしたソファ、魔具の照明に、大きなクロセワト。シャルが使っている部屋より、さらに一段、クラスが上のようだ。雷真是気後れしながら、やわらかいじゅうたんを踏んで部屋の中央へ向かう。

部屋の主は、ベッドに腰かけて髪をふいていた。

「こんな格好ですまない。あ、ようど、シャワーを浴びたところでね」

バスローブ姿。湯上がりのいい匂いが漂つてくる。バスローブ越しにもオルガの起伏が見て取れて、雷真是赤面した。

「ん、この格好が気になるか？、では、寝巻きに着替えようと思つか」

「好きにしてくれ——って待て待て待て——」

「あ、よ、ん、」少し手を止めるオルガ。

彼女がクロセワトから取り出したのは、うすら透けたビニードールだった。

「それの？」が寝巻きだ一、下着じやねーかー」「——」

「だが、私は普段、これで寝ているんだ」

「知るか！、そのまままでいるー」

「意外と純情だな。相当な女たらしだと聞かていたのに」

「それは風評被害だからな？ 名譽毀損で訴えたいレベルだからな？」

言い合っているうちに、メイドが飲み物を持ってくる。

オルガに視線で勧められ、雷真はソファに座った。

メイドはガツン、と叩きつけるようにカップを置いた。熱い紅茶がはねて、狙ったように雷真の顔にかかる。メイドは非礼を詫びるといふか、ムスマとした顔で雷真をにらみ、憤然として退出した。

雷真は顔を手の甲でぬぐいながら、

「それで？ 天下の学生総代さまが、俺に何の用だ？」

「言つただろう。話がしたいんだ。君に興味があるんだよ」

オルガはゆっくりと歩き出し、雷真の背後に回つた。

「編入間もない君が（暴竜）に戦いを挑んだとき——誰がこんな事態を予想しただろうな。各国選りすぐりの秀才たちが、夜会の舞台で子ども扱いされるな！」

雷真が黙つていると、オルガはくすりと笑つて、雷真のとなりに腰を下ろした。近づくとますますいい匂いがする。ぐらつく理性を立て直し、平静を裝う。

「言ひすぎだせ。実際、子ども扱いされたのは俺の方だ——ロキにな」

「あのときは、そうだ。でも今は、その彼にも力を認められている」

ぐうと、オルガが腰を押しつけてくる。からには胸元を広げ、谷間を見せつけるように

「かう

「やうて来たのである。雷真は必死に自刺しながら、

「まわりへといせ。俺に何の用なんだ。俺の何があんたの興味を惹いた?」

「いや、ふう興味だ——と言つたら?」

「さうが早いが、オルガがしなだれがかりであった。

3

その夜、シグムントはクリファン女子寮の屋根に上がり、月を眺めていた。冷たい風が吹いているが、北国育ちのシグムントには心地よい冷気だ。

「……月は変わらんな。これさかも」「

淡い月光に目を細めると、不意に、懐かしい声が耳に甦った。

「竜よ、名は何といふ?」

彼女と出会ったのは、今くらいの季節だった。百年以上も前の話だが。

彼女は正面から巨竜を見上げ、聽するに堪へ笑ひ出した。

「私はエレイン・ブリュー。放浪の騎士だ」

「……産業革命と言われる時代に、放浪の騎士とは時代錯誤だな」

「そ、うか? 魔の山の暴れ竜というのも、古いぶん時代錯誤だと思つた」

裏表のない、まろしい笑顔。

シグムントは苦笑した。おかしなものだ。作り物に過ぎない自分が、人間と同じようにな
過去を懐かしみ、そして愛しく思つてゐる。

回想を打ち破つたのは、とす黒い魔力だつた。

黒い風が吹きつける。何だ……と思つ間もなく、魔力は消えた。
続いて、今の寒さとはまたく間に感覚がシグムントを襲つた。

呼ばれるよ／＼、」の感じ——

近くにいる。私と同じものが。

すいのと音空してあた影が、翼をはためかせ、寮の尖塔に降り立つた。

「よう、兄弟」

月を背負つて、」わらを見下ろす小さな姿。

体を覆うウロコは赤く、金属的光沢を放つてゐる。四枚の翼に、発達した角。といふから
どう見ても《仔童》といつたその姿は、シグムントにそつくりだつた。

シグムントは突然の再会に驚き、親しみを込めて微笑んだ。

「すいぶんと懐かしい顔だな、トール」

「お互にな。おうと七十年ぶりか？」

「七二年ぶりだ」

「相変わらず細かい奴だよ、おまえは——」

「けけけ」と笑う。それから、赤い仔童はふくろうのように首をひねった。

「何ついたかな——そう、ブリュード。まだブリュードに倒われてんのか?」

「倒われるとは言い不得めだ。私は気に入っているがね」

「風の噂に聞いたぜ。ブリュードは没落して、今じゃ土地も屋敷もなつてな。困窮して
るんだるから、まともに肉を食えてるか?」

「いざとなれば自分で獲るぞ。野鳥をね」

「そりやあいい——天下の〈魔劍〉が鳥野郎のマネゴトか?」

馬鹿にしたように笑う。しかし、不思議と腹が立たない。シダメントは穎やかな気持ち
で、無作法な兄弟を見上げた。

「零落したとき、シャルには私を売り飛ばすという選択肢もありたのだ」

「バカ言え、売り飛ばすわけがないだろ?。俺たちは魔劍だぜ?。俺たちが手元にあれば、
金も名譽も思つがまだ」

「それはどうぞらうな。いずれにせよ、我が主は〈家族〉を売り飛ばすような真似はしな
い。ゆえに、私も彼女の〈家族〉でありたい——それだけだよ」

「……そりやあ面白いね」

「宝石のような目を細め、にたり」と笑う。

「せいぜい氣をつけるこりたな、兄弟。魔劍マカラが生まれて一五〇年——七本あつた魔劍マカラも今じゃ三本だ。主を気に入つた奴から死んで行く」

「氣を詰めてやる」や。だが、その上に頭を合はる、

「相変わらず人がいいな、おまえは。……かく、」(1) おおいたのも兄弟の縁、大サービス

「情事もこれでやる」

卷之三

「この街に、あらりがきてるや。三七番目の大いなる侯爵、不滅の存在、ムスベルの炎に唯一耐える者——らるいろ呼ばれちやいるが、魔術師連中に通りがいいのは」

$$[(\pi - \frac{1}{2} \mu X) - \frac{1}{2} \mu^2 \Delta \mu] = \frac{1}{2} \mu^2 \Delta \mu .$$

「やうが魔剣に耐えるとは思えんがね。用心に過したりとはない」

「ヤツが魔劍に耐えるとは思えんがね。用心に越したことはない」
シグメントの頭脳に直感が走った。それほどの自動人形が用意されたのは何のためか。
ひょっとして、シャルを襲うためではないのか？

貴重な情報を、感謝する「

「俺も野暮用がありてね、しほらへない街にゐる。また会おうや」

赤い仔竜は翼を広げ、尖塔を蹴つて飛び立つた。

その後ろ姿を目で追つて——ふと真下を見ると、窓から顔を出す少女がいた。寝巻き姿のまま、不安げに外を眺めている。シャルだ。

シグムントは屋根を蹴り、ぱぱぱと降りて行った。

シグムントに気付くと、シャルは眉を吊り上げて怒った。

「シグムントー」と行ってたのよー お昼のチキンを生麦にするわよー 勝手にいなく
ならないでっていつも言つてるじゃないー」

「シャルよ、気持ちはわかるが声が高い。アンリが起きてしまつた」

シャルははつとして口を押さえた。奥のベッドでは、アンリが眠つてゐるのだ。

気持ちが取まらないのか、シャルはシグムントを抱き上げ、あきうとした。轟がすまい
とするかのように。シグムントは苦笑しながら、されるがままになる。

シャルはベッドには戻らず、しばし、窓際でシグムントを抱いていた。

「シャルよ。昼間の」となら、気に病むことはない

「な、何も気に病んでなんかいないわ」

「魔王ワッカランに言われたことが気になつて、眠れないのだらハハ」

「……貴方あなたには、隠しても無駄ね」

「君に座湯スイをつかわせたのは私だ。君の父、エドガーの代わりにな」

「その話はやめて。お父さまたら、血を見て失神しちゃうたんでしょ?」

「君は十三人に名を連ねる才媛カツイだ。十分にカツカツ魔劍マッケンを使いこなしている」

「……でも、ミス・ウェストンが貴方を使えば、どう?」

シグメントは沈黙した。シャルはうつむいて、

「（魔剣）は伝説級の魔術回路。使うべき者が使えば、マグナスにだつて勝てるかも知れないわ。少なくとも、今の私じゃ……マグナスには全然歴が立たない」

雷真が学院にきて間もない頃、マグナスと一緒に発の場面があった。

あのとき、シャルとシグメントもマグナスの力を目の当たりにしてる。今五つければ、シャルに勝ち目はない。それは、間違いない。だが――

「他あとはる」とはない。人間は二十年、ねずみは二ヶ月だ

「……何それ？」

「成熟に必要な年月だ」

「ねずみの成長ほど單純じやないわー」

怒り出すシャルに、禮んで含めるように首う。

「私はかれこれ百年以上ブリュー家にいる。代々のブリュー家にはおおむかんな人形使いがいた。幼い時には天才と呼ばれながら、大成しなかつた者もいる。一方、凡才と呼ばれながら、五十年かけて名声を得た者もいる」

「大叔父様と、ひいおじいさまね？」

「うむ。彼らと比べても、君の才覚は見事なものだ。じきに力はつく」

励ましたつもりだったが、シャルは悲しそうな目をした。

「「ニコレ」 しゃ遅いわ。私は今すぐ強くなつた——うーー」

「シャル、アハしだ?」

シャルはシタムントを取り巻き、その場にしゃべりだ。あいと想う間もない。シャルは空気に溶けるよそいにならだ。はれり、と小さな音を立てて、シャルのネグリジェが床に落ちる。

4

オルガに体重をかけられて、雷真はあひけなく押し倒された。相手に殺気がなかったので、油断したやうだ。もう、油断だ。むごさんむじょさん心地よい、胸の感触に気を取られたからではない。斷じて違う。

生乾きの金髪が、雷真の鼻先をくすぐる。オルガは髪をかき上げながら、藝術的な美貌を近づけた。雷真は本能の暴走を必死に抑へといふ——桜色の唇が触れる前に、冷靜ぶつた声を聞いた。

「芝居はやめる、アリス」

びたり、とオルガの動きが止まつた。

「野暮じやないか、ライシン・アカバネ。ほかの娘の名を——」

「死んだはずはないと思つていた。その他のメイドはシンだろ？」

ふう、とため息をひとり。

オルガは人が変わったように、不敵な笑みを頬に刻んだ。

「さすがだね。どうして僕だとわかったんだい？　誘惑の仕方があまりにも僕らしかったかな？　それとも、僕のおっぱいを覚えていた？」

「違う」 怪しいと思ったのはもう以前、最初におまえと話したときだ

「最初？」 いの部屋に入ったときだ。

「昼間、食堂で会ったときだよ」

「……冗談だらう？」

「おまえ、最初に言つただろ。【アーリス】『番田』というのは君だな？」

「言つたね」

「まるで、俺の顔を知らないような口ぶりだ」

それで、アリスは自分のしゃべりに気付いたようだ。

「なるほどね。オルガは極めて優秀な人物、学生全員の顔を覚えてる。まして君は夜会の

参加者一本物のオルガが君の顔を把握してないはずがない」

苦笑するオルガの姿がほやけ、その下から見覚えのある顔が現れる。

プラチナを延ばしたような銀髪。体のあはオルガよりもふくぶん細身だ。

雷真はアリスの眼を見つめ、わずかに微笑んで言った。

「言いたい文句は山ほどあるが——とりあえず、生きててよかつたな」

「……すぐに考えを改めるさ。死んでいた方がよかつた、うてね」

「事は露見したんだ。とりとく、俺の上からとけ——」

セリフの途中で、ちゅ、ひとやわらかいものが雷真の唇を噛みへ。たつぶり三秒。いや、もうひとか。

アリスははむはむと甘噛みするように、雷真の唇を食つた。

「な、な、な……何しやがるー、おまえー、いきなりー」

「直前まで余裕たつぱりだったのに、実際にされてしまふと動搖するんだね」
べろりと唇をなめ、楽しげに笑う。ほんのり染まつた頬が実に扇情的だ。

「僕も照れたよ。本気のキスは初めてだったからね」

「いいからとけー、振り落とすぞー」

「はいはい。——ちゃんと撮れただろうね、シン？」

雷真はぎょっとして飛び上がつた。

ドアの前にメイドが立つてゐる。その手には写真機があつた。

「もちろんです。恋愛のお嬢さまが別の用途に使えるような一枚を撮りました」

「OK、シン。後で泣かすからね」



「でめえー ハメやがったなー」

「雷真はシンに煮びかかろうとした。だが——

「待ちなよライシン。さもないと大声を出しちゃうよ?」

「そう言われてしまつては、もう身動きが取れない。

「寮長や学生たちはともかく——可愛い相棒さんに知れたら、困るよね?」

どうと冷や汗が出た。そうだ、ドアの向こうには殺人鬼がいる——

アリスは小悪魔っぽく笑つて、雷真を自分のとなりに座らせた。

「平和的にいこう。なに、君のボリシーに反することは要求しやしない。ただちょっと僕のお願いを聞いて欲しいだけだ」

「断るー」

「いいのかい? すぐにでも現像して、相棒さんに見せちゃうよ?」

「俺の相棒をナメるなよ。そんな手に引っかかるわけが……」

夜々がどんな誤解をするかは、火を見るより明らかだった。

結局、雷真は大幅に譲歩した。

「お……おまえの言いなりになるつもりはないが、一応、話だけは聞いてやる」

「なに、簡単なことだよ」

雷真はげんなりした。そんな前置きをされて、簡単だったためしがない。

「僕と（婚約）して欲しいのか」

「言われた」とが理解であるまで、数秒かかった。

「……婚約… おまえと…」

「オルガ・サラティーンとね。」と言いつても、夫婦になるのは僕だけ。悪い条件じゃないだろう？ 僕はきっと、床上手になるよ。」

「俺がそんな要素に釣られると思うなー」

「重要な要素さ。それに僕は面倒な女じゃない。君が色魔の悪魔を發揮して、よその女に

悪さをしたって、八分の七殺しくらいで許してあげるよ」

「七転八倒してるじゃねーかー つか、色魔扱いするなー」

「どうだら…」

じり、と口をのぞき込んでくる。

婚約と聞いて、真っ先に夜々の顔が浮かんだ。

空想の夜々は真っ暗な目をして、雪真の首を絞めようとして

ぶるぶるとかぶりを振って、夜々のイメージを頭から追い出す。すると今度は、親同士が決めた許婚の顔が浮かんだ。

楚々として穏やかな微笑み。「お姫さま」という言葉が似合う、たおやかな、しかし凛として美しい、一輪挿しの白薔薇のような少女。

「田輪は雷真さまをお慕いしております。それは終生、変わらない気持ちです」
そりと雷真の胸に手を触れ、彼女は言つた。

「ですから、どうか——雷真さまの胸のうちに、田輪の居場所をいたさるませ」
それで、覚悟が決まる。

「断る」

「おや、断つていいのかい？」

「おまえと婚約するなんざ、」めんだ」

アリスは意外なほどすんなり引き下がり、顔を背けた。
頬を涙のしづくが伝い落ちる。雷真は仰天し、そして狼狽した。

「おいちょうと待てー 何だよそれー」

「……むとじやないか、ライシン。女の子が勇気を出し、結婚してくれって言つたんだよ。それをそんな言い方でソテにするなんて」

たまらなくなりたように口を押さえ、すん、すん、と鼻を鳴らす。

「おい待てよー 嘘泣きやめるー 勇気なんか出してねえだろ！ あと、おまえの場合は
求婚じゃなくて脅迫だからなー」

「まあそうだね」

ケロッとして振り返る。本当に嘘泣きだったー

アリスは一軒“あらふ”と唐からみのある笑みを浮かべた。

「返事は明日でいいよ。ひと晩じいへん考えるとこ」

「……ふやに余裕だな」

「あせるり」となんて何もなさが。君はあく、とりへに像のものなんだ。箭を射るにはがや馬から——東洋の格言だよ」

意味ありげにラインクする。悔しが、それは極めて魅惑的な表情だった。由紀と翠華が唇に吸い寄せられてしまふ。

先ほどの感触を思い出しじても立つでもなれなくなる。雷真は急いで立ち上がり、メイドの殺気に追は立てられるよつたとして、オルガの部屋を後にした。

5

女子寮を出た雷真は、トータス寮近くの林で、三時間ほん自主訓練を行った。やがて、すっかり夜も更けた頃、夜々が怒りて呑み込んでいた。

「もー雷真ー 夜々の話を聞いてますかい？」

とすりと背中に当たつてくる。雷真是前にりんのめりながら、

「雷真が夜々のお布団に潜り込んで、結婚を迫つた父親の話です」

「そんな過去はない——捏造するな——」

「雷真……おうきの女狐と何かあつたんですか?」
ぎく。

唇に意識が向ひてしまふ。雷真は即座に否定した。

「何もない……や、おまえが気にするようなことは何もない……や、」

「視線が泳いでる~~~~~」

追及されるとボロが出来やうだ。雷真は訓練を切り上げ、寮に戻るつもりだった。

早足で歩きながら、アリスとの会話を思い返す。

「君はもう、とつくに僕のものなんだ」

あれは一体、どういう意味だらう?

……躊躇がする。

何か仕掛けてくるのか。仕掛けてくるとすれば、何を……?

考え込んでいるうちに、林を抜けた。

月明かりの中、古びたトータス寮が見えてくる。

エントランスの手前に、男子寮には不釣合いなものを見つめた。

少女だ。こんな時間に、制服姿の女子が立つてゐる。

一瞬、シャルかと思った。背格好がよく似ているし、肩に仔童が乗っている。

だが、魔力の波長が全然違う。シャルに比べると、彼女の魔力はひとくび平凡だ。それで、正体がわかつた。シャルの妹アンリだ。

初夏以来の制服を着て、玄関わきの間に潜んでいる。こんな時間にたまねぐるなみ、尋常ではない。雷真は急いで駆け寄り、小声で呼びかけた。

「アンリ、どうした？」

「ライシンさん——あの、大変なんです！ 気がついたら、その——メイドの衣装は洗濯しちゃつててだから、急いで走つてお——」

「落ち着け、アンリ」

低い声でシグムントが助言する。のんりん、ヒアンリの胸を口で突つぶす。

「説明するより、見せた方が早い」

「……そうだね。ありがとう、シグムント」

アンリはそつと、水をすくうよくな手つきで、両手を差し出した。

「あの……お姉さまが大変なことになつたんです」

「あ？ シャルが大変なことに……？」

大変も何も、シャルの姿が見当たらない。わけがわからないまま、雷真はとりあえず、アンリの手に視線を落とした。

アンリが両手で持っていたのは、丸めたハンカチだった。
 いや、丸めたと書くより、巻きつけたと言うべきか。小さな人形のようなものが、ハン
 カチにくるまっている。

月光を受けて、ちらちら光っているのは——金髪だ。

「何だこりや？ 妖精……？」

「雷真一 これ——」

夜々の方が先に気付き、小さな悲鳴をあげた。

「シャルロットさんですー」

「…………あ？」

雷真は間の抜けた声を出し——一瞬後、びくうとのけぞりだ。

アンリの手の中にいたのは、確かに、人形サイズのシャルだった。



Chapter 2 エルモの小妖精

1

時間は少し戻って、夕刻。夜会が始まる前のこと――

ロキはコロセウムに向かうべく、ケルビムとともにラファエル男子寮を出た。学院を南北に貫くメインストリートを南へ。中央食堂を通り過ぎたところで、人待ち顔の女子学生に気がついた。

学生時代、オルガ・サラディーン。執行部役員専用の白い礼服を着ている。身にまとう雰囲気はきらびやかで、ある種の威圧感すら放っていた。

〔待っていたよ、〈剣帝〉ロキ〕

誰に対してもわけ隔てなく向けられる〈金色のオルガ〉の微笑み。

「れほど近くで見たのは初めてだ。彼女の気品に、ロキは若干、鼻白む。」

〔君と話がしたい。少し時間をくれないか?〕

〔悪いが、オレはこれから夜食に向かうといふだ〕

「やせ、歩かながら話そ。ライシン・アカバネの『いふや』」

びくり、とロキの眉が動く。

その変化を察しむように、すかうとオルガの眉が細められた。

「君はなぜ彼と戦わなふ?」

「あなり核心を突いてくる。

「学生たちは君と彼が（仲間）だと言つる。だが、そやせなふだわや。やなぐとも君には、彼に対する敵意がある。ふや——怖れと言つぐもかな?」

（怖れ……ふ。）

少し前のロキなら、むうとしたかもしない。

だが今は、オルガの言葉を胸中で笑い飛ばす余裕が生まれている。

「気を悪くしないで欲しい。だが、君はライシンの実力を誰よつて認めつるはやうだ。君の道を阻む強敵だとね。なぜ、彼を倒そつとしない?」

「あんたの知りたい? じやない」

「当然でみゆづか。一対一で勝ちたいからだ」

「——ふう、いや意味だ?」

「今の君では返り討ちに遭う。お姉さんの手助けが必要だろ?」

「……あん。何いじつねえ」

「このままではいいのか？ 君は彼を利用しているつもりかもしれないが、彼は戦いを経るたび、ますます力をつけていくぞ。君を上回る速さでな」

ロキはびたりと足を止め、うすく笑って反撃した。

「煽つても無駄だ。あんたの方こそ、なぜオレたちを戦わせたいんだ？」

「挑発には乗つてこない……か。手こわいな」

オルガは両手を軽く上げ、降参のポーズをした。

「私の椅子は執行部にある。余計な気遣いを要求される、つらい立場でね。君とライシンが共闘していくは、夜会がつまらなくなるだろ？」

「ふん、賭け試合か。いい気なもんだな、金持ちともは」

「ロンドンのアクメーカーは——のところ大忙しだよ。今から売りに出すふんは、大幅なオフズの修正が必要だからね」

蜂蜜色の金髪をかき上げ、あきらめたようにきびすを返す。

「できればライシンと戦つて欲しいのだが——無理にとは言わない。友達はかけがえのないものさ。今夜の試合も健闘を祈る」

「待て！ オレとあいつが友達だと？ オレたちは——」

今度はオルガが取り合わず、手を振つて去つていく。

腹立たしいほど優雅な所作。色づいた街路樹の下、去り行く背中は絵画のようだ。

ロキは遠ざかるオルガをにらみ、しばし、込み上げるいら立ちに耐えていた。
そんな主を、ケルビムが光点のような目で、不思議そうに見つめていた。

2

雷真は忍び足で階段を上がり、アンリを自分の部屋に招き入れた。

室内は相変わらずオンボロだったが、夜々が徹底的に掃除したおかげで清潔だ。
その夜々は一階のエントランスで硝子に電話をかけている。今この部屋にいるのは雷真
とアンリ、シダムント、そして小さなシャルだけだ。

雷真はアンリに向き直り、勢い込んでもらった。

「それじゃ話してくれ。これは本当にシャルなんだろうな？」

アンリの手にあるものを示す。仔ねずみほどのサイズのシャルが、不機嫌そうに腕組み
をして、雷真をにらんでいた。

「そりへりに作りたミニチュア自動人形とか、幻術のたぐいじゃないよな？」

「違うわよ無礼者ー ああ、その口は節穴なのね？ チーズの穴なのね？」

小さくなつたシャルは、声が小さく、波長も高い。だが、耳を近付ければ、それとなく
言葉がわかる。雛鳥のさえずりに似ていた。

アンリは途方に暮れた様子で、姉の小さすぎる頭を見下ろした。

「お姉さまです……。小さくなる瞬間を、シグムントが見ていました」

「じゃあ何だ。魔術か、これ？」

雷真はシグムントを振り向く。シグムントは「ぐりと首を上下させ、

「消去法でな。魔術でなければ、これはできません？」

「魔術なら、別の魔術を重ねがけすれば、解けるんじゃないか？」

魔活性不協和の原理を逆手に取る発想だ。だが、シャルはかぶりを振った。

「とうくにやってみたわよ。でも、だめなの。私の魔力は全然安定しなくて、上手く発現

しないし……アンリの魔術はからないし」

「任せろ。俺の新技で、ありつけの魔力をブチ込んでやる」

「待て、雷真。素人考へで無茶をするな」

シグムントが雷真の肩に飛び移り、慎重な声で制止した。

「効果の強さから言って、單純な現代魔術ではない。儀式魔術に近いようだ」

「儀式……大昔の？」

「術式がわからないまま、別の魔術をぶつけるのは危険だ。魔術と魔術が打ち消し合って

くればいいが、下手をすれば、シャルの体に反動がくるかも知れん」

「……反動、って言うと……」

「だったら……効果が『永久』になつてしまってな」だ。魔術効果が固定され、これが《自然》の状態になる

「それ、元に戻らなくなるって」「いやねーかー」

「可能性の話だがな。古い魔術には、そういう危険もあるのだ」

そんなりスクは冒したくない。雷真は力技を断念した。

アンリは不安げに顔を見つめている。シャルはいつも通り強気の表情を崩さないものの、かすかに震えているのがわかつた。

「とりあえず執行部に行こうぜ。夜会参加者の妨害かも知れない」

「だめよー」

シャルは面下に反対した。

「私を恨んでるやつはこうないいるのよ。私がこんな状態だつて知られたら……」

「何もさせねーよ」

「簡単に言わないと……それに……か……か……か……もの」

なるほど、シャルは人一倍プライドが高い。一流の魔術師を気取つていたのに、誰かの魔術にあつさりやられたなんて、煩らかくないのだろう。

「じゃあ、医務室に行くか。まずは医者に診せん——」

「絶対、嫌ー」

先ほど以上の抵抗。シャルの意外な剣幕に、アンリも雷真も面食らった。

「クルーエル先生に診られるのだけは嫌ー あんな変態ー」

「いや……あの医者、あれで腕は確かなんだぞ?」

「雷真よ、シャルが言つているのは技術のことではない。シャルは入学早々、あの医者の敗戦を思ひきり躍り上げていてな」

そう言えば以前、クルーエルはシャルを見て内股になつてゐた。

「だから、あの医者は絶対ダメー 診察と称して何をされるかわからないものー」

「おい、それじや全然話が進まねーだろ。夜会執行部は駄目、医務室は駄目」「だから、私たちで解決するのよー」

「そんな無茶な……」

雷真が困惑してくると、かちやりンドアが開いて、夜々が戻つてゐた。

「おう、夜々。硝子さん、何だい?」

「はい。おそらくこれは〈呪い〉や〈黒魔術〉のたぐいだるがね」

「シグムントが言つたのと同じ結論だな。それで?」

「硝子は、〈呪いは専門外〉だから……」

「……だよな」

機巧魔術が体系化される前——中世以前の魔術は謎が多い。失われた秘術も多いと聞く。

洋の東西で形式もかなり違う。専門家に当たらなければだめだ。

黙りていたアンリが、おずおずと口を開いた。

「あの……キンバリー先生に諭しただけのせいで……」

「ああ。俺も、それしかないと想ひたのだ」

「嫌よー」と以上、キンバリー先生に借りを作りたくなふわー」

やりぱりシャルが反対する。雷真はうらに黙りだ。

「わがまま[口へなー]誰のためにやりてんと思ひてんのだー」

「何よー。これくらい当然でしょー。私のティアム……」

「ティアム……何だのヤー。」

「なり、なな何でもならわよ[寂想]——」

ふんふんないと乱暴にドアが叩かれて、一回に緊張が走った。

「おふう、イヤムー。やりあたの何か話しがあるぞー。でも、女郎か、女子を連れ込んでるんじやねーよな?」

寮監が嘆息[かき]つけたようだ。雷真はあわてて、

「悪いー。ふりもの調子で夜々が暴れてるだけだー」

がーん、と衝撃を受け、夜々は涙ぐんだ。

「ひどいです雷真……夜々をそんなふうに使はなんて……」 むや。

「あー、すがんー、ふや、でもほら、普段のおまえの言動がだな——」

「雷真は馬鹿です……。うー、うー……」

「ひどい男。最低の変態野郎ね。女の敵ね」

「おまえのせいだろ?」

「おふうライシンー」

「何でもねえー」

「モーハー、ふたやみに夜は更けていく——

3

「シキルよ、おや起きやあ」

ベッドがぐるぐる揺れ、シキルは目覚めた。

ベッドだと思ったのは、シグメントの体だった。小さな体が寒えてしまわぬよう
に、シグメントにぐりついで寝ていたのだ。

「寝たって気がしないわね……」

ふわ、とあくびをした途端、巨大な雷真の顔が視界を埋め尽へした。

「おや、シキル。起きたから心配したぜ」

寝起きの顔を——」かわあくびの瞬間を——見られてしまつた。

しかも、シャルは半裸だ。パンカチを巻いただけで、下着もつけていない。シャルはかああああと赤面し、とりあえず、思いつしまま罵つた。

「変態——最低の変態ね！ レディの寝起きを襲うなんて、ほんと最低——」「すいぶんだな。つか俺の部屋だからな？」

雷真は笑つて受け流す。シタムントがシャルの代わりに非礼を読みた。

「すまんな、雷真。シャルは寝不足気味で寝顔が悪いのだ」

「ああ、そうか。こんな状態じや、不安になるよな」

「いや。君の部屋で眠るという行為が、ささか刺激的すぎ——」

「ただ黙りなさいシグムントー わかしな言ふを言わないのでー」

背中によじ登り、翼を引つ張る。シタムントは愉快そうに笑つた。あと、雷真がまじまじとからを見ているのに気付いた。

「な、な、……観見てるのよ……」

「ふつまでもパンカチ一枚つてのは可真相だな。何か着るものはないのか」

「そ、そんな卑猥な目で見てたのねー いりち見ないでよー 変態ー」

「卑猥じやねえー つか、おまえこないだ水着でウロついてたじやねーかー」

「雷真~~~~~シャルロウトさんで着せ替え遊びなん~~~~~」

怒った夜々が乱入してくれる。

「雷真のお人形は夜々なのに——夜々も着せ替えしてへだて——まあ——」

「脱ぐな——そして自分で着る——」

雷真は半裸の夜々を押し返しながら、シャルに向かって言つた。

「とりあえず、今日はキンバリー先生のところに行くからな。昼休みか——最低でも五時
が終わったらすぐ行くぞ。いいな?」

「わ……わかったわよ」

シャルは不承不承うなずいた。

「そんな顔するな。キンバリー先生なの、ありより恩恵を授けてくれるや」

「……そうね」

「雷真のシャルロットさんを見る日……ふやかし……性的……
ほのこりした空氣を、夜々のらと顔が合無しにする。

「妙な面い方するな——性的も何も、ユーフレーバねえだら——んなの——」
「でもます一 純粋で突つこて並んだり——全裸にして一筋に握りたり——

「はあ、全裸……はふらふらして、握るの……何を?」

「ふやかし、ライシル、レーナー……」ふやかしの顔を

「やうやく待てば 何の話だ?」

「ヤレ……エロエロのヤレヤレ……雷真……」

その光景をイメージしてしまふ。シャルの顔から火が出た。

「お、最低の変態野郎ねー。願みそがわいてるんじゃない?」

「おまえらだからな? おまえら、俺の想像のはるか上をいくからな?」

雷真は頭をがしがしとおもむかし、「ほんと頑固した。

やがて力尽き、悟りたもへな表情になりて、

「……もういい。いいあえず、何か食い物取りてくる」

「あ、夜々が行きかずー。雷真がハチミツを取りてこなづかにー」「……ハチミツの何が駄目なんだ?」

「シャルロットさん、垂らして舐めようなん?、考えが甘すがますー」

「しねえー、あと全然上手くねえー」

シグムントが立ち上がり、翼を広げて、艦隊く飛んだ。

「やっぱ、私はアンリのところ行く。シャルを心配してふるだらやからな」

「おややくー、私を置いていくの?」

「君は雷真とこに残れ。その方が安全だ」

言うが早いか、懇切を盡り、外に飛び立つ。

シグムントがなくなりて、シャルはたちまち不安になつた。

「……何よバカ！ 外道！ 冷血漢！ 人でなし——っ！」

「まあまあ。大人しく巻と籠を着してよいか」

雷真が慰めるように言う。そんなふうに言われると、それも悪くないかと思うでしまや。シヤルはあわててかぶりを振つて、いつも通り憎まれ口を叩こうとしたのだが……。

あいにく、賤御の言葉は出でこなかつた。
それが何だか屈辱的で、シャルは赤くなつた顔を背けた。

1

雷真は夜^や、シャルと一緒に、自室で朝食をとりました。

シャルの食事は困難を極めた。第一に、彼女のサイズに合う食器がない。そして何より、シャルに比べて、食べ物があまりにも巨大なのだ。

〔アーティスト・モデル〕

[5]

「若山、 そういうや黒パン出すのつて、 」のオンボロ寮くらいか？」
「そ、うじやなくて……ああもう、 ハチミツ一 ハチミツを頂戴！」

「はふはふ。か」「リサの事」「た」お嬢れお——」

席を立とうとしたが、やうと横がのビンが差し出された。

「何だ夜々。取つてやめたのか」

「……シャルロットさんは小さうのド、もろおのみ込みにへぶかと鳴つて」

そのはを回したが、せりと前へ。不機嫌そうだが、何だかんだでシャルを気遣つて
いる。雷真は嬉しがりて、普段は口わならうないことを口にした。

「優しくな。おおれのせつらへる」俺は好きだ。

「雷真……の」

あやん、と夜々の心臓が鳴る。夜々は顔を紅潮させ、興奮のあまり、ベキヨウのビンを
握りしめた。幸い、ビンの破片は誰にも当たらなかつたが——皿の上にビリュウとベキ
ヨウがこぼれ落ちた。

皿の上には、黒パンにしがみついた、シャルがいた。蓋に足を取られ、あひけない転倒。
ものの数秒で、髪とごく肌ごくごくごくのベタベタになりてしまつた。

重苦しい沈黙。やがて、はりとしだらうに夜々が口を覆つた。

「雷真……やうがりシャルロットさんを舐めよべと……の」

「ビンを割つたのはおまえだわー」

「そなれよに仕向かたのは雷真です——おかしく思つたんだす、雷真があんな甘い

言葉を言うなんや……うー

二人のやり取りをよそに、シャルは皿の上でふるふる震えていた。

「シャル……まあ、その、流つてやるよ」

「ふざけないで変態ー自分で洗うわよー」

シャルは両手を振り上げて怒った。……が、力なく手を下ろし、皿の上にくたり込んだ。怒りが限界を超えて、むしろ悲しくなりてしまつたようだ。普段なら「こっち見ないでよ変態ー」くらい言いそうなものだが――

「ちゅ……おい、泣くなよ」

「だつて……情けないじやない、こんなの……の」

天下の《暴竜》と恐れられたシャルが、今はあまりにも無力な存在だ。

雷真はシャルに顔を近付け、できるだけ優しく囁いた。

「もうアレだ。今すぐキンバリー先生のところに行こう、な？」

シャルは反論せず、こくんとうなずいた。可哀相なくらい弱りきっている。

そんな彼女を、小鳥を抱くように両手で包み、雷真は部屋を後にした。すまなそうな夜々を連れ、寮を出て理学部の校舎に向かう。

最上階、キンバリーの研究室に直行。ノック数回で、「入れ」と返事があった。キンバリーは在室していたようだ。ずいぶん、朝が早い。あるいは徹夜明けか。いずれ

はしても、キンバリーに疲労の色はなく、普段通りの顔色だった。

「早いな、先生」

「私にも眠れない夜はあるぞ。新しくおもちゃが届く、その前日となると――何か届くのか？ 邪魔したか？」

「かまわんよ。君も楽しみなおもちゃのひとつだ」

「雷真……キンバリー先生のおもちゃなんだ……うー」

「これら、何とんでもない贈達にしてんだー」

「それで、今朝はみんなお楽しみに勧められたんだ？」

雷真は無言で両手を差し出した。

手の中に座っていた少女を見て、わすがのキンバリーお皿を取張った。ふりもの銀縁眼鏡をかけ、シャルに顔を近付ける。

「えーと、シャルロット。昨日よりおやふんやめになりだなー」

シャルは応えず、くしゃくしゃ泣いた。

「子いふん弱いだらぬな。それに、ベチャッままみれじゃなか。おもた舐め――」

「違うー あんたまで妙な勧説いするなー」

「ふむ……。おまは擦にひんむいて、目視で確認だ。男は出て行け」

研究室を追い出されてしまふ。雷真は仕方なく、アロアのすみに向かった。

休憩所のソファに座って、窓の外を眺める。

静かな朝だ。太陽の光も、小鳥の声も、普段と何も変わらない。
ふと、昨晩、シャルが言いかけた言葉を思い出した。

（ティファーン……って何のことだ？）

わたしのティファーン——

「ティファーン……防禦印ディフェンシブかー」

シャルにわざいた銀のゼンタム。ルーンが刻まれた護符の「ルーン」。
そう言えば、夏休み——そのことやシャルとケンカした。
つまり、シャルは「」を言いかけたのか。「私の防禦印ディフェンシブを失くしたくない」。
「シャルのやつ、まだ根を持ってたのか……」

「お姉ちゃんがかしましかったか？」

階段から顔をかかる。見れば、アンリが上から下へ「」のそりを。ハプロンヒレス姿
で、大きな洗濯かごを抱えている。

「おはようございます。ライシングさん」

「おう、朝から洗濯か。働き者だよな、おまえ」

アンリは嬉しそうにはにかんだ。それから、心配そうに眉をひそめた。

「あの、お姉ちゃんは？」

「今、キンバリー先生が診てくれてる」

「よかっただ——あ、でも、それじゃ、お姫さまが机に持つて居る「レジマ」は…」

「シャルにもらったお守りを、俺が失くしたり一か、壊しかねりやれ」

「お守り…」

「夜会の前にもらつたんだ。ベンダントやが、裏のルーンが彫つてある」

アンリの顔色が変わつた。アンリは少く書かれめで、

「それは、銀の……六芒星が刻まれた……」

「知つてゐるのか?」

「それ……ライライおばあさまの形見です」

「——

「おばあさまはルーン文字に造詣が深く。コレクションしてらしたんだ。私もルーンの指輪をもらいました」

「……マジかよ。買つたもんだとはカリ……だいじ、ビカンカだいたやー」

シャル自身、買つたような口ぶりだったのだ。

だが——シャルの性格なら、自分から「形見だ」なんて言つはずがない。

新品に見えるくらい、大事にしていたのだ。

黙り込む雷真に気を利かせたのか、アンリはもう何も言わず、階段を上がりて行った。

洗濯物を干しに、屋上に向かったようだ。

(はあさまの形見かよ……そりや愁るよな……)

シャルに謝つた方がいい。だが、蒸し返すのも気まずい。どうしたものかと頭を悩ませていると、廊下の向こうから夜々の声がした。

「雷真、キンバリー先生が呼んでますよ」

雷真は立ち上がり、重い気分で研究室に戻った。

5

ドアを開けると、先にシグムントが到着していた。

奥の机の上で、シャルと並んで座っている。そのシャルはと言えば、汚れたハンカチの代わりにリボンを体に巻きつけて服にしていた。「アゼントは私よ！」なんていうバカな台詞が脳内再生されて、雷真は自分を絞め殺したくなつた。

机の前には部屋の主、キンバリーがいる。分厚い医学書のようなものを広げ、難しい顔で考え込んでいた。

「どうだ、先生。解説の方法は見つかったのか？」

キンバリーはぐるりと椅子を回し、落ち着いた声で答えた。

「まずは診断結果を伝えよう。結論から言えば、〈呪い〉だな」

呪いは魔術の一カテゴリーだが、その定義、区分はわりと曖昧だ。

「付与魔法、もしくは制限魔法と呼ばれることがある。機巧魔術以前の黒魔術を指す」とが多い。効果持続時間がぐらはうに長い半面、複雑な手順や多様な材料を必要とする」

「……俺の田舎にもあるぜ。わら人形を相手に見立てて、針を打つ」

「典型的な〈頭感〉スタイルの呪術だな」

「しかし、女史よ」

シグムントが疑問を口にする。

「シャルはどの魔術師に呪いをかけるかし、容易ではない。ブリューーの一族は靈的に強化されている」、シャルもまた、日常的に防御している

「相手はかなりの使い手だらう。そして、驚嘆すべきは技量だけではない。呪いは織して強力なものだが、リスクもある——そうだな、シャルロット？」

講義中のような口調。シャルはひいへらしたようだが、あわてて答えた。

「呪詛返」……とか

「そうだ。呪いの原動力は術者の怨念……かけた者と術の結びつきが強いぶん、プロフタされると効果がはね返ってくる。効果がなかつた場合も同様だ。つまり、敵は相当な覚悟を持って使つたところだ」

首筋に刃物を当たられたような気がして、雷真は硬直した。

ひょっとしたらと思ったことが、今はうきりと、確信に変わった。リスクなんとかまいなしで、効果的な手段を好む者——心当たりがある。シャルは不安げに、しかしはつきりとした声でたずねた。

「それで、先生。私は何の呪いをかけられたんですか？」

「著明な症状——身体構成物質のトータルな縮小——から見て、〈ニーベルングの呪い〉か、その亞種と見て間違いないだろう。源流はドイツの片田舎に伝わる強力な呪いだ。敵を小妖精に変えてしまう」

小妖精。聞き慣れない単語に、夜々が首をひねった。

「おとぎ話に出でくる……宝物を守つてゐていう、意地悪なおじいさん。」

「そのステレオタイプは呪いを受けた敵部族のイメージだろう。この術の厄介なところは、弱い怨念で発動でき、無差別な攻撃が可能な点。それから、肉体との親和性が極めて高く——現代に至るまで解説の方法が確立していない。鮫や白鳥は王子に戻れるが、小妖精が人間に戻るというのは、あまり一般的じやないだろう？」

「待つてくれ——それじゃ、呪いを解く方法はないのか？」

雷真はあわててキンバリーに詰め寄った。キンバリーは真顔のまま、

「いや、ある。実に簡単な方法だ」

「おやせんなよ。それを早く教えてくれ」

「呪いをかけた本人に、解除の呪文を教えてもらえ」

卷之三

「（強制的解説）は金庫を鍵なしで開けようとする行為だ。金庫に錠をつけたり、ダメにしてしまはりである。だが、鍵があれば、そんな心配はない」

目の前が真っ暗になつた。それは実質、敵に屈服する(?)ことを意味する……。

キンパラーはシャルに向かって、座かめるよろに訊いた。

「シャルロット。相手に心当たりはないのか?」

「敵意や違和感を感じた」ことは？ そういう物体に触れたことがありますか？

「わからな……わからな……」

シャルはうすくなり、頭を抱えてしまつた。極度の不安にからかれている。あまりにシャルが氣の毒で、雷真は良心の呵責けそくに苛まれた。

物の事で、事情を尋ねまつてお詫びを申す。

……いや、果たしてアリスがそれを許すだろうか？

キンバリーは煙草をつみ、ため息混じりに呟いた。

「手詰まりだな。せめて感染経路がわかれれば、犯人の手がかりがつかめるのだが」

「……感染って何だよ。流行り病じゃあるまー」

「（接触感染）——織れに触れれば必ず災いを及ぼす。呪術の基本原則だ、馬鹿者」
あきれ顔で新聞を丸め、ぐりぐりと面真の頭を叩く。

「シャルロットほどの魔術師に呪いをかけるなら、接触感染に訴えるのが確実だ」

「……女史よ、私を調べてくれないか。私が媒介となつた可能性がある」

シグマントが若しげにつぶやく。シャルは飛び上がって驚いた。

「何を言つてゐるのよ。貴方が呪いの媒介になるなんて——」

「可能性はあるのだ。昨夜、異変が起つた前、君は私を抱えただらう？ あのとき既に、
私に呪いが感染していたと考えれば、つじつまが合う」

「でも、誰から……？」

「……それはわからんが、直前に、瘴氣のやうなものを感じたのは事実だ」

キンバリーはシグマントをじりと見て、うなずいた。

「あり得るな。自動人形に仕掛けることができれば、早期の接触を期待できる。禁忌人形
は主から離れて行動できる——単独行動中を狙つたか」

キンバリーは勢いよく立ち上がつた。

「早速調べてみよう。（下から）【番田】、君はどうする？

「俺は……心当たりを探してみる」

「そうか。無茶をしてもいいが、無理はするな」

「ああ。夜々……感じが、おまえさういひハカルを守りにいへれ」

「あ……はい」

夜々は怪訝そうにしたが、追及せず、大人しく従つた。

「出て行」やとした雷真に、背後から声がかかりた。

「言つてねいくがな、〈下から〉『番田』。時間的着手はやらねども、呪いが完全に効果を發揮するまで、せいや三日だ」

しん、と背筋が凍えた。答えがわからていたのに、誤りてしまふ。

「……」「日程ひとと、どうなるんだ？」

「二度と元の姿には戻れない」

予想通りの返答。

雷真は奥歯を噛みしめ、キンバリーの研究室を飛び出しだ。

6

雷真は急いでグリフィン女子寮に向かった。

残念ながら、オルガは既に登校した後だった。

あせつてゐるときは何もかもが上手く行かない。走り回つても見つける」がでます。仕方なく上級生をつかまえて、オルガが受けている授業を開き出す。講堂に行けば講義は休講で、そういうするうちに昼休みになり、学生総代の執務室に行けば行き遅い、あれやこれやで午後の授業が始まりてしまつた。

そうして、午後四時過ぎ——五度目の執務室訪問でござりとおやめた。大講堂の三階、執行部のためのエリア。重厚な扉の向むかへから「エレベー」と返事が聞こえた瞬間、雷真は蹴破る勢いで飛び込んだ。

「アリスー」

「オルガと呼びなよ」

オルガの顔をしたアリスが、苦笑を浮かべて座つていた。

すんすん踏み込む雷真の前に、メイド姿のシンが立ちはだかつた。

「通してやれよ、シン」

アリスに言われ、シンが身をしお道を開ける。雷真は足を踏み鳴らして執務机の前まで進み、ばしんと机を叩いた。

「……おまえが、やつたのか？」

「何を？」

「とほけるなー シャルの人民法院ー」

「そうだと書いたら…」

「呪いを解けー 今すぐー」

「嫌だね」

「なら、力尽くで解かせてやるー」

「それは無理だよ」

「……試してみるか、俺の覚悟を…」

「試したいのかい、僕の覚悟を…」

視線がぶつかり、火花が散る。

だが、切り札を握っているのはアリスの方だ。アリスがその気になれば——もし自害でもしないものなら、シャルはもう助からない。

そのことに気付き、雷真はそれ以上、何もやめなくなる。

雷真の心情を見抜き、アリスはなるよう言いたい。

「さあ困ったね？ 解除コマンドは僕しか知らない。そもそも僕が惜いだらうけど、僕を救せばシャルロットは助からない」

「……やめてくれ」

「それが人にものを頼む態度かい？」

怒りをもじりと抑え込み、机に手をついて、頭を下げる。

「頼む。シャルの呪いを解いてくれ」

「じゃあ、僕と婚約を?」

「……する」

アリスは、すぐには応えなかつた。

どんな顔をしているのかと、そうと盛み見ると――

アリスは冷めた目で面真おもてまことを見ていた。なぜか、失望しているようじよおも見えた。

「シャルロットの呪いは解くよ。ただし、僕の用事が終わってからだ」

「な――今すぐじゃないのか!」

「エサだけ取られたんじゃ、釣りは失敗だよ」

「俺は約束あくせきを守る!」

「嘘だね。君ほど約束を無視できる男を僕は他ほかに――一人しか知らないよ。なに、心配はいらないさ。僕の用事は二日もあればカタがつく。そっちには協会の番大ばんたいがついているんだろ? 呪いの効果はかなり遅延するはずだ」

何もかもお見通しといふわけか。

「勝手にしろ! だが、シャルに何かあつたら……俺はおまえを殺すぞ……!」

真正面から、にらみつける。

一瞬、アリスの青い瞳の奥に、痛みのようなものが透けて見えた。

「氣のせいかもしない。アリスはぱしきと雷真の頬を張つて、

「彼女を救いたいなら、僕の機嫌を損ねないことにせよ、ライシィン。」

暗黙的な笑みを浮かべ、ゆうくりと席を立つ。

「まずは忠誠の証をもらおうかな」

雷真の真横まであと、そりと手を出した。

意味がわからず、まじりじてくると、今度は手の甲で雷真の頬を強引た。

「ひどますべて、手にキスをしなよ」

抗うだけ無駄だ。無駄といふか、速効果だ。

雷真はその場に腰をつく。中世の騎士よろしく、アリスの手にキスをした。

「お利口だね。じゃあ、今度はここにしてもらおうかな。」

唇を示す。雷真はさすがに躊躇した。

「おや、嫌なの？ じゃ、代わりにキスのを詰めてもらおう——」

「お嬢さま。そのぐらうに」

蘇しい声やシンがとがめる。アリスは不満げに舌打ちして、執務机に戻りた。

助かった。まさか、シンに助けられる日がくるとは思わなかつた。

「続きは今度にしよう。そろそろ夜会の時間じゃないのかな。」

もう行け、とふつりとか。

雷真は「」を握り、「」をゆるめてもや、立ち上がった。

「そろそろ、わがいとごめんだからねえ、」とは他言無用——君の無い主にや、相撲にも、運びしちゃ駄目だよ。」

「……わからん」

「忘れないでよ。君はオルガの婚約者——」の僕のものだ」「うなずく」しかできない。雷真は暗澹たる気分で、氣病室を後にした。足を引あわるよにし、井内を彷徨う。ヨリかくへ歩いたのか、気がついて、理学部の近くまで戻りてしまった。

屋外灯の光を浴びて、黒髪の乙女が立つてゐる。

「雷真！」

夜々だ。夜々は雷真に気付か、とてとてと駆け寄つてゐた。

「どこ行つてたんだすが、急に飛び出しち——はう——」^{せぬか}昨日の女狐のようだ……シヤルロットさん^のが大変なとおり……。」

岡星だのたが、雷真にはもへ、言ふ訳を探す余裕もなかつた。

「悪い。今から夜会、頼めるか」

「もちろんです……」ふくかしたんですか？ 雷真、変だわ。」

「何でもない。行くわ」

夜々には悪いが、説明はやめない。

心配そうな夜々を引き連れて、夜会会場のロロセウムへ向かう。ロロセウムに向かう小道は、戻ってくる学生たちで賑わっていた。もう今夜の決着がついたようだ。ロキかフレイがやつたのだろう。

交戦フィールドに到着してみると、舞台にはロキとケルビムが立っていた。フレイの姿は見えない。自動人形の残骸が、舞台の外に運び出されている。

「ふぬけた面をしているな」

雷真を一瞥するなり、ロキは冷ややかに言い捨てた。

ピリピリするような気迫が伝わってくる。昨日と同じ、殺気を感じる。

「何だよ」もうやつあまつたのか。フレイは——

雷真がフィールドに足を踏み入れた、その瞬間。

「うう」と灼熱の炎を上げて、ケルビムが飛んだ。

空中で変形し、大剣となつて夜々の頭を狙う。

間一髪、雷真は夜々を突き飛ばし、跳躍してかわした。

信じられない気分でロキを見る。夜々も同じ気持ちだったのだろう。目をまん丸にして、

ロキと雷真を交互に見ていた。

誰も予想しなかつた事態に、ガラガラの観覧席がざわめく。

今の一撃は本気だった。かわせなければ、夜々の首は千切れ飛んでいた。

「どうした、何を驚いてる？」

ロキは底冷えのするような声で叫んだ。

「おどりゅりオレと貴様は《手袋持ち》。ひどいしかな、《魔王》の玉座を通りついに落し合う存在だろう？ 連れ早かれ、いやなる宿命だ」

「そんなことはわからでぶる。」

だが、ふりかへ。ロキとは上手くやつてこけるんじやねぶかと――味方として、ともに戦つてこけるんじやねぶかと、思つてぶた。

「オレたちは敵同士――ゆえに」

ロキの肩から青白く、日に日に見えるほどの魔力が立ちのぼる。

「今夜、貴様を魔界とす」とした

「ううう、と轟音を響かせ、ケルビムが襲いかかつてやがだ」。

Chapter 3 魔女と騎士の盟約

1

炎をまとった大剣が、空中を自在に飛んで、夜々の首を落とせばと狙る。

動きは鋭い。その上、以前とは段違いになめらかだ。

次々と繰り出される斬撃を、夜々は際どくかわし続ける。かくてケルビムは〈金剛力〉を貰き、夜々の体を切り裂いている。直撃を喰らうわけにはいかない。

客席が静まり返る。夜会初日のあの豪華な光景は、学生の多くが知っている。音が固唾をのんで、戦いの推移を見守っていた。

気がつけば、夜々は舞台の端に追い込まれていた。

背後に気を取られた瞬間、ケルビムがさらに速度を上げた。あゅんと回転して、夜々の脳天をかち割る——寸前、がいん、と音がして太刀筋がそれた。

雷真が横から剣を蹴ったのだ。客席がどよめく。高速の刀身を精確に蹴り飛ばすなど、いかにも並の技量ではない。



蹴られたケルビムは空中で人間型に戻り、両手のブレードを構えた。

「ふん、一対二とは面倒だな。ならば——これでどうだ？」

ロキが魔力を練る。その高まりに呼応して、ケルビムの翼が展開した。

翼は短剣のコンテナを兼ねている。棘のような形状の小さな刃が十二本、一斉に翼からせり出し、切り離されて、漂空した。

（ますいな……）

雷真の声を冷や汗が伝った。短剣は別々の標的を一度に狙える。雷真と夜々が同時に狙われることがあれば——謎を解かれる危険がある。

「ロキー やめてー」

不意に、誰かの叫び声が聞こえた。

フレイだ。フレイがラビの背中にしがみつき、舞台に飛び上がってくる。

「やめて、ロキー どうして、ライシンど……？」

「寝言を言うな。オレたちは敵同士だ」

「でも——」

「こい、ケルビムー」

フレイを無視して命令を下す。ケルビムは大剣に戻り、ロキの手に収まつた。

手が触れた瞬間、魔力が刀身に行き渡り、支配力が格段に跳ね上がつた。

一拍置いて、夜々ばかりの速度で踏み込んでくる。

巨大な劍がうなりをあげる。同時に、十一本の短剣が猛禽のように戯いかかってあたる。雷真と夜々は必死でかわし、そらし、手刀で叩き落とす。

その隙を、ロキは決して逃さない。

大剣を振って、雷真と夜々を一度に狙う。袈裟がけ気味のなま払い。ギリギリかわすと、太刀風が舞台に激突し、一メートルもの亀裂を生んだ。恐るべき威力。グリゼルダのひと振りに伍するのではないか。

そして、激しい肉弾戦が始まる。激突では離れ、あらにぶつかる両陣営。一方が天に逃れば、もう片方がたたかに追撃する。お互いの攻撃は直撃しない。一寸を見切り、的確にいなして、かすり傷ばかりが増えていく。

ここまでの夜会が前座の余興に見えるほど、それは次元の違う戦いだった。のみならず、両者の戦いは相当にあやうい。

雷真の首筋を短剣がかすめ、夜々の蹴りがロキの眉間にかすめる。

二人とも前線で暴れるスタイルだけに、一歩間違えば術者の命がない。そうして、お互いに決定機を作れないまま、時間ばかりが過ぎていった。

既に両者とも息が上がっている。汗だくになりながら、しかし魔力は衰えない。したたる汗を拭いながら、ロキは挑発的に笑った。

「そんなものじゃないだろう。そもそも見せら、貴様が得た力を」

「何のことだ？」

すうとほける雷真。ロキは雷真の右腕——布でぐるぐる巻き——を「手」、

「貴様が利き腕を痛めて、怪我をしただけ、なんどことはあり得ない」

「……えらく買われたもんだな、俺も」

「誰が貴様など買うか！ 自意識過剰バカが！」

「今買つてたよな？ 明らかに俺を評価してたよな？」

雷真は右腕の布に手をかけ——にやつと笑つて、手を離した。

「ハハはまだ、使うところじゃない」

「……なら、隠したまま消えろ」

ロキの紅い双眸が光を放つ。雷真は残り少ない魔力を高め、夜々に迷り込んだ。

「吹鳴四輪！」

夜々は雷真の意図を敏感に感じ取り、思いきり跳躍した。

——エリアの外、客席ぐと。

観客が驚く間もなく、雷真も後方に跳躍している。くるりと宙返りをして、客席に着地。近くの名士たちがわたわたと逃げ惑つた。

「……ふん」



雷真が逃げたことを知ると、ロキは興奮した様子で舞台から降りた。

既に戦闘開始から一時間以上が経過していた。雷真がフィールドを離脱した以上、今夜のところは引き分けだ。

戦闘終了。観客は興奮闘めやらぬ様子で、煽り支度を始めた。

雷真のとなりで、夜々が大きく安堵の息をついた。

「夜々、疲れたか？」

「それは大丈夫です。でも、ロキさんが……」

「大丈夫だ。俺に任せとけ」

笑って請け負う。夜々は深刻そうな顔をしていたが、それでも素直にうなずいた。

雷真は交戦フィールドの一角に視線をやる。

そこで、フレイが遠方に暮れていた。背中が頗りないくらい細く見える。

雷真とロキが本気でやり合うことになつて、悲しむのは彼女だ。

フレイのことは心配だが、雷真には急ぎの懸案事項がある。

「シャルが心配だ。戻ろうぜ」

雷真は夜々を連れ、急いでコロセウムを後にした。

キンバリーの研究室は無人だった。

開け放しのドアから中に入ることはできただのだが——キンバリーの姿がない。

「何だよ、誰もいないな。晩飯でも食いに行つたのか?」

「でも、シャルロットさんもいませんけど……」

夜々が心配そうに室内を見回す。

雷真もほんやり部屋を眺めて、それに気付いた。

キンバリーの机の上に、深めのスープ皿が置いてある。

「何だこれ……牛乳?」

なみなみと注がれたミルク。ぶかーっと浮かんでいる何か。これは——

「雷真! これ、シャルロットさんです!」

「おい、^{お母}離れてるんじやねーのか?」

指で突ついて、上を向かせる。

やつぱりシャルだ。ぐりたりしている。

「おふシキル! しつかりしろ!」

指先を小さな頬に近付けてみる。呼吸——していない!

「何やってんだ?」これは一危いで人工呼吸……やりようがねえ!」

「夜々が心臓マッサージしますー」

「そうだな、女同士なら触りてもー」

「うつかり力加減を間違つても事故ですー」

「やめろー やつばダメだー」

「驅がしなな、どうした」

「シグメントー」

開け放たれた窓から、屋外は寒いシグメントが入り始めた。
外を見張つていたらしく。

シグメントはすぐに状況を見て取つて、

「私がやるや。薬するな、私はシャルに薬湯をつかわせたいんだあるのだ」

前足をあげて器用にシャルを引き上げ、仰向けに寝かせる。

腹部に顔を押しつけ、一秒。タヌを作つてから、ぐりと押す。

ぶふりと、シャルが牛乳を吐き出した。

げほりほりとむせる。人工呼吸をせんぐわ、息を吹き返した。心臓は動かしたようだ。

マフサージをしなくて正解だつた。

雷真はほりとしと、シャルに顔を近付けた。

「心配させやがうべ。何やつてんだよ、おまへ」

「ライ……シン……。」

シャルは涙目で雷真を見上げ、そして、自分が全裸であることに気付いた。

「ら……ラスター・カノンー」

不安定な魔力がシグムントの体に流れ込む。不安定でも、さすがは（十三人）のひとり。

魔術はきつたり発動し、シグムントの口からまばゆい光が放たれた。

五分後、雷真はぶすっと仏頂面で、崩れた本棚を始末していた。

ちりちりになつた髪、火傷のあとが痛々しい。

「そ、その……だから、謝つてるでしょー！」

シャルは机の上に立ち、顔を赤くして、か細い声を張り上げた。

「小さくなつても、お風呂くらい入りたいじゃないー！」

「何で牛乳なんだよー」固まつた牛乳で窒息するとかそういうギャグだー！」

うう、と返事に詰まる。夜々が何かに気付いたらしく、はたと手を止めた。

「まさか——こないだシャルロットさんが言つてたアレ……!?」

「言つちやだめー 言つたら絶交よー」

「ふむ。牛乳風呂に入れは、胸が大きくなるという伝承か?」

「牛乳風呂。牛乳風呂に入れは、胸が大きくなるという伝承か?」

「ただ黙りなきいシグムントー お昼のチキンをハチの巣にするわよー」
雷真はするり、とすべつて、半眼になつた。

吉兵はするり、とすべつて、半眼になつた。

「……大きくなるとか初耳なんだが。肌が綺麗になるんじゃなかつたか？」

卷之三

冷え切つた声が聞こえてきて、一同はそろつて硬直した。青ざめたキンバリーが、ドアにもたれて立っていた。

「やはりだ、シャルロット。多忙極まる私が講義を休講にして、厚意で解決法を探し回って
いるあいだ、君は小さくなれたのを「^{ハサクハサク}」とに遊び半分で牛乳風呂など試してあげて、私
の研究室をこんなにしつぐれたというわけだな…」

キンバリーが怒るのも無理はない。本棚は熱にあぶられて煤け、魔術書や資料が散乱している。驚くべきながつたのがせめてもの救いだ。

十一

小さな体をますます小さくするキャラロア。でもまだ消えてしまふやうだ。

雷真は少し氣の毒になつて、シャルをかばつて頭を下げた。

「俺からも謝る。許してやつてくれ、先生」

「他人事のような口をきくな。責任の半分は君にあるんだぞ」

「可でない。被害者の面だら?」「

「まあいい。貸」ということにしておく

「またか!? 俺、あんたに何個の借りがあるんだよ!?」

「借りの中には、今回のシャルロットの件も含めておけ」

キンバリーは表紙の焦げた本を拾い上げ、

「棚を引っくり返して、失われたものがないか確認したい。君は邪魔つけなシャルロットを連れて、外に出ていろ。絶対に目を離すなよ」

「わ、わかった……」

シャルルは小さいが、そのぶん自由が利かない。分厚い本に挟まれても「大事だ」とかと言つて、放置して何があつても困る。

雷真は大人しくシャルルを抱き上げ、両手に包んで、階段前の休憩所に向かつた。

「シグムントは残つてくれ。話がある」

キンバリーに呼び止められ、シグムントがそちらに戻る。

夜の校舎はひとく静かだ。休憩所で一人になると、その静けさがいのそぞ重く感じられる。シャルルは急に弱気になつたらしく、ほりりといふことを言つた。

「……私、一生このままのかしら?」

「そう悲観的になるな。キンバリー先生が何とかしてくれるわ」

「そんなの、わからないじゃなー」

感情的に反論する。不安のあまり、いら立つてゐるようだ。

雷真は方向性を整えて、明るく慰めを言つてみた。

「小さくたつて、いいことはあるだろ。さうきの牛乳風呂とかさ」

「簡単に濡れたわよー それに……あの量じゃ、冷えるのがすこへ早いの」

「け……ケーキ食い放題だぞ？ おまえ、甘いもの大好きだる？」

「スポンジがガッサガサで、すこへみ込みにくしわ。それに……何を食べてても美味しいの。えぐかうたり、痛かうたり……」

小さくなるということは、全然、いじりとじやないのかもしれない。

雷真はシャルの肩をそりと小突いて、

「大丈夫だ。助けてやる。絶対」

「…………めんなさい」

「何を謝つてんだ。おまえのせむじやないだろ」

じわっと涙ぐむシャル。小さすきで、涙にはならないが、間違いなく泣いている。

「…………泣くなよ。バカだな」

「だりて……私、貴方の足を引っ張つてばかりじやない……」

「違う。おまえには何度も命を救われた。あの防御印だって、俺を護つてくれた」

雷真はシャルを見下ろし、優しく笑いかけた。

「悪かったな。おまえの大切なものを、壊しちまうべ」

「……おばあさんが言つてたわ。お守りは、なくなつたり、壊れたりしたときに、本当の力を發揮するんだって」

シャルは目元をぬぐい、雷真の手の中で微笑んだ。

「貴方の身代わりになつたのなら、いいわ」

ふたりのあいだを、あたたかな感情が流れる。そのとき——
「いい雰囲気のところ悪いがね、（下から二番目）。君の相棒が私の研究室を現在進行形で破壊しているんだが？」

突然、廊下の向こうからキンバリーの声がかかってきた。

そのすぐ横で、のぞき見中の夜々が、壁の壁紙とニアを握りしめていた。

「な、何もいい雰囲気じやねえ——でもわかつた——すまなかつた——」

その夜はシャルをキンバリーにあづけ、雷真は寮に戻つた。

シャルのこと、ロキのこと、そしてアリスのこと。

あまがまな思考が眠りを妨げ、なかなか寝付くことができない。だが、眠れないくらいなら、まだよかつた。

翌朝、雷真は最悪の目覚めを迎えることになる——



[६३४]

そくり」と真冬のような冷氣を感じて、雷真は飛び起めた。
髪を逆立てた夜々が書かれていた。今ならドウカシだといふ。

「何だ? 何や居い世のなかでアレルギー?」

夜々の後ろで、がるるるう、と大のうなり声が聞こえた。

驚いて見ると、籠風の入り口にガルム犬がたむろっている。犬に囲まれているのは真珠色の髪の乙女。フレイが目に一杯涙を溜めて、立ち尽くしていた。

「リモート」は、リモート接続のことを意味する言葉です。

夜々が紙切れを突きつける。学生新聞の号外らしい。見出しは――

〔彼☆オルガ・サラティーン嬢との婚約〕

オルガの麗しい顔写真に添えて、雷真の顔写真も掲載されていた。

「お相手は、日本からの留学生、ライシン・アカバネ……」

声が震える。ついでに体も。雷真は新聞を奪い取り、あわてて記事を読んだ。

苦手な英文を必死で読み取る。記事は雷真を讀える内容だった。いわく、編入当初こそ最低の成績だったものの、魔術噴い騒動を解決に導き、夜会でも快進撃を続いている実力派。その才能は学院生も広く知るところとなり——「うんぬん」

オルガの談話「彼はとても情熱的なんだ。昼も、夜もね」。

「あいつめ……ある」となること……

昨日、食堂で話しかけてきたとき、オルガは初めて余裕のような口ぶりだった。あの場に居合わせた者は、二人が何でもない」とくらい、すぐにわかりそうなものだ。

それなのに、この記事。アリスは前もって新聞部に手を回していたのか。そうでなければ、こんなタイミングで、こんないかがわしい記事が出るはずもない。

夜々は泣きながら、雷真の腰にしがみついてきた。

「こんなのは嘘ですかね？　だって雷真には、許婚さんがいるんですよね？」

当たり前だ——と喉まで出かけた言葉を、雷真は理性でのみ込んだ。

「ほ……本当だ。俺は……オルガと婚約……した」

「そんな……あの女狐にどんな弱みを握られたんですか？」

「弱みなんぞ……握られてない。俺は本当に……あいつに惚れたんだ」

「じゃあ雷真……本当にあのひとをはらませたんですね？」

「はらむうに書い方やめろ——つか、そんなの記事になつてないだろ？」

「本居宣長の書簡」

「中華人民共和國憲法」

心で心をめぐらす。心をめぐらす心をめぐらす。心をめぐらす。

フレイの眼から大粒の涙がこぼれる。あふれる涙を拭ねてみたが、フレイは止まらなかった。涙を拭いてから、フレイは泣き声で笑った。

迫いかけようとする富真の腕を、夜々が「がしゃ」とつかんで止める。夜々の腕に輝きはなく、古井戸みたいに真っ暗だった。

「おい……無茶するなよ、夜々……？」

やめや……重直は……馬鹿です……本物は……あらや……○△○

彼々は雷真に手を伸ばし、首を絞めようとして——やめた。ひくりとしゃくり上げ、うわーんと泣いて走り去る。

「一人とも、完全に説解させてしまった。先のことを考へると頭が痛い。」
「朝っぱらからうるせーや、ライシン！」

監督が怒鳴り込んできたが、雪真にはもう、言い返す気力もなかつた。

「何があったのか？　まあいい。おまえに客だ」

顔を上げると、審監の後ろに見覚えのあるスピードがいた。雷真を見る目が冷ややかだ。あふれる敵意を隠そうともしない。

「ミスター・アカバネ。本日午後、お嬢さまが紅茶を」「繕したいと」

「……む、よう」といい。俺もぜひオルガお嬢さまに会いたいと思うてたふりあわだ

「では、お迎えに上がります。貴方がどうにいらしても」

懇意に礼をして去っていく。審監は怪訝そうにしたが、何も言わなかつた。

その日、夜々が戻らないまま、雷真はひとりで授業を受けた。

午後の授業を終え、講堂で懶然としている。平吉通りにシムが現れた。

「お迎えに上がりまし」。ミスター・アカバネ

「えすがだな。俺を見張りてるのか」

「左様で」

「……徹底してゐよな、あんたも。あのお嬢さまの言ひつけとあらは、そんな格好も辞さないつてんだから」

「お嬢さまのい命令とあらは、たやす」「ふりや」

先に立つて歩き出す。雷真はため息をついて、シムの背中を追つた。

アリスの変身魔術（虚像）^{アリスの変身魔術（虚像）}の効果で、シンの背丈は雷真より少し低くなっている。だが、威圧感は衰えていない。

「あんた、体はもういいのか？」

「私は（完全なる個）——ではありますんが、それを目指して創られた者です。あの程度

の振舞は、どうにか情けられました

「卷之三」

「……運から思つてたんだが上

シンは不審そうに、肩越しに視線を寄越した。

「俺にそんな態度を取る必要はねーわ。普通にしてる」

卷之三

「その通り」といふ事をやめみつて書いたんだ。畢竟世口なんだしよ。

主が対等に見て、見る方は、私と対等ではありませぬ

「あーう……俺の「ルル」が対等に見てるか?」

「四」

嘘つけ。獲物か、玩具くらいに思つてゐるだろ。

「ですが、サラティーン家のメイドは完全無欠ではありません。主従の分を踏み越えて、下衆な男の厚意を優先する」ともあらうと、ハーモン

シンは足を止め——

「くたばれ、くそ野郎」

振り向かぬまゝ、口辱しを尋ねうと振った。

魔術による攻撃ではない。だが、見た目と実際のリーチに大きな差がある。余裕をもつてかわしたつもりだったが、雷真の鼻先を風圧がかすめた。

「おや、お気に召しませんでしたか。対等に振つてみたのですが」

「明らかに下に見たら——あわよくば、ぶん殴る気だつただろ——」

シンは愉快そうに笑つて、再び歩き出した。口悪いながら、雷真も後を追う。ふとけた？　このシンが？

今——ほんの一瞬、シンの肉面に触れたような気がした。

4

シンが案内したのは、学生食堂の裏手にある（大庭園）だった。いくつかの噴水を中心に庭木の迷路が造られ、芝と花壇が広がっている。講義を終えた

学生たちが、思い思いの場所で語らつていて、華やかだ。庭園の中央には屋根つきの休憩所があり、そこにオルガ——百合、アリスが座つて待つていた。

「やあ、きてくれたね、ライシン」

「…………ないわけにいくか」

「そんな顔するもんじやないよ。ほら、みんなが見ている。笑顔、笑顔」
彼女が言う通り、好奇心いっぱいの視線が無数に突き刺さつている。
ひきついた笑顔を浮かべながら、雷真は声を殺して感嘆つた。

「おまえの目的は何だ——何で婚約する必要があつた——」

「なぜって、君のことが好きだからに決まつてるじやないか」

ほつと頬を染めて、雷真の胸を突つく。

「つまんねえ猿芝居をしやがつて……」

「ぶん殴りたい。できるわけもないが。

「さあ、こっちへ。ティータイムといこう」

休憩所には既にティーセットが用意されている。シンのほかにも使用人がいるのだろうか。淹れたばかりの熱い紅茶がホットで湯気を立てていた。

雷真は乱暴に腰を下ろし、作法もへつたくれもなく、スコーンにかじりついた。

「さうきの質問に答える。何で婚約なんだ。新聞部にまで書かせやがつて」

「実は今、オルガに見合いの話が持ち上がっていてね」

優雅な手つきでカップを持ち上げ、焦らすような間を取る。

「相手は名家のご嫡男さ。オルガにとつても悪い話じゃない。でも、相手は早期の學式を

望んでいてね、そうなるとオルガは卒業を得たず退学するハメになる」

「自主退学……？」^{トト}は榮えある王立機巧學院だぜ？ 卒業資格だけでもハクがつくし、そもそもオルガは〈十三人〉——魔王になるかもしないんだぞ！」

「お相手は、そんな肩書きがいらなくらいの大物つてことさ」

紅茶の香りを楽しんでから、そりと唇をカップにつける。

「それに、夜会はお遊戯じやない。命を落とす危険もある。オルガはこの美貌だからね。う両親も、お相手も、オルガに眼をつけたくないだろう」

「その見合いを、俺との婚約駆動で破談にしようってか」

「そうなれば、オルガはもうしばらく学院にいられるってわけさ」

「そんな」となら、ほかにいくらでも適当な奴がいるだろー。何で俺なんだー」

「だから言いたいじゃないか。僕は君と結婚したいんだよ」

「嘘つけ！ そもそも——俺みたいな東洋人、オルガの両親が認めるかよ」

「まあ、君がどこにでもいる東洋人なら、すぐに抹殺されただろうけど」

「おい！ そんな事態に俺を巻き込むなー」

「ふ」あが、そうじゃない。アカバネの血縁者がまるまる手に入り、その子孫を残すことさえ可能なんだよ。しかも君は、叛逆の王子から國を救つた英雄だ」「英雄……俺が？」

「一方でライコネン中将に敵対した悪漢でもあるわけだけどね」

雷真は閉口した。こいつ、何でも知ってるな……。

「既に魔王室は君をマークしている。そのうち勳章が授けられるだろ？ そんねば、オルガの家も君を悔りはしない。それ」――

アリスはふと笑って、カップを置いた。

「君を選んだ別の理由がある。君にまつわる噂が信憑性を高められるのさ」

「……みんな噂だよ？」

「どうしようもない女たらしや、黒色家の変態だってね。君にはどうせやられたうて言えよ、みんな信じるだろ？」

「信じねーよー 信じなー……よな？」

「夏休みに事故を起したんなら、僕はそろそろ異変に気付くわけだね」

「気付くなー つか、みんな信じないよな、な？」
すこく不安になる。事実無根もふといただ。

同時に、嘘の臭いも嗅ぎ取つてゐる。

アリスが言つたのは、實にもう少しもらしい理由だが——どこかおかしい。

無駄なりスクを冒しすぎている。呪詛返しを覺悟でシャルに呪いをかけたし、オルガの嚴格なイメージを崩して、スキヤンダルを演出している。カンのいい者なら、このオルガが偽者だと氣付くかもしない。

シンが無言のまま、アリスのカップに紅茶を注いだ。その表情は硬く強張っている。何か知つてゐるようだが、訊いたところでは口は割るまい。

雷真は深追いせず、別の切り口から搔き返ることにした。

「まあ、ちょうどよかつたぜ。おまえに訊いておきたかったことがあった」

「僕に？ 嬉しいじゃないか。僕に興味を持つてくれたのかい？」

「おまえつづーか、おまえの親父——」

「いいにいたのか、バカ弟子」

ふれなり声をかけられて、雷真の言葉が引つ込んだ。

まつたく氣配を感じさせず、真後ろにグリゼルダが立つていた。

「ん？ 何だ？ 案内不審だな？」

「何でもないテスー 何の御用でしようか！」

「うむ？ 用件は二つ——いや三つある。まずは貴様のカリキュラムの話だが」

機嫌よく紙切れを取り出す。雷真が提出した申請用紙だ。

「受理したぞ。私の講義を取る気にならだようで大変結構」

「ああ……まあな」

「二つ目の用件は、これだ」

今度は封筒を取り出す。既に封が切つてあるが、手紙のようだ。

「貴様宛の手紙を預かっている……のだが、渡す前に二つ目の用件を済ませう。実は今、

そこで面白い話を小耳に挿んでな。貴様が——」

「にににこと笑いながら、グリゼルダは言った。

「婚約したという、バカな与太話なんだが」

「ひたいに青筋が立つてゐる。殺氣があたりに満ち、鳥が一斉に飛び立つた。

……アレ？ 範、死んだ？

「貴様という奴は……私に遠回しの求婚をしておきながら……」

「してねえ——あなたの頭はどうなりてんだー」

「挙げ句、捨てた女にその墨言……」んなに血がたまるのはあの戦争以来だ……」

「剣の柄尻に手が伸びる。その手を制して、アリスがすくと立ち上がった。

「おやめください。偉大なる先達、〈迷宮の〉魔王陛下」

「これは師弟の問題だ——すうこんでいる——」

空気が震えるほどの怒声。しかしアリスは憤りもせず、意をと意見を述べた。

「学生の恋愛に口出」をされるなど、教授の領分を踏み越えていきます。たとえ——貴方がライシンを愛しているのだとしても」

「なり、ちち違う——わたし、私はただ、修行中の身のあり方とどうがをだない」

「魔術師の探究がそうであるように、愛は人間の本性^{ほんせい}に基づくもの。生まれながらに人間が持つ根源的な自由——その最たるもののが恋愛ではありませんか?」

「ぬ——」

「私と彼はお互いの愛を知り、結婚を誓い合ったのです。たゞ魔王陛下^{マジック・アンド・ローブ}、それをともかく言ふ立場にはありません。違いますか?」

「ぐ……ぐり……お……覚えていろよ、小娘^{メイド}——！」

魔王^{マジック}もあるう者が、小悪党のような捨て台詞を残して逃げていく。シンがほりとしたように緊張をゆるめる。雷真もまた緊張をゆるめ、

「すげえな、おまえ」

素直に誉めた。あのグリゼルダを口八丁で退散させた^{ハサハサ}……。

アリスは誇るでもなく、肩をすくめて苦笑した。

「戦場で向き合ったんじゃ、到底相手にならないだろうけれども。でも、ここは平和な学院で、議論に魔力は無関係。巨大なドラゴンはビリヤードが苦手なのさ」なるほど。感心していると、アリスは重真のすぐとなりに腰を下る——

「整容術」時代の日本

「僕を傷つけて楽しいかい……？」 いすり。

[卷之二]

「いや、やめよう。それで？」僕は惚れ直したかと訊いたんだよ？」

「次元空間」

卷之三

「見るよ、あの壁まじが様子」「やるなあ、浮井

感嘆の声。やうかみや殺氣も交じつてゐる。

「やねや、雨が止むる？」マサ。

直前の会話を覚えていてくれたらしい。雷真は改めて口を開いた。

「決まりである。おまえの親父の『ルル』」

「ライシン——こんな人の多いところで話すのかい？」

雷真の首筋をちゅろりと舐めて、耳の付け根にキスをした。

そくそくと甘い快感が走り、雷真は飛び上がりそうになった。

「おまえ、こんな人の多いところやー」

「静かに。僕らは愛し合ってるんだよ？　このくらいするさ」

雷真を押さえ込み、ちゅちゅうと耳たぶをもてあそぶ。

それから一分近く、アリスと雷真は「ふちゃいちゃ」していた。

アリスが周囲に視線をやる。日が合った学生たちは、そもそも離れて行つた。

「いい具合に気を使ってくれたみたいだね。じゃあ、話を続けよう」

雷真は舌を卷いた。計算で周囲を動かす——恐ろしいやつだ。

そう思つてこの場所を見ると、もうひとつ「計算」に気付く。屋根があり、迷路の中——遠くから唇を読まれにくく、周囲にも気を配りやすい。最初から内緒話をするつもりで、この場所を指定してきたのだ。雷真の心理さえ読んでいた。

雷真は警戒心を強めながら、気になりていたことを訊いた。

「おまえ、学院長が父親だつて言つたよな？」

「言つたね」

「つまり、おまえが懲役軍に潜入していたのも、アンリを人質に取つてシャルを脅したのも、学院長の差し金つてことか」

「そうだね」

「……学院長は何で、シャルに自分を暗殺させようとした？」

「言わなかったから。学院と英國を仲違いさせるためだよ」

「まさか……学院は英國からの独立を狙っている……のか？」

学院が自治権を守らうとするのは当然のことだ。この時世、この学院が一大国に与していくわけもない。だが——自治権闘争にしては、あまりに手段が汚い。学院長の野心を疑うのもまた、当然のことだ。

「あの狸親父は、一体何を考えてる？」

「その質問は無意味だね。パパの考えることなんて、パパにしかわからないぞ」

「学院長はなぜ、スペインなんて真似をおまえにさせた？」

「……どういう意味だい？」

「独逸軍に潜るのも、セイウチのダランビルに潜るのも、何重にも危険な極だ。なぜそれを実の娘にやらせる？ 学院長には、ほかにも病があるんだろ？」

なめらかだったアリスの舌が、不意に鈍った。

意図的な沈黙とは違う。答えを探しているようにも見える。

黙り込む主を、シンがじつと見つめている。

やがて、アリスはどこか遠くに目をやつて、白々しい口調で言つた。

「知らないよ。僕はただ、パパが言う通りにやるだけさ」

「理由はわからないが、雷真は急に腹が立つてきた。」

「——なぜ訊かない？ おまえは俺と夜々に殺されたるところだつたんだ。そんな日に遭わ
われて、なんで黙つていられる？」

「無駄だからさ」

「……無駄？ 訊いても教えてくれないりやー」とか…」

「そうじやない。僕が訊けば教えてくれるよ。魔術世界の根本原理、世界秩序の構築理論、
協会や学院の意義、その限界、そういう理屈をえんえんとね」

「魔術」という言葉を払う。

「僕らとパパは言葉が違うんだよ。僕らの言葉が通じる次元に、パパはいない。どうして、
はかの誰かじやなく、僕にやらせるからで？ そりやあ僕が優秀だから。何で？ たゞ、
一九世紀最強の魔術師エドワード・ラザフォードの娘なんだよ。僕は」

そう言つたアリスは、皮肉っぽく笑つてゐた。

「噛み合わない議論ほど無駄なものはないよ。のみ込むしかないなら、モメたりキレたり
の労力が惜しい。そんなことをしている間に、僕はもうともうと力をつけて、先に進んで
いかなくちゃ。……僕には時間が足りないんだよ、全然」

「……」う意味だ？

雷真が次の言葉を探しているつかない。アリスは素っ気なく身を離した。

「行くよ、シン。僕もライシンも、お茶は十分楽しみだ——」

「待て——」

帰ろうとする恋人を追うように、雷真はアリスの腕をつかんだ。

「俺は……他人の信条をとやかく言えるほど偉くはない。だが、やつても無駄——なんていう理屈で、初めから対決を放棄するような生き方は……好きに」やない

「……なら訊くけどね、ライシン」

ほんの少し揺れる声。

アリスは老いた賢者のように、静かな眼で雷真を見下ろした。

「僕の壽命があと一年だと言つたら、君は僕を愛してくれるのかい？」

——ただのたとえ話か？ それとも、お得意の演技や嘘か？ いずれにせよ、まさに噛み合わない議論だ。

「この次はぜひ、答えを聞かせて欲しいね」

ふうとはかなげに微笑んで、アリスは迷路を出て行った。

アリスから解放されると、雷真はますトータス寮に向かった。

雷真の部屋は無人だった。夜々の姿はない。キンバリーの研究室にいるのかと思つて、駆け足で理学部へ向かう。

そちらでは、アンリの笑顔が迎えてくれた。

「あ、ライシンさん。キンバリー先生に用ですか？」

テーブルの上でシャルがあわてて体を隠す。なぜだか、フリフリのドレスを着ていた。玩具の人形服をアンリが着せていたらしい。

「夜々を知らないか？」

姉妹は顔を見合せた。代表して、アンリが答える。

「いえ。夜々さんは、朝から一度もあてません」

「そうか……。どこ行ったんだ、あい？」

「何よ。ケンカでもしたの？」

「ん、まあ……」

シャルとアンリは雷真の婚約騒動を知らないようだ。

それならそれでいい。シャルから問題をややこしにする必要はない。

今考えるべきは、夜々のことだ。

(ますいな。夜々がいなかつて、夜会に出られねえ……)

夜々は相当にショックを受けていたようだ。

またぞろ敵に捕らわれているんじゃないかと心配になる。

(——いや、そうそう同じ間違いは繰り返さない)

以前、アリスの奸計にはまたととは違う。あのとある日、雷真と夜々の相びつき、信頼は大きくなっている。容易につけこまれたりはしない……たぶん。

それでも、ふてくされて戻つてこない可能性はあった。

(仕方ない、夜々のことは硝子さんに頼もう)

ついでに、最悪の場合に備えて、いろいろか小袋をつけてもらおう。

そんなふうに考えて、雷真は理学部一階のロビーに降りた。そちらには代表電話があり、硝子に連絡をつけられる。

電話を借りて、受話器を手にした途端、重厚な扉が押し開けられた。

突っ込むような勢いで、顔面蒼白の男が飛び込んでくる。

すらりとした長身に、歯のように鋒利なオーラ。上着のないベスト姿や、色つき眼鏡をかけた男——シンだ。

「どうした、シン。また俺に、嫌がらせしにきたのか?」

シンはすぐには答えなかつた。様子がおかしい。

雷真は受話器を置いて、シンの方に近寄つた。シンは死人のように青ざめている。演技

では……な。少なくとも、極度の緊張にあらわれているのは本物だ。

「お、ユーハんだ。何があった」

「お嬢さま……その、これはあくまでも推論にすがるものですから」

「言えー」

「おとねおれました」

——回だりて。

アリスと雷真が別れてから、まだ一時間と経つではない。

この短時間に、このシンが護衛についている。あのアリスが？

そんな真似が誰にできる？ アリスのバクには、学院長がいるんだぞ？

「誰にやられた？」アリスのことを。むづかんやるんだぞ？」

「おやじへは——（十字架の騎士団）首領、ローザンベルク卿」

より前に理解やあな。

単語ははっきり聞いていた。ただ、知られるなりただけだ。

十字架の騎士団——ローザンベルク。

せかく、その名を再び、学院で聞くことにならうと思……。

Chapter 4 敵者は誰か？

1

「（十字架の騎士団）…………」

雷真は泣面にならだ。【泣けねじら】名だ。なりて夜やと硝子を奪おうとした連中——
シンは重々しくいなすんだ。

「ほこ。私が所属してんだ。ユイツ留学生からなる特殊部隊だナ。」

「目的は何だ。今から何をしやうてしやうて。やめやめ、連中はバラバラになら——拳銃
に残り切るはめや。あの双子姉妹が死ぬや。」

返事の代わりに、シンはふとから紙切れを取り出した。

地図が添えられた走り書き。敵からのメッセージか。

「アルファベット——何語のひづりだ。」これは。ラテン語か。

「ドイツ語です。【ヨーロッパ】四年以内にライシン・アカバネを約束の地へ連行せよ。他言は無用、
自動人形の随行も認めない。我ら、マス・ラザフォードにも待ち」



「ミス・ラザフォード——アリスのことか」

「彼らの目的は、第一に私の破壊であろうと思われます」

「あんたは独逸の最新技術……（機巧兵士）つったか」

ドイツが独自の理論に基づき、（神性機巧）として作り上げた禁物人形。シンはその完成形と言われている。内蔵する魔術回路（完全統制振動）により、超人的な強度、攻撃力、移動能力を發揮する。たとえ近くに魔術師がいなくとも、自身が生み出す魔力で、それを行使できるのだ。

「フラガラフとは伝説上の神器です。敵に投げつければ、自ら飛び、敵を倒して戻ってくる。その一撃は絶で止めることができないとか。比較すれば、私や同型機の性能は伝説には程遠い——それでも、ドイツにとりては機密中の機密です」

「それを学院に奪われたとなりや……黙つて見ているわけにはいかねえよな」
奪還か、あるいは破壊が必要だ。

「そして……ついでに、俺への報復も済ませちまおうってか」

彼らの野望をくじき、ドイツ勢を夜会から一掃したのは雷真だ。おかげで今期の夜会、ドイツが享受する旨みはまったくない。それどころか、学院との関係悪化もそれがやかれている。心情的にも、戦略的にも、雷真は消しておきたい存在だろう。

だから、雷真を連れてこよ、なんていう文面になる。

だが、果たして、それだけか？

何かがおかしい。気になら……が、じりへり考えてくる暇もなし。

「話はわからた。ドーナutsの地図だ？」

「地ト新演ぐの入り口ドナ」

「地ト……学院の？」

以前、雷真も入りた「」がある。トントと一緒に落ちたのだ。

雷真はやうとした。あそこには、得体の知れな「何か」が棲みついている。星のまたたきのよくな、無数の視線を思い出す。

あの場所に、もへ一度入らなければならな……。

「氣は進まねえが……行くしかねえな。案内してくれ」

そのまま理学部を飛び出そうとして、足を止める。

シンが「ふへ」な。雷真は悲れて、とかいた声を出した。

「えへ」だ。シン。モタモタすんなー」

一方、シンは珍獣でも見るような目をして、

「……私どもも、おとへたるのや。」

「仕方ねえだら。アリスに何がありや、シャルは一生あんままだ」

「ですが、」のよくな呼び出、「誕生日おめでたまわ」

「ああ、そうだろうよ。おまけに今、俺の側には夜々がいねえ！」

「せめて、書き置きを残して行くか。キンバリーに伝えることができれば、連中がどんな強敵だらうと、どうにかできる……気がする。

だが、その結果、連中が人質を殺したら——シャルは永遠に助からない。

苦い、苦い、苦笑い。雷真はむしろ可笑しくなつて、笑いながら言つた。

「貧乏くじだぜ、まつたく。まあ、案内してくれ

「……わかりました」

シンが先導する。周囲の注意を惹きたくないの、走る」とはしない。理学部の前庭を

抜け、木立中に差し掛かったとき、見知った乙女が現れた。

青みがかった銀髪、青い着物の——

「いろいろ！」

「雷真殿！」

顔を染め、斜め下に視線をそらす。見惚れるくらい可憐な仕草だ。

よほど、「ひこてきてくれー」と叫びそうになつた。

しかしさく目だ。他言無用、自動人形の随伴は不可。雷真は丸腰で向かわなければなら

ない。といで連中の斥候が見張つているか、わからないのだ。

ややである以上、普段通りにふるまわなければならぬ。

「アーヴィング、先に何を用か？」

「雷真殿……事態はそれほどに差し迫つてゐるのですか？」

卷之三

「高貴殿が——」

「……要塞」ついで結構な」

「ななな何をおっしゃるのでーーーそそそそんなん大それたこと私はーーー」

あわあわと両手を振り、目の前の空気をかき混ぜる。

お前が本物の魔術師だよ。お前が本物の魔術師だよ。

い方にはすがに喜んだ顔で、すかさず手に書真を見上げた。

卷之三

「ああ、俺はオルガと結婚する——って、おまえ大丈夫か？ 真っ青だぞ？」

「どうがお気遣いなく……おとより私は青白い女でござります。それはもう死人のよう

卷之三

「何をおっしゃいますやら。では、青白い女はこれもあり退場します。」(機嫌よ)

さびすを返した途端、がつん、と屋外灯にひたいを強打する。

数歩歩いてダンチにつなげ、ハサ留を引っくり返し、それこそ腰のようにならぬ心と、いろいろは去つて行った。

「……えらく動搖してゐるな。俺が婚約したつて、そんなに驚く」とか。

「相変わらずモテモテでいらっしゃいますね、ミスター・アカバネ。さすが東洋のドン・ファン。まさに入れ食い状態——」

「あんたまで寝な」と「さうなよ」 そんな言葉を夜々に聞かれでもしたか——

言いかけて、やめる。

夜々はいない。聞かれる心配もない。

ひとく調子が狂う。雷真はがしゃがしゃと頭をかいた。

「では、参りましょウ」

「ああ」

先を急ぐシムに続いて、雷真も足を速めた。

2

十数分後、雷真は地下道にいた。

時間がない。ひと日がなくなつたのや、ここからは全力疾走だ。



じんめり濡つた空気をかきわけ、水路ぞいの歩道を駆ける。天井には〈照明〉の魔具が設置され、足もとに不安はない。空気も清潔で、息苦しさは感じない。シンと二人、派手な足音を立てて走りながら、雷真はたずねた。

「ここは何なんだ？」

「上水道として使われているようです」

「上水……ついつても飲み水じゃないよな？」

「実験用、あるいは冷却用の水でしょ——こちらです」

三叉路を右へ。いささかもためらわず、シンは曲がった。

「……あんた、慣れてるな」

「お忘れですか？ お嬢さまがグランビルの『紳男』に化けていた頃、この地下道を機械にしていました。構造の大半を記憶しております」

やはりシンも優秀だ。迷路のようないの場所を、しつかり把握しているのか。方向感覚には自信のあった雷真だが、方位はもうあやふやだった。それでも、最深部に向かっているのはわかる。この先が、あの大型洞とつながっているのだろう。

「——？」

ふと、背後にかすかな気配を感じた。

小動物か。ネズミか何か。あるいは、よほど訓練された刺客——

敵意のよやかなものが響ひしめる。誰かが息を潜めて、通話している……。
だが、リヤの足音が邪魔で聞こ取れない。

「マスター・トカバネ、ユウかなわしがしたか？」

「……いや、何でもない。とにかく、シバ」

「何でしゃべる？」

「あんたは姫様の人物なんだよな？」

「無論です」

「それが何で、アリスに忠誠を誓ひしめる？」

シンが言葉に詰まる。雷真は豊み掛けるように、さらにたずねた。

「あんた、最初はバーンスタイン——ベルンシュタインって家に仕えただんだろ？」

それがユーハーでアリスに仕えているのか。正体が露見した今も。

十数秒も沈黙が続く。答える気がないのかと思うと、別のことを質問してしまった。

シンが静かな声でつぶやいた。

「ベルンシュタインは、むとよりラザフォードガードの機関でした」

「——」

「私は知りませんでした。それだけの話です。ゆえに、私は今なお、ベルンシュタインの
執事でもあります」

「仕えてる家がにせものだった——あんたはそれで納得でもたのか？」

「納得？」

「ふん」と鼻で笑う。

「かく言う貴方は、何のために、このイギリスに渡りましたのですか？」
ちらり、と鋭い一瞥をくれる。今度は雷真が返答に詰まつた。
だが——相手の本音を訊いた以上、こちひも本音で答えるべきだ。
重くなる舌を無理やり動かして、雷真は本当のこととを言つた。

「妹の……一族の仇を討つためだ」

「(元帥)マグナスを? それはなぜですか?」

「なぜ……?」

「妹君を愛していただから——違いますか?」

「……わからない。だが、俺が撫子にしてやれることは、それだけなんだ」

シンは何も言わなかつた。

だが、かすかに——ほんの一瞬だけ、回顧を見るような目をした。
雷真が撫子を想うのと同じように、アリスを想つてゐるか。そのまま連れ込んでいる
のか? あの残酷で、危険な娘に? そのとき、突如として通路は終わつた。

「仕えてる家がにせものだった——あんたはそれで納得でもたのか?」

レンガの足場が逸切れ、さきなり開けた空間に出る。明かりがなくなり、真っ暗闇だ。天井は相当に高い。若肌むき出しの裏面が、なだらかにくだりている。

そぐり、と寒気がきた。

闇の中に大勢の人間が^{アリス}いるような、潜んでいるような、独特の気配。間違いない。あの大空洞だ。シンは躊躇せず、斜面を降りていく。雷真は腰からランプを抜き取って、走りながら火をともした。

「（）は一体、何なんだ。あんたやアリスは知っているんだろ？」

「お嬢さまは」存知です。無論、学院長も

自分は知らない、と云うことか？

「前に、シャルがアリスに脅迫されて、学院長を暗殺しようとしただろ？」

あのとき、シャルは時計塔を吹き飛ばし——結果的に、この空洞の存在を暴いた。

「アリスは動機を」あやちや書かれてたが、結局は、この大穴の存在を世に喧伝するのが目的だった……（）とだよな？」

シンは答えない。雷真は構わず、さらに踏み込んで言う。

「あのとき、アリスはグランビルの頑固男に成りすましていた。つまり、それはグランビルの——英國の意向つてことだ。英國が知りたがる学院の暗部なり、やはりこいつは研究の集大成。超高度魔術の実験場か、それなけりや……」

既に実験ではなく——

「巨大な魔術装置……？」

「……やはり貴方は危険な男ですね、ミスター・アカバネ」
シンは無表情のまま、そう言つた。雷真の疑問を肯定したに等しい。

つまり、この空間全体が巨大な魔術装置なのだ。

これほど大掛かりなもの、莫大な予算と労力、そして時間を費やしたはず。機巧文明の最高学府ヴァルブルギス王立機巧学院が、そこまでして欲しがるものと言えは。

「まさか——精神機巧に關係してゐるのか?」

「ドイツとはまったく違う方法論ですが——おそらくは」

シンが認める。雷真は足が震えそうになつた。

多くの人間を巻き込み、ときには殺害し、実の娘をスパイに仕立て上げ、権力を駆使し、大量の資金をつき込んで、学院長が目指しているもの。

それが精神機巧か——

「……人間を作るつてのが、そんなに大事なことがよ——」

くだらない。くだらない。くだらない——

そんなことのために、撫子は……

怒りで視野が真っ赤に染まる。歎嘆みする雷真に、シンの冷酷な声がかかつた。

「貴方は、人間の苦みをくだらないとお考えですか？」

「……なに？」

「人間が子を産み、育て、命の連鎖を続けていくのは、くだらないですか？」

「それとこれとは別だろ！ 子どもなど、男と女で作りやいい！」

「それが叶わぬ者もいます」

「——」

「それに、人間をデザインされば、よきよい未来が拓けるかも知れません」

「どういふ……意味だ？」

「優れた人間、争いを好み人間、法遵守精神に富む人間——そうした（善人）ばかりが世にあれば、人々は大国間の戦争に泣く」ともなく、重犯罪者の所業に泣かされることもないのです？」

「う——論理の飛躍だ、それは——幻想だ！」

らしくもなく、自身の動搖をそのまま言葉にしてしまう。

今、恐るぐま」と聞いた。

幻想だと切って捨てたが——それは、悪魔的な魅力を秘めた思考だった。

人間は利害の不一致で争う。今まさに大国が争っているのも、自国民の利益を守るためにどちらか押取し、どちらが押取されるかという問題だ。

その大国の中にあっても、支配と被支配のパワーゲームがある。

すべての人間に平等の配分などできるはずもない。人間には生まれながらに〈性差〉があるので、生存に必要なエネルギーも、欲しがるものも違う。

だが、人間すべてを「あるべきように」生むことができたら？

万人に平穏で幸福な世界は実現可能かもしれない。現時点では絵画・幻想にすぎない、とも——それは人類の究極的な夢、進化の行き着く先ではないか？

(違う)

その理由は一面で正しい。だが、決定的に間違っている……。

「……それは、^論だぜ、シン」

「論^弁ですか？」

「連中が神性^{アントロ}機巧^{テクニ}を欲しているのは、理想郷の実現なんかが目的じゃない。より完成された兵器を求めてのことだ。崎麗^{カワラ}なお題目を並べたところでは、底が知れてる！」

「ですが、理想の第一歩として、利益を求めるのは合理的です」

それは、そうだ。社会は利益によって動く。人類全体に変革をもたらすためには、目先の〈得〉がなければ——(報酬)がなければ動かない。

「文明論に関して、私は素人です。世界の行く末は指導者たちに任せましょ。私はただ、お嬢さまがやれとおりしゃつたことを実行するのみです」

「盲従を表明するその言葉が、不思議と雷真の胸を打つた。

シンの言葉は、單純な依存とは違う。

これは覺悟だ。シンはアリスを主と定め、盲従を「」の正義と決めたのだ。主のあやまちを正し、いさめる忠義もある。それは勇気のいる、尊い忠義だ。だが、シンの忠義は違う。アリスが間違っているなら、その間違いの結果も、罪も、罰も、主とともに引き受ける——それだけの覚悟。

それもまた、尊い忠義の形だと思つた。

「そろそろ指定の場所です。」

シンが速度をゆるめる。ほどなく、前方に断崖が見えてきた。

切り立った崖の下、真っ暗な闇の中に、うつすら城塞のようなものが見える。

「お手をどうぞ、ミスター・アカバネ。かなりの高低差がございます」

シンが大きな手を差し出す。その手を取るのは、気恥ずかしい以上に、気味が悪かつた。

雷真は過去、シンに殺されかけたことがある。

シンに身を任せるのは肝の冷える行為だが——雷真はその手をつかんだ。

シンは自身の（完全統制振動）を発動し、雷真を抱えて浮き上がった。

宙を飛んで、するように崖下に下りていく。

「ミスター・アカバネ。私は貴方が大嫌いです」

「知ってるよ。何だ、いきなり」

「腐乱死体が真夏の湿気の中で醸し出す惡臭の次くらいに嫌いです」

「そこまでかよー 何が言いたいんだー」

「それでも今だけは、私を——いえ、あの腐乱しきつた精神構造のお嬢ちゃん、信じてはもらえませんか？」

「……信じる？」

「つかの間の……刹那の信頼でけうこうです」

思い詰めたような響き。だが、すぐにいつもの調子に戻る。

「——と私が浅薄な真心を見せたといろで無駄でしょ。ですから私はこいつ申し上げるのです。」判断を誤れば、ミス・ブリューが救われませんよと

なるほど。そつちは反吐が出るほど効果的だ。

やがて、シンは地の底に降り立った。

地面がほんやり光っている。遠目には大理石のように見えたが、近くで見ると魔術合金が何かだ。磨き上げたように輝いている。

駆け続けること数分、〈宮殿〉が見えてきた。

モスクに似た丸屋根のドーム。白亜のよみに美しい、謎めいた建造物だ。

「よしやたね、ライシン」

宮殿のバルコニーから声がかかる。そこに、アリスが待っていた。

「よう、アリス。こいつは何だ？ 宮殿……か？」

「（愚者の聖堂）——またの名を（スアリガン^{ヤー}・サイクル）」

聞いたことのない単語だ。アルファサイクル、というのは知っているが。

雷真が理解していないのを見て取って、アリスは肩をすくめた。

「（人造靈魂）機械装置」と言えば、何となく想像がつくだろう？

「……聞き違いか。靈魂って聞こえたんだが」

「実際に魂なんてものが存在するのかどうかは別として、（自意識）の集合体を生み出しそう間に固着させる魔術装置だよ」

アリスはそれ以上の説明はせず、目を細めてシンを見た。

「」苦労だったね、シン。見事、彼をおびき出しちゃくれた

その可能性を考えていなかつたわけではないが——雷真は衝撃を受けた。

アリスが指を弾いた途端、（虚像）の魔術効果が失われ、闇の中から次々に人影が姿を見せた。二十人超の大人数。そのうちの半数は、中世の騎士めいた甲冑を着込み、十字架をあしらった腹面をつけていた。

彼らの中から、首冠^{レーリー}と思しき美青年が進み出でくる。

「迂闊^{ハキキ}だな、（下から）【書目】。こうもたやすく諒にはまるとは」

「ローゼンベルク……」

かつて雷真に野望をくじかれた、エイフからの留学生。あのローゼンベルクが、騎士団を引き連れて、そりにいた。

3

学院長公邸、その執務室にて。

豊かな口ひげをたくわえた紳士——学院長が公文書のチェックをしている。部屋の入り口には彼の秘書官アグリルが詰めている。アグリルは腕時計を見ると、音もなく席を立ち、サーベルを腰に帯びた。

「うん？ えい行くのかね、アグリルくん？」

「三時になりましたので、紅茶の休憩をいただきます」

「ひいだに、私にもお茶をもらえんかな？」

「私をメイド扱いとはいひ度胸だなジジイ」

ぎろりとにらまれて、学院長は首をすくめる。

「いや、ひだに淹れてくれんかね、ヨルヘ！」だが……

「学院長には専属のメイドがいるでしょ？」

「君に洩れて欲しいのだよ」

か一寸、とアグリルの顔が赤くなり——ないで、青さめた。

学院長のビケが数本、サーベルに斬り落とされて宙を舞う。

「セクハラで訴えるぞエロジシイ」

「……私は殺人未遂で訴えたいところなのだが」

アグリルが一瞬で面合意を詰め、抜き放つた刃——その高速の一撃を、五十も過ぎた男が着座したままかわしたのだ。お互いに人並みはずれた攻防だった。

「邪魔をするよ」

そろぐ、ノックもなく入ってくる者がいた。瞳には知性を、口元には諂諛をにじませて。年齢は八十近いだろうか。頭髪は真っ白で、杖をついている。

アグリルが戻まり、あわててサーベルを腰に戻した。

「これはバーシヴァル教授継代」

「ご機嫌よう、ミス。学院長とのティータイムを」「縮してもいいのかね？」

アグリルは「もちろんです」と応えたが、学院長は冷い顔になった。

「残念だよ、バーシヴァル。君は私の樂しみをひとり取り上げた」

「ほう？ それは失敬……何のことかね？」

「アグリルくん。すまないが、ミス・グリーンウッドにお茶の手配を頼んでくれ」

「……ござりました」

アヴリルは一礼して去り、バーシヴァルは勧められるのを待たず、勝手に来客用の椅子に座った。学院長もそのまま対面に腰を下ろす。間もなく有能なメイドがティーセットを用意して、執務室に入ってきた。

メイドが紅茶を注ぎ、退出するまで、どやかに無言だった。

一人きりになると、バーシヴァルは窓の外、壁に染まる空を見上げた。

「東の田舎者どもが、土に潜って何かしているようだな」

天気の話をするような調子で、そんなことを言う。

それから学院長に向き直り、手元の憲鏡を見つけたような目をした。

「思い切ったことをしたな。おおえのんがあれを捨てるとは思わなんだ」

学院長はカップを口に運びながら、はぐらかすように答える。

「捨てではない。手放しただけだ」

「同じことだよ。可哀想ないことをする。あれほどのへんへんされたものか。……やれども、

おまえさん——暗けに出るやうかね。」

「ふ……君の口はしませんか」

苦笑しつつ、うなずく。

「その通り。我らは帝国の支配を脱し、魔術世界に〈新秩序〉を打ち立てる」

バーンヴァルは愉快そうに肩を揺すった。

「滑稽な話だな。魔術師協会の庇護の下、王室の意向を無視して好みにやらされた我々が、今まさに協会の権威を拒否せんとする」

「親離れというものだよ。かつて、魔術師の祖は神の庇護を捨て去ることで、假想と探究の世界に入った。我々は——否、魔術師はみな同じことをせねばならん。学院も、予見の子もな。あれもまた然り」

「おまえさんの行く道は親離れどころか、親殺しにも思えるがね」

「親殺しは親離れのメタファーだ。ダイヤモンドの原子配列は美しいだろ?」
学院長の眉の下、鋭い双眸に妖しい光が宿る。

「構造とは単純ではあるほど強い。世界に権威は二つあるからね」

「おや? その理屈では、陛下が気を悪くされるのではないかね?」

ラザフォードは答えない。

ただ、口ひげが片方の端だけ、皮肉げに持ち上がっていた。

うんざりするような再会。雷真はため息をこらえ、敵を見上げた。

シンの言つたことは本当だった。

敵はローゼンベルク。かつてロキに蹴散らされた、ドイツの名門貴族だ。既に学院を放逐された身の上なので、制服姿ではない。かわりに騎士団の制服らしき、装飾過多の軍装を着込んでいた。

「こりやまた、懶かしい顔が出てきたもんだな」

苦虫を噛みつぶしたような気分で、軽口を叩く。

「成績不良で夜会を追い出された連中が、今さら学院に何の用だ？」

ローゼンベルクはうすく笑つただけだ。彼の周囲の団員たちも、目立つた反応を見せない。挑発に乗らない冷静さ……強敵だ。

雷真は油断なく相手の人数を数えた。

ローゼンベルクを含めて、人形使いは一人。騎士人形は10体。

そして一体、騎士たちとは明らかに違う人形が交じつていた。

金属製の機械人形。体に比して腕が大きく、一方で脚が細い。大きな装甲板が上半身を覆っている。ロキがまとうハーフマントに似ていた。

手首にはフィン状のバーツが三本ずつ、魚の背びれみたいにくついている。明らかに刃物——攻撃時には腕からせり出し、鉤爪のように使えるのだろう。腕の大きさと、その刀物から見て、パワー押しの格闘タイプに見えた。

それにしては脚が貧弱だ。もともと、脚力は必ずしも機動力とイコールではない。魔術で高速機動であるゆえに、脚力がいるという考え方もある。

ありありと歎車が鳴っている。何となく古めかしい。設計思想やバーチの形状も、よくとなく時代錯誤の臭いがする。アンティーケードールか……。

正体不明だが、ほりありしてらるいのがひとり。

あれは、凄まじい性能を極めている。間違いない。機巧兵士の方が強力なら、そちらを使うだろ？。敢えてこれを持ち出しだよ！ハーリー君、シン以上の戦力と見て間違いない。

「(下から)一番目) を捕縛しろ」

ローゼンベルクが命じる。騎士団は一齊に動いた。

すぐるように宙を飛び、雷真を取り囲む。適度な間隔を保った理想的な包囲。逃げ道を封じてから、一歩ずつ間合いを詰めてくる。

(ヒーラー——?)

雷真は(迷宮の)魔王の指導を受け、紅薙陣を得た。クリセルタロスではないにしろ、生身で自動人形と戦う」ともできる。

だが、相手は機巧兵士。彼らが搭載している(完全統制振動)は、基本的にシンと同じ能力だ。その攻撃力、耐久性は侮れない。

まして、ローゼンベルクには正体不明の自動人形もある。

抵抗すれば危険——それは間違いない。だが、だからこそ、抵抗すべきかもしれない。戦力差がある以上、一度捕縛されてしまえば、もう打つ手がない。どうする……!?

雷真はアリスに目をやった。アリスは笑っている。間にかかるた機物をなぶるような眼で、雷真の窮地を察しながら見えた。

それで、わかった。先ほど、シンは何て言っていた？

(そういうことかよ……!)

雷真は舌打ちをして、両手を上げ、抵抗の意志がないことを示した。

ローゼンベルクは意外そうに目を見開いた。

「ほう。迂闊な抵抗はしないと、そういうことか？」

無視して顎を背ける。雷真の代わりに、アリスが答えた。

「まあ、シャルロットを人質に取っているからね。退屈だけと、妥当な判断だ」

「——では、捕らえる。油断するな」

騎士たちが雷真を押さえ込み、魔力絶縁の手錠をはめる。

魔力の放出を遮断され、息苦しいような、暑苦しいような、独特の不快感が襲ってくる。かなり強力な拘束具のようだ。

雷真の拘束が解わると、アリスはローゼンベルクを振り向いた。

「そして、僕はお室を納品したわけだけど——取り引きは成立かい？」

「ああ、無論だ。が……すまない。迂闊にも契約の詳細を忘れてしまったようだ。我らが得るものは何だつた？」

「生きたアカバネと、スプリガン^{スプリガン}とサイクルの観測データだよ。僕らの手間かい、こんな中枢部まで侵入できた——これは僕達だらう？」

アリスは足もとの〈聖堂〉を示す。ローゼンベルクはうなずき。

「確かに。たとえ外部からでも、これを観測、記録できたのは大きな収穫だ。我らは対価を支払うべきだろうな。たとえば——」

「学院の望みはドイツとの信頼回復。そして、MK4サンブルの譲渡^{譲渡}」

細いあい^{あい}をしゃくってシンを示す。しかし——

ローゼンベルクはわざとらしく首をひねった。

「はて……俺が思うに、貴公らが得るべきは」

ふり^{ふり}と亀裂^{くわつ}のよくな笑みを浮かべる。

「我らの報復だらう？」

騎士人影が一齊に剣を抜いた。

人形使いたちが魔力を充実させ、即応態勢になる。気がつけば、彼らの配置は雷真だけ

やなく、アリスとシンをも包囲していく。

ローゼンベルクは悠然と、アリスとの距離を詰めていく。
「アカバネの血族は貴い受けた上で、我らは当初の日論^{ひごん}通り、裏切り者たる貴公を始末^{しめ}し、MK-4を破壊する」

「……まあ、そろへるだろうと思ひたけんね」

アリスが笑つた瞬間、何かが吹き込んだのだ。

やぶんり、と裏はじ^{うし}衝撃とともに、魔術合金の地面に着地する。

「の理由で、雷真は驚愕した。

今の衝撃でも地面にはヒビひとつ入らなかつた。驚嘆すべき強度だ。そして——
やつてあたのが、黒い着物をまとひだ、黒髪の乙女だつたから。

「夜々！」

夜々は素早く雷真の後ろに回りこみ、えいり、と力んで拘束具を引ぬかぬいた。
示し合わせたとやうにシンが動く、アリスとローゼンベルクのあいだに割り込む。
夜々は雷真をかばうように立ち、油断なく騎士たちをにらみながら。

「無事ですか、雷真！」

「ああ。おまえ、ユウヤのドリ」を認め止めたんだ？」

「言つたはずだす。夜々はユウヤが、お供」

「……どうしたの？」

先ほどの道下通路で感じた気配はそれが。

……いや、待て。敵意のよくなものも感じたはずだが？

「それで、あの命知らずな金髪女はどうですか？ 夜々に殺される予定の」

「そんな予定はない。敵意の正体はそれか？」

オルガに対する、タタ漏れの殺意だつたようだ。

夜々は周囲を見回す——アリスを見りなし、びっくりとした。

「あのひとは——それじゃ、まさか……？」

「そうだ。あのオルガは強者——」

「オルガさんだけじゃなく、アリスさんにも手を出しちゃ……？」

「え？ そりちに飛躍する？ オルガの正体がアリスだったんだよ——」

クラクシながら、雷真は胸が熱くなるのを感じた。

夜々もまた、シハヒ回した。

主を絶対の善と認め、エリナでも従う覚悟を決めてる。

夜々は言つてくれた。いつまでも雷真を護ると。それは、たとえ雷真が判断を誤つても、

最後まで信じ抜くという覚悟——徹底的な負託だ。

だから、僕、俺は間違つてはいけない。

雷真は決意も新たに、騎士団と正面から対峙した。

ローゼンベルクは面白そうにアリスを見た。

「どうしたことだ、アリス？」

「愚問だね。つまり、こういうことだ」

次の瞬間、騎士団のさらに外側を、大勢の人影が取り囲んだ。学生の礼服から装飾を取り払い、実用性を高めたような戦闘服。警備の制服とよく似ているが、白と青のカラーリングが決定的に違う。通常の機体よりもふた回り大きな、特別仕様の量産型自動人形を連れている。

夜々も驚いた様子で、もの珍しそうに彼らを眺めた。一応は警備のようだが——雷真も夜々も、初めて見る連中だった。

「」「どうした……何だ？」

「(要警衛士隊)。迎撃や侵入者排除が専門の特別な部隊さ」

「感う雷真に、アリスが説明してくれる。

「警備は理事会の管轄だけど——彼らは学院長直轄だ」

つまり、学院長が動いた——

アリスは余裕たつぱりの口振りで、ローゼンベルクに嫌みを返した。

「迂闊だよ、ローゼンベルク。『うちたやすく策にはまる』とはね」

そうか。アリスは最初から、ローゼンベルクと対決するつもりだったのか……。シンは先刻、「お嬢さまを信じてください」と書いた。

それはつまり、アリスが雷真を裏切ってはならない、と云う意味だらう。

アリスの目的は、《十字架の騎士団》残党をおひき寄せ、一網打尽にする、

そのためのエサとして、雷真を引り張り込む必要があったのだ。

「取り引きにこ」を指定した理由がわからなかつたのかい？」

アリスは暗黙的な笑みを浮かべ、ローゼンベルクを追い詰める。

「君たちが《聖堂》を外から網羅したところで、構造の半分も理解できないしな。学院側には失うものは何もなく——一方こ」ヤシエンバチをやらかして、カツツバルケルが動かないはずもない」

学院の警備を利用して、敵を排除しようとした……もつた。

だが、やり方が回りくねる。学院長がその気になれば、りんなき戻を打つかもなく、正面から撃破でもそなめだが……？

雷真の疑問などおかまいなしで、アリスはまとめに入った。

「パパは冷徹な魔術師だ。利用価値のない君たちと和解」ようなんを考えない。——これで幕切れだよ、ローゼンベルク」

アリスの台詞を最後まで聞き終えると、ローゼンベルクは顔を上げ、

「迂闊だな。實に……哀れなほとにな」

「くくう」と笑つた。愉快そうに——氣の毒そうに。

アリスの眉がほんのかすかに動くのを、雷真は見逃さなかつた。

雷真の脳内で危険信号が鳴り響く。

首筋にびりびりと戰慄が走つた。雷真は即座に金剛力を起動、効果を自らの肉体に適用し、彈丸のように飛び出した。

一瞬で（宮殿）のバルコニーに飛び上がり、アリスをかかえて跳躍する。

間一髪、アリスが立つていた場所に、強烈な雷電が生じた。

ヘイムガーダーが五体、バルコニーに着地する。今の一瞬で距離を縮め、一齊に電撃を放つたらしい。シンが対応する間もない、見事な奇襲だつた。

通常のヘイムガーダーより、さらに敏捷性が高い。雷真の反応が遅れていたら、アリスは黒コケだつた。

雷真は混乱した。学院長直轄の警備が、アリスを狙つた——!?

ローゼンベルクが右手で顎を隠す。笑いをこらえているようだ。

「ふう……そもそも、貴公の言う通り、ラザフォードは冷徹な男だ——」

雷真の腕の中で、アリスが身を硬くした。

さすがに理解が早い。狼狽は一瞬、すぐさま状況を理解する。

「……モヤシタ」とか

「ミヤシタ」とだよー 説明しろー」

雷真はアリスを睨める。アリスは答えない。

二人の様子を見て、ローゼンベルクはあからさまに嘲笑した。

「知恵が足りんな、（下から）【番田】」

「……何せ（下から）【番田】だからな。劣等生でもわかるよ、君うしろれ」

「いかに我らが精銳でも、もはや学生ではない。学院長の許可なく、リヤマで自由に動けると思つか？」

「——

「その女の狡知は身に染みて知らへる。これからの用意はするよ」

「おい、アリスー エラ どうことなんだー」

「……簡単なことだよ」

「ら」ももなく、震えて。

死人のように青ざめた顔で、アリスはつぶやいた。

「ババに……捨てられた」



Chapter 5 それぞれの理由

1

言われたことが信じられず、雷真はアリスの顔を凝視した。

アリスの瞳は小刻みに揺れ、焦点が定まらない。

確かめるようにシンを振り向く。にちらも青ざめてくる。それでもアリスを睨みつぶす。敵への警戒を怠らない。鬼気迫る悲惨な気迫——とても演技とは思えない。

「捨てた」とは人聞きが悪いな」

ローゼンベルクは肩をすくめ、切り捨てるよう言つた。

「先にラザフォードを裏切ったのは貴公だらう。」

「……もういう意味だ。」

雷真が面へん、ローゼンベルクはにたり、と愉悦の笑みを浮かべる。

「ラザフォードはアリスに命じたはや——シンをドイツ帝国に差し出せ。ふむ。だが、彼女は〈学院長の使者〉という名目で、違う話を持つてあた」



「違う話……の？ 何だよ…」

「交換条件だ。シンを学院に^{おど}ねる代わりに、〈愚者の聖堂〉の外部観測を許し、ガラガラはライシン・アカバネの身柄を引き渡すと」

「……すみた条件だつたと思つたよね」

アリスは弱々しくうなづいた。ローゼンベルクはうなずき、

「ああ、すきでいた。やえに、我らは別ルートで学院の真意を確めた」

「——」

「貴公の独断専行を知るよ」ラザフォードは言つた。「娘の行動は私の閲知するところではな」とね。つまり、我らが貴公に報復しても、学院は動かぬとするやう

「それでは……ババと共謀して、僕をつぶしにあた……ってわけか」

「今は同情もしよう、アリス。實に皮肉な話だ。幾度となく他人を欺き、裏切りを重ねてゐた貴公が、実の父親に裏切られるとはな」

やり取りは半分ほとしか理解でぬなかつたが——雷真は驚愕してした。

(エ)ふじが踊らされた……(エ)

シンの言葉を借りれば、他人を欺く「ふじ」が三度のメシより好きだと「や」ふじが、騙し合ひの勝負で読み負けた。

……痛つたのだ。

最後の最後で、父親を信じた。父親への期待を、捨てきれなかつた。

アリスはもう戦意を喪失している。雷真の腕の中で、されるがまま、体を丸めて震えているだけだ。シンと夜々はに戦態勢——だが、形勢は圧倒的に不利。敵はシンの回旋機が一〇体に、ペイムガーダーが二体もいる。

「」は地下空間のど真ん中。包囲されて、逃げ道もない。

雷真と夜々だけなら、あるいは強攻突破も可能だらうが……。

その思考はアリスにも伝わつたのだろう。アリスは「こんな」と言い出した。

「……」んなときたから言つておくれ。呪いの解除コマンドは「

「やめろ。あわてて圓いたんじや間違うぜ。あとでじりくり聞き出してや——」最後まで言えない。騎士の一體が背後から突進してきた。

夜々がとつとつに反応している。ぐるりと腰を回転させ、強烈な蹴りを見舞う。完全統制振動はさすがの防御力。蹴りの衝撃と相手のペタルが均衡——最終的に、夜々の蹴りが勝る。

騎士が弾き飛ばされる。だが、大したダメージは受けていない。空中で急止、一瞬後、再び向かってきた。

それが開戦の合図だ。騎士もペイムガーダーも、一齊に群がりこれた。

恐るべき速度を發揮して、ペイムガーダーの一體がアリスに迫つた。指先にはスパーク

する雷電——電圧が高い。当たつたが最後、確實に氣絶する。

そちらにはシンが反応している。シンは跳び蹴りを放ち、一撃で粉碎した。

夜々もまた、手近な一体をかかとでスクラップにする。單体の性能では負けていない。このまま押し切れるか……という甘い期待はしかし、すぐに否定された。

ヘイムガーダーはともかく、完全統制振動の方は難敵だった。

夜々とシンの攻撃に耐える。一撃で破壊できなければ、數に勝る方が有利だ。夜々が劍で切りつけられ、体当たりで弾き飛ばされる。ただちに援護しなければ、じり貧になる。雷真はアリスを離し、夜々の方に駆け寄つた。

その瞬間を、ローゼンベルクが待つていた。ローゼンベルクから強烈な魔力が放たれ、それは巨腕の戦士に流れ込み、強大な力を与える。

フイン状のバーツがせり出して、案の定、鉤爪となつた。

アリスを狙つて飛ぶ。雷真は動き出した直後——反転が間に合わない！

アリスは自らの運命を受け入れるように目を閉じた。

殉教者のようなその顔が、おびただしい血で染まる。

……それは雷真の血でも、アリスの血でもなかつた。

アリスの前に、シンの胸があつた。

背中から裂かれ、胸まで傷が貫通している。鉄壁のはずの完全統制振動を、敵の鉤爪は

たやすく貫通した。シンの魔力を瞬間的に上回ったようだ。

「シン……？」

アリスが呆けたようにつぶやく。

「シン……バカだね、君は……そんな深手を負つてさ……？」

シンが背後の敵を蹴り上げる。巨腕の戦士は軽やかに跳躍して、ローセンベルクのもとに戻った。シンはそちらに向き直り、あくまでもアリスを護るうとする。傷は相当に深い。骨や内臓が見えていた。人間なら確実に致命傷だ。

「実に……遺憾です、ミスター・アカバネ」

シンは雷真に背中を向け、あたかも遺言のように言った。

「よもや……貴方を頼みに思う日がこようとは。裏腹ではありますか……どうか……お嬢さまを護りてください」

「いや、とシンの魔力が燃え上がる。体に残る力を、全部引き出すつもりだ。

「……夜々、こふ」

「はい！」

騎士を蹴散らして、夜々が雷真の側に飛んでいた。

その背に魔力を送り込む。それで、雷真の意図は伝わったようだ。夜々は腰を落とし、天井を向いて、力を溜めた。

「吹鳴絶術——（ひきびき太刀影）」

濡めた力を一気に解放。すとん、と爆発的な勢いで、黒い影が天を貫いた。凄まじい衝突音が響き、空洞の天井に穴があく。崩れ落ちる瓦礫。月明かりがひとつじ、蜘蛛の糸のように差し込んでくる。

「奴は離脱する気だ！ 進撃準備！ 絶対、逃がすな——」

ローゼンベルクが指示を飛ばす……が、遅い。

既にシンが動いている。さながら飢えた猛虎、あるいは荒れ狂う暴風。血があふれるのもかまわず、シンは手当たりしだいに敵を襲い、なぎ倒し、脱出の隙を作つた。

雷真は魔術の起動を終えている。素早くアリスを抱えて、真上に跳んだ。すいぶん初速を抑えたが、アリスにかかる荷重は殺人的だった。アリスはこぶつと空気を吐いて、全身から力を抜いた。……どうやら、失神したようだ。

力を加減しすぎたらしく、雷真の体はギリギリ地上に届かなかつた。アリスを右手一本で抱え、左手を伸ばす。指先がすかりと宙をかき——その手を、夜々がつかむ。

岩盤の側面に張りついて、雷真を待つてくれた——

夜々は雷真を地上に放り投げ、自らもびょんと飛んで飛び出した。夜々と二人、地上に飛び出しながら、眼下をにらむ。

真下ではもううし、シンが一〇本の劍で串刺しにされたところだった。

2

飛び出した先は、学院の〈大庭園〉だった。

「大丈夫ですか雷真」

「……俺は平気だ。それよりアリスが」

「今の跳躍はかなりの衝撃だった。普通の人間なら死んでいてもおかしくない。アリス、しきりしろー 大丈夫か？」

アリスはせき込みながら、のろのろと顔を上げた。

「言つただろ……あいにく僕は、半分以上、自動人形だ……」

「雷真ー 早く移動しましょーー」

夜々に急き立てられ、校舎裏へと走る。

時刻は既に午後六時を回っている。木立中にひと氣はなく、見とがめられる心配はない。

通りの手を警戒しつつ、雷真は抱えていたアリスを下ろした。

アリスはその場に座り込み、壊れた人形のようにな、動かなくなつた。

「おい、しつかりしろ。落ち込んでる場合じゃねえだろ」

「……落ち込んでなどいなさい。もともと僕は誰のことも信じちゃいない。たゞえ実の父親であつたとしてもね」

「さうも、ローゼンベルクの野郎が言つてたな。おまえが俺を巻き込んだのは、学院長の指示じゃなく、おまえの独断だつたのか」

「……そうだよ。慢心……かな。僕は連中を出し抜いてやれると思つたんだ。そして——僕の勝手な行為を、パパは有効な策略として認めてくれると」

学院長に無断で危険な賭けに出た。それでも、得があると踏めば、学院長は乗つてくる——」(1)までの話を総合すると、そういう読みだつたようだ。

だが、学院長は乗つてこなかつた。それどころか、アリスを救そつとした。

「ライシン……君はチエスを指すかい？」

「何だ、やぶからほうに」

「駄馬というのはね、捨て時が肝心なんだ。一手遅くとも、早くともいけない」

アリスの瞳が翳りを帯びる。

「目的のためなら、女王だって捨て駒になる。つまらない私情は捨てるべきだ。そして、ラザフォードは私情なんてこれっぽっちも挟まない。でも、僕は……」

「らえきれなくなつたように」、ふうりと笑みをこなす。

「本当は僕が目的なんじゃないから、ユウカで期待してたんだ……」
彼女が何を言っているのか、雷真には理解できなかつた。

だが、彼女が痛手を受けていることはわかつ。

「雷真。これから、ユウするんですか？」

「夜々が訊いてくる。雷真は即断した。

「とりあえず、身を隠そう。行へアホはもとづしかねえけどな」

「また先生を頼るんですか？」

「いやなりやヤケだ。今さら借りのひとりやふたり、知るか」

キンバリーの研究室へ行くのだ。そうすれば、シャルの呪いも解ける。

「だが、移動が骨だな。学院長が喰んでるなら、警備がうじやうじやふるだろ」

「そのことなら、」心配なく。既に応援を呼んであります」

夜々が誇らしげに胸を張る。タイミングをはかつたように、おおがくさん頭上の枝が揺れ、
着物姿の少女が下りてきた。

銀剣を腰の後ろに差した、紅葉色の髪の乙女——

「やっぱり私がいないとダメだね、雷真」

「小紫——あてくれたのか——」

「迷います雷真——そこは『小紫を呼んでくれたのか夜々——』でやー」

「いっそ、夜々姉さまから乗り換えちゃう？」

「ふふふ、小紫つたらお茶目ねふふふ」 まあまあ。

「樹を折るな夜々ー 居場所がバレるー」

ともあれ、助かった。小紫がいれば、移動のリスクは大幅に軽減できる——」の先の活動にも、わずかな勝機が見えてくる。

「よし。急いでキンバリー先生のところへ行こう。アリス——」

アリスはへたり込んだまま、まったく動いていなかつた。

「どうした？ どこか痛むのか？」

「……放つておけよ、僕のことは」

「立てよ。シャルのところに行く」

「解除コマンドなら、教えるよ。まず——」

「いいから、立て。呪いはおまえが責任持つて解くんだー

雷真が腕をつかもうとした瞬間、アリスの瞳が燃え上がりつた。

「もう、放つておけよー」

叫んで、力任せに振り払う。

雷真は呆気に取られて、立ち戻りした。

アリスが叫ぶところなど初めて見た。そして——

彼女が、本当に泣くところなど。

「ふふ……^{ヒヒ}お嬢だらう。笑えるよね。僕は何を勘違いしていたんだろう?」

アリスはほろほろ泣き崩れ、しゃくり上げた。

「パパがどんな人間か……僕にはわからへた……はずなのに……シンの所有を認めさせ
るところか……壊しちゃうて……僕は……何をやつて……うー」

それ以上は声にならない。顔を隠して、嗚咽する。

シャルに劣らず——あるいはそれ以上に気位の高い彼女が、ひと目もはばからずには泣き
しゃくっている。田頭は自信たっぷりの顔を、痛々しいくらいにゆがめて。

アリスが背負っているものを、雷真は知らない。

シャルとアンリは彼女の計略で危機に陥り、ロキとフレイも殺されかけた。

彼女の暗躍の背景には、犠牲者もいるだろう。執行部議長セドリック・グランビルや、
リゼット・ノルアンを筆頭に。

だが、それでも。

今ここに、こうして、父親に捨てられて泣いているアリスは。

ここにでもいる、か弱い少女に見えた。

雷真は慰めの言葉をかけようとして——

「泣き言なら、後にしるー」

叱り飛ばした。肩をつかんで、演示にむかわらに向かせる。

「ふふを取り返したいんだろ？ だから、今は言ふ通りにしやー」

「……取り返す、だつて？」

泣きながら、それでも皮肉げに微笑むアリス。

「バカだね。やありこないじゃないか。それに、シンはわー……」

「あいつが簡単に死ぬか。それに、殺されない」

ほりとした様子で、アリスは顎を上げた。

「連中はおまえを逃がしちまつたんだ。そして、おまえはシンを欲しがりでいる。なら、殺さず手札に加える——ローゼンベルクはそういう男だ」

雷真はわざと挑発的に、からかうように言つた。

「ふふ」たゞ、こんなにふ、着段のおまえなら、恥を理解せぬやうだ。

「……〇・一秒だね」

はなをすすりながら、軽口を言ふ。ふのうの調子が戻つて来た。

「でも、解せないな。その口ぶりじや、君はシンを助けたいみたいだ」

「助ける」

アリスも、夜々も、事情を知らない小悪む、目を丸くした。

「俺は恨みを忘れない。それだけには復讐したい性質だ。だが——」



忘れない」

「……君が、シンに何をしてもらうだいし。」

「あらあだよ。シンは俺を逃がしてくられた。だから、俺もあいつを助ける」

「……あきれた男だね。そんな理屈が」

「うるせえー グダグダ言つてねえで、手を貸せー」

アリスは打たれたように目を見張つた。

顔を伏せ、表情を隠して数秒。

再び顔を上げたときには、もういつもの余裕あつた表情だった。

「頼むだなんて、僕に借りを作りたいのかい、ライシン?」

「ぐつ、それでこそ根性曲がりのお嬢さまだー」

手を差し出す。アリスはその手をじうと見つめ、自嘲した。

「この手を取る資格は、僕にはな——」

皆まで言わせない。雷真は強引にアリスの手をつかみ、立ち上がらせる。

「目的のためなら、感情は捨てる。そんなつまらねえ感情は、特にな」

くしゃつとアリスの表情が崩れた。ほろほろ泣きながら、幼な子が父親にすがるように、

ぎゅりと雷真の手を握り返してくる。

夜々の冷たい視線を背中に感じながら、雷真はアリスの手を引き、駆け出した。

キンバリーの研究室に、棺のような、大きな化粧箱が置かれていた。
箱は二つ。荷の到着を待望していたはずのキンバリーは、荷解きを途中で投げ出しつ
難しい顔で考え込んでいた。

不意に、びん、と緊張が張り詰めた。

ふたりのダガーに手を伸ばし、じうと研究室のドアをにらむ。

そして、ため息をついた。

「騒つたな、(下から) [繪図]。バレバレだ」

口では「バレバレ」など言つたが、雷真の陰影は大したものだつた。以前よりさらに
高度な隠密性を実現してゐる。キンバリーにあえ、姿も見えず、気配も感じず、においも
感じ取れなかつたが——雷真が「あへり」としたのは、なぜかわかつた。
やがて、虚空から染み出していくうちに、雷真の姿が浮かび上がつた。
彼だけではない。夜々に小紫、モード……。

「アリス——」

さすがのキンバリーでも、干想していない顔だった。

アリス・バーン斯坦の名で学籍を持っていた乙女。

その正体が何者か、キンバリーも既に聞き及んでいる。

「珍しい客を連れてきたな。かと言つて、無断侵入は感心しないがね」

「……そいつは悪かつたが、こちにもいろいろ事情があつたんだ。つーか、何で侵入に気付いた？ 小紫の歎詞は完璧だつただろ？」

「君はつくづく基本を知らんな。結界や魔法円は初歩の初歩、私のような超一流の魔術師ともなれば、その私室は堅固な要塞に等しい。たやすく侵入できるものか」

「警報結界……？ だが、魔力なんて全然感じなかつたぞ？」

「私の専門を何だと思っている。君みたいな若造に気取られない程度の技量はあるつもりだ。即死トラップが発動しなくてよかつたな？」

「存在しなくてよかつたな」とは言わない。

その意味を理解し、雷真はぶるりと身ぶるいした。

「それで、何の用だね？」

「力を貸して欲しい」

「断る」

「……まるで、普段の俺の言いがままだな」

雷真は苦虫を噛んだような顔をした。

「だが、頼む。せめて、事情を聞いてくれ」

「それで結論が変わることは思ひんがね。まあいい、話してみる。手短にな」椅子も勧めず、立たせたままで語らせる。

相当切羽詰まっているらしく、雷真は早口で説明した。

アリスの正体。シンを奪われたり」と、十字架の騎士団の、アリス。

そして、〈愚者の聖堂〉で医療衛士隊に狙われた、アリス。すべて聞き終えると、キンバリーは深いため息をついた。雷真が語りたことは、つい先刻、同胞がもたらした情報をそのままだいたいゆえに——ニアを指差し、無慈悲に告げる。

「結論から言おう。今すぐ出て行け。私がしてやれることは何もない」

雷真は面食らった様子で、根が生えたように立ち尽くした。チクリとキンバリーの胸が刺す。

(バカが……。裏切られたような顔をするな)

雷真は納得できない様子で、

「なぜだ。そりや、あんたには頼りすぎだと思うが……せめてバッカアップを——学院や警備の動きを探る……くらいは頼めないか?」

「私はバカが嫌いだ。学院を回す間に回して、私が動けると思うか?」

じうと雷真を見据える。雷真は答えられず、黙り込んだ。

「私は魔術師協会の人間、言わば間諜だ。当然、首輪がつけられている。私が何かすれば、協会の恩恵は台無し——これまでの苦労も水の泡だ」

キンバリーは雷真の耳元に唇を寄せ、声を殺してささやいた。

「〈悪者の聖堂〉は極中の極——魔術師協会であつても、おいそれとは手が出せん。ほんの数か月前まで、存在すら把握できていなかつた」

肩を抱き、諭すように続ける。

「学院は私をマークしている。だから、今すぐこの部屋を出て行け。私は何も見なかつた。何も聞かなかつた——それが君に因つてやれる、最大の便宜だ」

「……わかつた。悪かつた。邪魔をした」

雷真はすんなり引き下がつた。

アリス、夜々、小紫を順に見て、彼女たちを励ますように、力強く言う。

「場所を移そうぜ。ここにいちや迷惑がかかる」

そそくあと出て行く四人。誰も、恨み言ひとつ言わない。

キンバリーは奥歯を噛んだ。壁を殴りつけたい衝動に駆られる。

雷真は引き下がつたが、それは、彼が行動をやめるという意味ではない。

孤立無援だらうと、勝算がなかろうと、関係がない。

道理をねじ曲げてでも無理を通す——赤羽雷真はもうふう男だ。

私に授業を断られた今、あいつは強引でもやりかねない……。

「何を迷ひでるんだ？」

「ふむ、そんな声が聞こえた」キンバリーは顔を上げた。

開け放たれたドアの前に、カルーエルが立っていた。

足音がまたくしながりだ。気配する感じにさせない。職場で胸が高ぶったときは、学院のお抱え医師になつた今でも、体に染みついたる心しき。

キンバリーは不機嫌になつて、

「ふん、ヤブ医者が、迷ひでなんじふむ」

「轟だよ、轟」

「轟——」

「おまえさん、イライラしてふむ、それをやる」

キンバリーの顔を示す。ストッキングがほつれ、巨根してふむ。無意識のやがてに、巨根がリガリやつていたのだろう。キンバリーはムツとした。

「女の脚ばかり見ていると、どうわけか。何の用だ」

「何の用」とは、挨拶だな……。おまえさんには頼まれた仕事だぞ」

苦笑しながら、投げていたバスケットを空から上げる。アタを避け、おまえさんには頼めくな

たシグムントと、シグムントにしがみついているシャルがいた。

……そりだつた。呪いが内科的に致命的な症状を引き起こしていいないか、嫌がるシャルを匿き伏せて、タルールに診察させたのだ。

「変なことはされなかつたか、シャルロット」

「おい、俺を何だと思つてんだ！」

「学生にも見境がない、真性のロリコン医者だろ？」

「……どうの音も出ねえが、俺にも美学がある。元気な患者にしか悪戯しない！」

「元気なら患者ではなかろう」

タルールは舌打ちした。無理やり気を取り直して、カルテを差し出す。

「とりあえず、ドラゴン殿の浄化は終わった。聖化エタノールで消毒、フレイサー反応も消えた。呪いの感染力は、もう無視できるレベルだ」

続いてシャルを指で示し

「お嬢ちゃんの方には魔力安定剤をアチ込んでおいた。濃度が間違つてなけりや——まあ間違つてないが——魔術が問題なく使えるぜ」

「魔術？ そんな処置は頼んでいない——」

にやり、とタルールは意味ありげに笑つた。

「俺は気が利く男なんだよ。やつておふでよかつただる。今いなうではな」

「何を……言つてゐる？」

「エイミー。おまえさんは協会の騎士で、学院の教授さまだが、人間のレディでもある。レディの大半がたしなむつていう、罪のない行動があるんだぜ」

「まわりくどいぞ。何が言いたい？」

「たとえば、他愛もない噂話——とかな」

悪戯小僧のよくな目で、タルーエルはシャルに視線をやる。

シャルはびくうとして、それから、あふとんとした。

タルーエルの意図はすぐにわかつた。キンバリーは覺悟を決め、口を開いた。

4

研究室を出た雷真は、理学部裏手の木立ちに身を匿めた。

蓮歩道のベンチにアリスを座らせ、あたりの様子をうかがつ。

数十メートル先を警備があわただしく駆けて行く——が、いつもに気付いた気配はない。小窓の（八重霞）は完全な隱形効果を發揮している。

それでも、発見されるのは時間の問題に思えた。

アリスはひと言もしゃべらない。夜々はそちらを気にしない。

「これがハーフハーフ」

「そ、うだな……おまえたわ、ちゅうと偵察に行ってくれ」

「偵察? 小紫と?」

「警備の動きと配置を探れ。怪しい奴がいたら、引ひ取つてくるんだ」

日配せをする。夜々と小紫は顔を見合わせ、うなずき合つた。

それぞれが別方向に、身軽に飛び出していく。

「人ありになると、雷真はアリスのとなりに腰を下ろした。

「何くつんでんだ。らしくないぜ、腹黒女」

「……あきれたバカ野郎だね、君は。それが婚約者にかける言葉かい?」

「何が婚約者だよ。おまえ要するに、俺を護衛に使いたかっただけだろ」

「あるいは『豚のエサ』としてね」

「婚約者に『豚のエサ』じゃねえな」

「……僕さ?」かで、パパに捨てられることを予感したのかも知れないな。学院を心底

から信頼していたなら、君を引っ張り込む必要はなかつた

「何で婚約だったんだ? エサにするだけなら、婚約なんて必要ないだろ」

「婚約したという名目なら、君の周囲の女の子たちはみんな迷惑かかる」

「——」

「シャルロットの呪いをすんなり解かれてしまつたら、僕の作戦負けだ。君の怖がり」ら
は、才能や戦闘技能じやない。周りの人間を動かす力さ」

「買ひかはりだ。そう断じる一方で、思い当たるフシもある。

雷真が困つたときには、いつも誰かが力を貸してくれる。

「学院や日本軍から切り離す」とかやさしく――シャルロットや（姉弟）^{ハジヂ} 姉弟は君のため
に戦う。だから、分断したんだよ」

なるほど。ロキが突然やる気になつたのも、アリスの差し金か。

「それに、また新しい女を引ひかけてるおそれもあつたしね」

「色魔みたいに言うなよ!」

君は言え、グリゼルダと知り合つたのは事実だ。

「だが、それだと夜々もいなくなるぜ。やうあだつて、あいつが」なかつたら……」

「くるわ。そして、きたろ?」

「……確信があつたのか?」

「彼女の」とは理解したつもりさ。少しはね。君に恋人がであつたしでも、誰かと結ばれ
たとしても、夜々は君を護ることをやめない」

「そう、夜々は言つた。どんなにわざも、命の続く限り雷真を護り続ける君。

そして今日も、その約束を護つた。

あと、何者かの気配を感じた。

緊張が走る。女子学生が一人、談笑しながら歩いてくる。

二人は、ちらにはまつたく気付かず、通り過ぎて行った。学院生は全員が優秀な魔術師だが、こんな至近距離で、違和感すら覚えていない様子だ。

アリスは微笑み、感心したように言った。

「見事なステルス性能だね。以前よりも、さらに向上している」

「今までには、俺が使いこなせてなかつただけさ。こいつは天下の花柳斎が組んだ魔術回路——魔王にさえ通用した」

「大したものだよ。僕の〈虚像〉よりも一段上かな」

ふつと笑つて、自分の手を見る。釣られて、雷真もアリスの左腕を見てしまう。すつと〈虚像〉で隠していたが——アリスの腕は、生身ではなかつた。

形こそ精巧に作られているが、表面は金属のまま。純い光沢を放つている。

「ああ……八重霞で〈虚像〉が効果を失つてるね。そう、これが僕の体だよ」見せびらかすようにスカートをたくし上げ、ふとももを見せる。

「見えている部分だけじゃないよ。イブの心臓ではないけれど、心臓機能の大半を機巧に頼つてゐる。人間とも人形ともつかない、おぞましい生物だよ、僕は」

「……違う。おまえは人間だ」

「口では何とでも言えるが。ゾッドで僕を抱けるかい？　暮えるだろう？」

「抱くさ。うつかり結婚しちまつた晩には、毎晩のように安眠妨害してやる」

その言葉は、アリスの胸にどう響いたのか。

アリスは顔を背け、しばらく、雷真の顔を見ようとしなかった。

「神性機巧は傷つかない」

出し抜けにそんなことを言う。困惑する雷真をよろやか振り向いて、

「教父はそう予見したんだ。『始祖たるべき神性機巧は完全なる玉のこと』とね。世界で最初に造られる神性機巧は、瑕ひとつない完璧な存在うことだよ。言葉通りにどちらも

るなら、絶対に傷つくことがない」

「そんな物質、この世にあるか？　そもそも、神性機巧ってのは人造人間なんだろ。人間なら、傷ついてし、死にもするぜ？」

「人間だけど、人形だよ。魔術回路を内蔵している」

「――」

「ドイツはその予見を圧倒的な防御力の比喩と考えた。そりや、予見に実際を近づけようと《完全統制振動》を開発したんだ——本末転倒だけどね。原子振動を完全に統制できるなら、一原子たりとも欠落しない——絶対に傷つかない人形ができる。シンにダメージを与えるのは大変だつただろう？」

確かに。一度や二度ならば、シンはケルビムの高熱溶断にすら耐えるのだ。

「でも、あのシンでさえ、雪月花や〈魔劍〉の前では傷つけられてしまう」

物質を消滅させるラスター・カノンは当然として。

圧倒的な火力で攻撃されれば、魔力が追いつかずダメージを受ける。

「月の自動人形、夜々はどうだい？」

「夜々だつて、魔力が尽きたらそれまでだ。ラスター・カノンを噴らえは致わりだし、それどころかケルビムの火炎刀でも——」

「でも、この先どうなるかはわからない。花柳斎の人形は成長するんだ」

……そうだ。夜々には秘められた力がある。何度も、夜々のひたに角——エネルギー集合体のようなものが現れた。

夜々はその身のうちで、雷真も知らない力を、日々育てている。

「それでも……夜々の心はどうなのかな？」

アリスは月を見上げて、独り言のように言った。

「どんなに強固な体を得ても、君に捨てられたら、彼女の心は傷つくだろう。神性機巧は

傷つかない——その予言に、心の傷は含まれるのかな？」

「何で急にそんなことを——つて、おい——どこへ行く？」

アリスはふりと立ち上がり、ベンチから離れようとしていた。

「もちろん、シンを取り戻しに行くよ。あれを失うのはもうたいない。こうなった今では……僕の唯一の財産だからさ」

そんな言い方しかできず、こんなやり方しかできなかつた彼女。

その不器用さにあきれ果て、雷真は盛大なため息をついた。

八重瀬の効果を解き、わざと声を張り上げて、聞こえるように言う。

「おまえ、シンを死なせたくないがつたんだろ？」

「――――――」

「俺を脅迫したのも、口キと対立させ、シャルを無力化し、口キとフレイを遠ざけたのも、シンの命を救うためなんだろう？」

「――――――」

「シンが裏切り者として処分されそうになつたから、おまえは学園長の意見に背ふけたのも、独りで独逸を攻撃しようとした――そうだよな？」

アリスはやはり、答えない。

その沈黙が、何より雄弁に、アリスの真意を物語つている。

雷真はアリスの肩を両手でつかみ、耳元で怒鳴つた。

「だったら何で、最初から『助けてくれ』って言わないと？」

アリスは皮肉げに唇をゆがめた。

「言つたら、どうだつていうんだる?」

「言つてくれれば——もうと早く、こいつらの力を借りただろ?」

くるりとアリスを振り向かせ、自分の背後をここで示す。

雷真の背後にいた者たちを見て、アリスの顔色が変わつたる

仔竜にまたがつた、小さなシャル。

機械人形ケルビムを引き連れたロキ。ラビを連れたフレイ。そして夜々。

言いつけ通り、夜々が「偵察」で引っ張つてきた面々だ。

アリスは睡然として、それから少し怯えたように、目をそらした。

シャルはアリスの鼻先までシグムントを飛ばし、帝ややかな調子で言つた。

「またしても、貴女の仕業だつたつてわけね」

腕組みをしながら、憤然として言い放つ。

「おかしいと思うたのよ。この下品なバカがオルガみたいなお姫さまの婚約なんて、天地
が引っくり返つてもあり得ないわー」

「自然の整理まで持ち出すなー 婚約者の一人や二人、いたつていいだろー」

「二人はおかしいわー 不実よー」

「そこに食いつくなー 言葉のあやだー」

「ほんつゞ、ルーラー」やうもないバカキングね。バカ時空の絶対的バカ神ね。せつかく夜会

が順調なのに、また危なういふに首を突っ込んだやー」

「巻き込まれたんだよ。……おまえ、事情を知り合ったのか?」

「キンバリー先——じゃない、風の噂で聞いたのよ」

「そうか。キンバリーが伝えてくれたのだ。」

直接の手助けはできなくても——噂話を広めるくらいはやめる。

「仕方ないから、優等生の私がサポーターしてあげるわ。ありがたがりなれー」

アリスは呆気に取られた様子で、思わずと書いたふうに口を挟んだ。

「僕が君にしたことを見たのかい? 君たち姉妹にしたことを見た?」

「覚えてるわ。本音を言えよ、今すぐラスター・カノンで報復したいからよ」

「なら……どうして、そうしないんだい?」

「貴女は、自分が殺されようとしているときに、人形を助けよやとしないわ」

アリスが言葉を失う。シャルは急に恥ずかしくなつたらしく

「……」こんなのただの気まぐれよー負け犬は大人しく助けられればいいわ。それに、貴女を助けないことには呪いも解けないわけだし? 貴女には、恥あたつことが山ほどあるしね? お母さまのこととか、お父さまのこととか?」

「シャルよ。いかにもひとりでつけたような口ぶりだな」

「ただ黙りなきシグムントー お母のチキンをホットミルクにするわよー」

「……（劍帝） くんは… ルーベンリリードなんだい？」

「今度はロキに問う。

ロキの紅い瞳が、殺氣すら漂わせて、アリスを睨す。

「あいつが——（敵らない薔薇） がきているところは本当か？」
敵らない薔薇。夜会における、ローゼンベルクの登録コードだ。
アリスに代わって、雷真がうなずいた。

「この目で見たぜ。連中の親玉はローゼンベルクだ」

「ならば、オレには戦う理由がある。アリスのことなど眼中にない」

「……ライシンに手を貸すと？ 君たちは対立しているんだらう？」
「ふん、あんないだらん挑発にオレが乗るか」

小馬鹿にしたように笑う。

「ほかん」とするアリスに、雷真が横から説明した。

「昨夜のことを言つてゐるなら、ロキには俺をつぶすつもりなんになかったせ」

その言葉には、アリスだけでなく、夜々とフレイも驚いたようだ。

一同の視線が集中し、ロキは健劫そうに説明した。

「学内に悪意ある何者が入り込んでいることは——」

フレイのとなり、オオカミ犬のラビを示す。

「カルムたちの嗅覚が嗅ぎ取らなかった。だが、ユウルのわけか、学院の警備は連中を見逃してゐる——やえに、オルガが接触して見たとき、連中の差し金だとわかった。オルガに動かされたフリをすれば、貴様たちの注目はオレから逸れる」

「彼らを油断させた仕事をそら」、事情を探つてみた……。

雷真は軽く笑うて、

「俺も」ふりやりアリストでね。楽にマグナスまで行けるなら、今うぶし合の理由なんかない。俺にはまだ利用価値がある。消す理由がなかった」

「……深い信頼で結ばれてるってわけだ。仲がいいんだね」

卷之三

「そしド、（御前） くんのお嬢ちやんわー」

「モード」（御帝）くんのお姉さんも…

「おいたく……バカな連中だね。敵だらだ奴」と、手を貸せばなんぞや。

軽口を叩きながら、アリスが目頭を押さえるのを、雷真は見逃さなかつた。

いずれ戦わなければならない仲間たちが——、心から頼もしいと思う。

「じゃあ、行くか——」

「だめよ」

冷ややかな声が割り込んで来て、雷真の熱気に水を差す。

クチナシの香りとともに、木立の奥から妖艶な女性が現れる。それは、いろいろと小紫をつき従えた——

「硝子さん……」

日本が誇る精代の人形師、花柳斎硝子。そのとなりで、小紫が気まぐれに苦笑いしている。小紫の（債務）はこちらを引き当ててしまつたようだ。

硝子は真冬の富士を思わせる、峻厳な瞳で雷真を見た。

「言わなかつたかしら、坊や。世界大戦の引き金を引くつもり?」

「……引いたくはない。だが、前のところとは状況が違うだろ。独逸と学院は手を組んでる。露西亚が独逸に無茶である状況じやない」

「ふう、学院はドイツに手している——この意味がわからなー?」

「……ふういう意味だ?」

「行けば（下から）一番目）が消される。生き残ったとこりで、学籍を失うのよ」

寸鉄の一撃にも似た言葉。

それは完全な不意打ちで、雷真の胸に突き刺さった。

居合わせた誰もが息をのむ。ロキやシャル、ムカデがいた。

「坊やは何のために、遠い異国の地を踏んだのかしら。その子を助けたるなら、亡命
させてあげましょ。自動人形の一体くらい、あらためる分別を持ちなさい。」

硝子は呟くように言った。

だが、その口調にはどことなく、あらためて交じつてくる。

予想通り、雷真は少しも怯んだといふを見せず。

「連中がシンを奪還するのは正当な権利で、俺がとやかく喧嘩にやない。だが、連中
はシンを奪い返すだけじゃなく、殺すつもりなんだ」

「それがどうしたって言うの？」

「なあ、アリス。シンは俺のことお嫌いなんだろ？」

突拍子もない質問。アリスは面食らったようだが、うなずいた。

「八つ裂めに」たって言つたね」

「そのシハタ、俺は【Please】 と叫んだんだ」

雷真は茫然と顔を上げ、硝子を真正面に見据える。

「ふーわか、お嬢さまを護つてやれと。てめえの命すらかえりみず、主を護り下へる——
やつらへんが、俺は好あだ」

視線がぶつかる。硝子の鋭い視線と、雷真のまろやかな視線が。

険しい張り詰めていた硝子の顔が、ぐりとゆるんだ。

「……ううの間にか、殺し文句まで覚えちゃう！」

聞き取れないくらいの小声。「えへ」と確める雷真を無視して、

「わからでいたことだけれど、このやかん坊には何を言ひても無駄ね」

「バカにつける薬はないじゃねーしな」

「自惚うきこれたものね、坊や。君きみがこじらなうたりもり、自分を望み、血を流しやえすれば、どんな困難も打ち破れると思ひ入るんやしじや？」

「そんなりもりはない。俺おのはただ……」

「思つてはいるのよ。でも——その自惚うきこれが変えた運命もある」

シャル、フレイ、ロキ、そして夜よ々よと、順に視線を巡らせる。

その言葉は、彼らにどう受け止められたのか。

皆が表情を引き締め、章志の宿しゆくった瞳で硝子を見返した。

硝子は再び雷真に視線を戻し、念を押すように言つた。

「学院がどう出るかわからないわ。せいぜい用心なめ」

「何とかなるわ。俺は——いや、俺たちはもう、簡単には殺されな」

「それが自惚うきこれと言つたの。でも、あながち慢心でもなら……か」

「くすり」と笑う。そんな硝子た、雷真はやなずかで見せる。

「大丈夫だ。それに、世界大戦のことも、学籍抹消のこと、心配はいらない。」さわには、他人を出し抜くのが三度の飯より好きっていう、やがんだ軍師がついている」

アリスを振り向き、その肩を叩く。

「おまえの頭ならひねり出せるだろ？ 学院長を出し抜き、連中をやり込め、シンを奪い返した上で、独逸を黙らせる——夢みたいな方法がさ」

アリスはたまらなくなりたとうにうつむき、唇を噛み、肩を震わせた。

そして、二つもの、皮肉っぽい微笑を見せた。

「愚問だね、ライシン。僕を誰だと思つてるんだい？」

「だが、どうやる？ 戦争を回避する方法なんであるか？」

「あるよ。（世界大戦の火種）を使わせてもらひうのさ」

アリスは学院の中央、中枢施設が立ち並ぶ区画を見やつた。

そこに、巨大な裏標のような、四角い建造物が建つてゐる。起死回生の鍵は、あの中にある——

Chapter 6 ！G海^{アシ}に魔魔^{マモ}。

1

それは、月が美しい夜だった。

二年前。本物のセドリックを撲滅して、アリスがすり替わった夏の夜。イングランド南部にあるグランビル別荘で、シンは夜警につけられた。執事の職務とは言えないが、念を入れての措置だ。何の数か月が作戦の成否を分ける。

そと、二階のバルコニーに主が現れた。

月影が照らし出した主は、金髪の美少年ではなく、銀髪の美少女だった。化けていない——〈虚像〉を解説していく——

誰かに見られたが最後、計画が台無しだ。シンはバルコニーに飛び上がり——そして、見たのだ。

あらわらと光りて散った、宝石のようなしきく。

自分の執事に気付き、アリスは一瞬、顔を背けた。



すじに振り向く。アリスの眼にはもう、涙など存在しない。

「バルコニーも寝室の一端だよ。主の寝室に許しもなく入り「いいよ」は無礼にもほどがあるね。ベルンシュタインの執事はそんな常識もないのかい？」

「今は……タランビルの執事でいきます」

「もうだらだらね」

アリスが虚ろに微笑く、小さな笑い声。……悲しくない。

「迷つてぶらりしゃるのですか？」

「迷う？ 僕が？ 何を？」

「本当はおーー他者を騙す」と、抱いてぶらりしゃるのでは？」

「馬鹿なことを」とでも言いたげに、アリスは一突に付した。

「僕は三度の食事より他人を欺く」とが好きなんだ。まんまと僕に騙されて、実働部隊の手に落ちたときの——あのセドリックの顔を見ただるや。他人を出し抜くたび、ああ僕は何て賢いんだろう、こりつは何て愚かなんだらう、そう思つてやうと/orする。僕が僕の価値を実感するのは、他人を騙したときだけなんだよ。僕は……」

淀みなく流れていた言葉が、不意に途切れる。

「ねえ、シン。君は、僕のために戦えるかい？」

「——無論です」

「なら、僕のために死ねるかい？」

「お嬢さまの仰せとあらば、たやすいことです」

「なら、死ぬより難しいことなら、立ただらか？」

「……と、おっしゃいますと……」

「死ぬな」

シンは言葉を失った。主は何を言っているのだらう？

「僕のためと言うなら、簡単に死ぬことは許さない。君ひとりを製造するのに、どれだけのコストがかかると思う？」

「ですが、死ななければ、お嬢さまを護れない——そのよへなうめには？」

「あきれるほど愚かだね、シン。僕には知恵がある。知恵ある者は、知恵なき者には教えられないのさ。ただし——完全無欠の下僕がいれば、だけとね」

「……ペルンシュタインの執事は有能ですが、完全無欠というわけには参りません。ただひとり難を擧げるとすれば、主の命に背いてでも主のために命を捨てる——そんな不患者だという」とです」

その返答は、アリスを失望させたようだ。アリスは冷淡な口調になつて、

「グランビルの執事だら、シン」

「申し訳ありません、坊ちゃん」

すれ違う主従を、透え透えとした月が照らしていた。

甘く、そして苦い回想は、意識の覚醒とともに蘇散した。

おはろけに見えるのは、宮殿のむらな（愚者の聖堂）。シンはそのバルコリード、騎士團の連中に囲まれ、縛にされていた。

魔封じの鎖で柱にくくりつけられている。魔術は封じられ、身動きが取れない。胸から滴る自分の血を眺めながら、魔羅とした頭で考える。

（あのとき、私は忠誠を誓った……）

家でも、祖国でもなく、の方のために生き、死ぬ（リュルネ）。だからこそ、今——決断しなければならない。

2

「……や作戦会議……」

地下の広間に到着する。アリスは一回を振り返った。

地下水道の一角、かつてアリスが根城にしていたホールだ。シャルは露骨に嫌そうな顔

をした。」「アリスになぶられたことを思い出したのだろう。

ホールにはシャル、雷真、ロキ、フレイと、それぞれの自動人形がいる。いろいろと硝子は既に立ち去り、小紫はアリスの指示で、単身、大空洞を偵察中だ。

「連中の精確な位置はつかめているのか。配置は?」

開口一番、ロキが鋭い質問を飛ばしてくる。

「くる途中に確認したよ。これでね」

水晶玉を出して見せる。雷真が興味深そうに首を突き出してみた。

「またそれが。便利だな、水晶玉」

「君が思っているほど便利じゃないさ。」や、うのは仕込みが肝要なんだ。映したい場所に、あらかじめ（目玉）を設置しておかないとな」

場面を切り替えつつ、皆に見せる。シャルと雷真は食い入るように、フレイは背伸びをして、ロキもわざかに身を乗り出し、水晶玉の奥をのぞき込んだ。

「シンは空洞中心部（黙者の聖堂）に拘束されている。あそこは断崖の底で、かなりの広さだ。見晴らしがいいぶん、こちらの接近はすぐ察知される。とりあえず、シンの警護はカツツバルゲルが二個小隊。騎士団は地上の哨戒に出払っている」

「騎士団を遠くにやったの? 遠にすぐきにいやない?」

シャルが首をひねる。アリスはかぶりを振つて、

「学院はドイツと仲直りしたいけど、聖堂の秘密までくれてやる気はないんだ。騎士団を中枢には置きたがらないだろう。あるいは、僕の捜索を警備に丸投げできるほど、騎士団が学院を信用していないとも考えられる」

だとすると、警備の中に単身で残つたローゼンベルクは、相当な自信を持つて居ることになる。あれはやはり、伝説級の自動人形——

「説明に入ろう。作戦の目的は——」シンの奪還と、世界大戦の回遊だ」

「三つ田が抜けてるぜ。ここにいる全員が、放校されずに済むよ、工作だ」

「うん。そこで、僕らがこれからやる」とは、〈学院の方針〉と云う——と云ふ——「はあ、——」よ、——と云ふ——

「そう、いかに僕らが『学院長の命令でした』と主張したといふや、学院長がそれを認めなければ、何の意味もない。でも、道に言えはさ——」

「そうか……学院長が認めたくなるような（利益）を……」

「そう! 僕らの言い分を通した方がいい、という状況を作ればいい。パパは私情なんかこれっぽっちも挟まないからね。利があると踏めば、乗つてくる」

「だが、どうする? シンを手に入れるつてだけに足りねえんだろ?」

「利益つてのは何も、プラスばかりじゃないんだよ。僕らの言い分を認めなければすべてを失う——そんな状況に追い込んでやるのさ」

「待て。それは矛盾だ」

ロキが鋭く口を挟む。

「オレたちの行動が（学院の意志）になつたとし——（学院の意志）でシソを奪えば、学院とのドイツの融和は）破算になる。英独の関係には確実にヒビが入り、世界大戦が勃発する。そりゃあふうする。」

「今もうとも注視すべきはバルカン情勢、ロシア側が強攻していふことだ。ロシアの謀略を引き出すためには、ドイツの態勢が磐石であればいい。つまり——」

「……学院と英國を切り離すのか？」

「あ、ちょっと待ちなさいよ。どういう意味？」

シャルが待つたをかける。根が眞面目なシャルに、謀略は向かないようだ。

アリス、ロキに代わって、露真が説明する。

「以前、硝子さんが言つてたんだ。英独が表立つて争えば、露西亞は独逸を怖れな——逆に言えは、英独が仲良くしてりや、露西亞は無茶がでぬない。だから……」

「敵の敵は味方——学院と英國を仲遠いさせ、英独を間接的に結びつけん……。」

ロキはうるせん臭そうな顔をした。

「もう上手くいくか。グランビルの一件で、英独間は険悪だ」

「やべ、そこのそれが、僕のことって極めて有利な要素なんだ」

アリスを除く全員が、呆気に取られたような顔をした。意味がわからない。

「まさに天の配剤だね。英独を結びつけ、学院を孤立させる、素敵な秘密がこの学院には隠されている——まあ、半分以上、僕の責任だけどね」

「自嘲しきり、アリスは水晶玉をかざし」とある建物を映し出した。

「秘密が隠されているのはここ、重要機巧保管施設——通称（ロフカー）だ」

一同が息をのむ。眞面目にとっては思い出深い場所だ。

「（い）に眠る（秘密）を暴露すれば、英独の『誤解』は水解し、仲直りもできるだろう。そして、学院は僕の思い通りに動かさるを得なくなる。——（い）のところは後で説明するとして、作戦の詳細を説明するよ。主要な役割は三つある。ロッカーに潜入り（秘密）を奪う役、敵を惹きつける陽動・シンを救出する主力だ」

「陽動役が連中をおひき寄せて、その間に主力がシンを救出するのね？」

「シャルロット……君は成績優秀なわりに、発想が凡庸だね」

「なつ——何よつ——妥当な考え方でしよう!」

「妥当に考えたら、シンを『生きたまま』救出するなんて不可能だ」

「陽動を仕掛けても、連中はシンから目を離さないだろう。異変を感じれば、即座にシンを殺すはず。アリスを誘い出した時点で、シンは利用価値を失っているのだ。

「なら、八重音で幻惑するか？ 完全幻覚であと」ろに潜り込めば——」

雷真の提案にも、アリスは首を横に振らない。

「八重禮は必要だ。でも、（聖堂）周辺で魔術を使えば、即座に感づかれるよ。幻覚だとバレていては効果が半減する」

「じゃあ、どうする？」

「気付かれても問題ないような魔術を使う。そして、シンは教出しない」

一同が無数の要問符を浮かべる。アリスはその反応に満足しつつ、

「それも後で説明しよう。次に、敵戦力だけ」——さう見えたように、カツツバルゲルが二個小隊、（十字架の騎士団）が一〇人程度

「カツツバルゲルって警備の特殊部隊よね？ 一般の警備は参加してないの？」

「僕らがどんな騒ぎを起こすかわからないし、学内を騒がせるわけにもいかない。一般の警備は一般の仕事をしているよ。そのぶん——僕らの迎撃には、警備ではなく（教授）が配置されるかも知れない」

重苦しい空気が立ち込める。やがて、いやがはもう学院の敵なのだ。

「……誰か（誰か）もうが、關係がない」

真っ先に沈黙を破ったのは、ロキだった。

「オレがぶちのめしたいのはローゼンベルクだ。貴様の作戦にケチをつけりよりはないが、オレとあいつが当たるようになら」

「言わなくても、それがベストの構成だらうさ。でも、ローゼンベルクが連れているのは彼の自動人形じゃなうよ。伝説級と見て間違いない」

ロキは動じない。だが、フレイの方は心配そうに弟の横顔を見つめていた。

「そもそも、シャルロットの呪いだけと——今すぐ解くかい?」

「もちろんだ!」「頼たの前よ!」

雷真とシャルが同時に叫んだ。アリスは一人を手で制して、

「わかったわかった。それじゃ、すぐに準備しよう。万全を期して、リリに祝福の魔法田を描くから!」一〇分ほど待つべく

「ふん……悠長な」とだ

ロキが吐き捨てる。フレイはあきと弟にしがみついて、

「ロキ、そんな」と泣きあや、めー

「わ、わかった。だから離せー

珍しく狼狽するロキを見て、誰からともなく笑いがこぼれた。

奥の間に田を棲らす。この間の向こうに、例の大空洞がある。

(早また真似はするなよ、ふへ……)

「雷真」

遠慮がちの声がかかる。ホールの方から、夜々がと、近付いてきた。

「悪いな、夜々。夜会とは關係のないこと」、またおまえを使おう。

「雷真も大概お人好しだすね。何度も殺されかけた相手を助けようなど」

「仕方ない。なりゆきだ」

「行きすりの女と關係を持つても「仕方ない」で済ます（もん）……?」

「そんな（もん）とは言ひてない。そりちに飛躍するなー」

だが、そう言えは、今回のこととはまたたく詰せていなかりた。

「その……想がつたな、何の説明もしなひ。婚約がつむりはつだり（もん）、おまえには伝えてねあたかうたんだが」

「……本当にひどいです雷真。婚約なんて、専に言ふ出しひ……。でも、何か事情があるんだから、やるにわがりましたから」

ふわりと微笑む。一方、雷真は半眼になつた。

「いい雰囲気をアチ遠して悪いんだが、だつたら何で首を絞めようとしたか。」

「ふ……実際には」ませんでしたしゃ。」

「日をそらすな。でも……ありがとよ。」

「ほん」と夜々の頭に手をのせて、優しく撫でる。

夜々は猫のように日を細め、されるがままになつた。

「……こゝの雰囲気をアチ據して悪いんだけど」

（あぐりと）振り向く一人。背後に、極めて不機嫌なシャルがいた。

「解説の用意ができたわよ。わざわざなさいよ愚団一のろまー」

「罵倒するなー何でキレてんだー」

さやあさやあ言い合いながら、ホールに戻る。その後を、ルームメートす黒いオーラを

まき散らしつつ、夜々が続いた。

そうして、シャルの解説は無事に終わった。

（いや、とても無事なんでものじやなかつたが……）

地下通路を歩きながら、雷真は燃けた顔を袖でぬぐつ。

作戦は既に開始されている。雷真は夜々、アリスとともに行動中だ。
夜々が不機嫌そうにそのままを向いて、

「自業自得です」つん。

「何で俺の業みたいになつてる？ 俺のせいじゃないだろー」

「静かになよ。こんなとおまで騒がしいね、君たちは」



前を行くアリスが声を低くして注意する。八重霞が効いているものの、何かのセンサーに引っかかるらしいとも限らない。雷真と夜々はあわてて口をつぐんだ。

地下道はまだまだ続いている。大空洞に通じるのとは別の道で、学院の中枢部に向かうルートだ。さらに五分ほども歩き、そこまで続くのが不安になる頃――

突然、道路が開けた。

大空洞に出たのかと思ったが、違う。石造りのホールだ。

広れどいい、高さといい、学院の体育馆ほどもある。天井は分厚いガラス張りで、月光が内部を照らしていた。何かの倉庫……格納庫か？

「……予想通り、番人が待ち受けていたようだよ」

緊張をほらんだ声で、アリスが前方を示す。

月光に浮かび上がるシルエット。堂々たる体躯に、カツチリとしたスープ姿。豊かな口ひげと、常に細められているような、優しげな目が特徴的だ。

夜々が身構える。雷真は冷や汗を垂らしながら、アリスにたずねた。

「……」の人選も、おまえの読み通りか？

「まさか。誰に予想できるんだい。こんな化け物が自ら出張りしるなんぞ？」

アリスの声は硬い。それもそのはず、そこにいたのは――

「えりく行こうと言うのかね？」

一九世紀最強の魔術師にして、王立機巧学院の最高権力者。

学院長エドワード・ラザフォードだった。

八重霞の効果はまだ残っている。魔王ライコネンにすら通用した《完全幻覚》が。

しかし、学院長の双眸は、完全に雷真をとらえていた。

「どうした、ライシンくん。今宵の夜会はとうくに始まっているぞ…」

「……ああ、もちろん出席するさ。野暮用を片付けてからな」

「野暮用とは何だね？ よもや、《ロッカー》に侵入することではあるまい？」

「そうだと言つたら、通してくれるのか？」

「そうだと言うなら——これ以上、やんちゃを許すわけにはいかん」

双眸がカッと見開かれた瞬間、即きつけるような魔力を感じた。身がすくむほどの威圧感。太古の肉食恐竜と対峙しても、これほどの戦慄は覚えないだろう。

「……是非もねえな。突破するぞ、夜々ー」

「はいー」

「いいのかね？ 私に自動人形を差し向ければ、学院の権威に反逆したと見なす。それがわかつた上での行動だろうな？」

雷真を見据え、厳しい声音で覚悟を問う。

「君には目的があつたのではないかね？ マグナスくんとの戦いをあらがひめると…」

「……あれからもういのちはない」

「ならば、過あたまえ」

「それではできない」

「学院を退散されても、マグナスくんはどこへ来る？　確認してみるかね？　だが、彼は学院の生ける至宝だ。学院は全力で彼を護るだろうな」

「――」

「警備隊ばかりではない。私を含め、教授、学生――学院の全戦力が彼を護る。その守護を突破でわかるかね？」

――不可能だ。一撃でマグナスを倒せるからまだしも、戦いが少しでも長引けば、誰かしらが駆けつけ、マグナスに加勢する。

「そりと、雷真はアリスを盗み見た。

アリスは何かに耐えるように、唇を引き結び、視線を落とす。

先ほどからただの一度も、学院長はアリスを見ていない。

それで、覚悟が決まった。

「……買いかぶりだぞ、学院長」

「マグナスくんを… それとも、我々自身を？」

「いいや、俺をさ。俺は説得が利くほどの口じゃな」。根得根足なんぞ――坊やくらの腹

に置いてきたー」

刹那、夜々が床を蹴った。疾風のように、一直線に駆ける。

ただの五十男であれば、恐怖を感じる間もなく首を折られたはず。

それほどの蹴りを、学院長はわずかに身をそらしただけでかわした。

「——!?」

夜々が驚く。次の瞬間、夜々は弾き飛ばされて、こちらに戻ってきた。腿の斥力。打ち返されたような吹き飛び方だ。

学院長は平然と立っている。その前に、光の魔法陣が浮かび上がっていた。

即席の防衛結界。決して珍しい魔術ではないが、出力のケタが違う。いっぽしの魔術師がベニヤ板一枚程度とするなら、学院長のこれは三百ミリの鉄鋼みたいなものだ。

「なぜ私が一九世紀最強などと言われたか、わかるかね？」

「……さあな。すげえ強えーからだろ」

「では、何をもつて強者とするのかね？」

眉をひそめる雷真。学院長は淡々と、講義のような調子で続ける。

「魔力の総量？ 制御の技術？ 魔活性に対する親和性？ あるいは運用理論？ 戦術や

戦略の知識？ それとも、自動人形の性能かな？」

「……全部、じゃねえのか？」

「なるほど、私は確かにやる方の魔術師だ。だが、真に私を強者たらしめたのは、『これを手に入れ、行使し、かつ秘匿し続けた——政治力だよ』

すうっと虚空を指が走る。指の軌跡が光の帯となつて空中に残り、魔法陣が描き出された。装飾の多い特殊な六芒星——不勉強な雷真は初めて見る形だ。

その魔法陣の中心から、分厚い本がせり出してくる。

「氣をつけて、ライシン。あれは魔導書——『レメゲトン』だ！」

アリスが切迫した声で叫ぶ。雷真は学院長の魔力に圧倒されながら、

「レメ……う、何だ？」

「……あされるね。学院に籍を置く者が、あれを知らないのか？」

やりとりが聞こえていたのか、学院長が苦笑混じりに口を開く。

「偉大なる同胞が数十年後に遺した魔術書だよ。彼がこれから得る膨大なコレクションを封じ込めたものだ。終末の書。百科全書。遺産大全。禁忌の集大成——さもざまに言われてはいるが、これは自動人形の召喚目録なのだ」

「カタログ……？」

「残念ながら、遺産のいくつかは失われているがね。奪われたものも多い。それでも私は五十を超える『神話の悪魔』を操り、君に差し向けることができる」

本は空中に浮いたまま、ひとりでに開いた。ページから淡い燐光が飛び散り、学院長の

顔を下から照らし出す。

「君には敬意を表し、とつておきを披露しよう」

刹那、強烈な魔力がホールを埋め尽くした。

夢か、現か。学院長の背後に優美な階段が出現する。まるで、ここだけ異世界に生まれ込んだようだ。白亜の壁がどこまでも続き、赤じゅうたんの階段が天井よりも高く伸びる。その最上段には金銀財宝で飾られた玉座が出現し——

(女神……?)

そこに、麗しい女王が座していた。

豊かな乳房、白い肌。腰は驚くほどくびれ、絶対的に整った顔には、万物を見下す瞳が輝いている。白い薄綿一枚をまとふ、いくつもの金の環が手足を飾る。

自動人形と言うより、これはもう〈神像〉だ。

「初めて……見た……」九番日の大公爵……アスター

绝望したような、一方で陶然としているような、アリスのつぶやき。

女王はゆうたりと立ち上がり、悠然と階段を降りてきた。一段ごとに階段が消え、金色の粒子となつて飛び散つていく。

学院長はうやうやしく一礼し、女王を迎えた。

「ご来園、いたみります。女王イシュタル」

「久しいな、エド。わらわを呼びつけんとは、よほどの相手か？」

女王がこちらに流し目をくれる。刹那、ゆっくりと死の予感が雷真を襲つた。

「まだ小僧ではないか。老いたな、エド」

「確かに彼は若い——ですが、いずれ最大の脅威となる者です」

「よからう。魔力をもて。我が軍勢をここく」

すうと右手を差し出す。その手を左手でいたたき、学院長は魔力を發した。

あくまでも優雅に、女王が左手を雷真に向ける。

その手のひらから、どうり、と何かがあふれ出した。

黒い影。褐色^{カーキ}しい、もやのようなもの。先端には苦悶^{カクモン}する人間の顔が浮き出している。

正体不明だが、敢えて形容するなら、【怨靈】のイメージに近い。

それが同時に何体も、轟^{トントン}まじい速度で殺到してきた。

夜々を反対側に隠避させ、自分はアリスを抱えて隠ぶ。怨靈の群れがホールの壁に激突した途端、とおり、と石が崩れ落ちた。

石が崩るはずもないが、痴食としか言いようがない。壁は熱れたトマトのようにつぶれ、腐つたタマネギのように溶け出していく。

その威力を目の当たりにして、雷真も、夜々も、そしてアリスも震え上がった。

「（ローラン・ブルス）——あれを喰らつたら、一瞬で腐肉だよ——」

「——だとよ—— 絶対に当たるな、夜々！」

我ながら無茶な命令だと思いつつ、夜々に命じて魔力を送る。

自身はアリスを抱き上げ、魔力を練って駆けた。金剛力ではなく、自分の魔力循環系に干渉して、魔力で身体能力を強化するテクニックだ。グリセルダの指導は決して無駄ではなかつた。こんな局面でも、まだまだやれることがある。

人形の女王は腕を振り、さらに怨靈を呼び出して、夜々を狙う。

「——くっ！」

怨靈の一体が夜々の頬にかすつた。肌が一瞬でただれ、腐り落ちる。

だが、かすり傷だ。夜々は回り込んで女王に迫り、蹴り飛ばそうとした。

その前にすつと、学院長が割り込んでくる。

防護結界が作動。夜々は弾かれ、真後ろに吹っ飛ばされた。

空中では身動きが取れない。あの態勢では——怨靈がかわせない！

雷真は右腕の布に手をかけ、引き裂こうとした。その瞬間——

雷真の第六感が、自分の死を予感した。

背後に脅威を感じる。廻越しに振り向くと、壁に衝突して消えたはずの怨靈が、こわい

に醜悪な顔を向けていた。

消えたわけではなかつたのだ—— 回避……は、間に合わない——

時間の流れがひんへきりになり、怨靈がもどかしげに迫りてくる。雷真はいざる」ともです、アリスを抱く腕に力を込めた。

怨靈にのみ込まれる寸前、何かが雷真の視界をさえぎった。

あらあらとまはゆい、白い輝き。障壁のような光沢がある。これは……盾？複雑な分割線が走った、機械的な構成。だが、麗しい。輝く盾が出現し、空中にひたりと静止して、雷真を護っていた。

激突した怨靈は次々と消滅していく。盾は腐らず、なお輝きを保つていた。

「学生相手に〈淫魔の姫〉を持ち出すなど、大人げないぞ学院長」

雷真の背後から、誰かがホールに入りてくる。

肩に担ぐのは、白く輝く優美な剣。暴力的な魔力、そして殺氣。そのくせ、着ているのは可愛らしさミニのドレスで、アンバランスこの上ない。

グリゼルダ・ウェ斯顿——〈迷宮の〉魔王——

すう、と学院長の眼が鋭くなつた。

「何のつもりだね？ せつかく得た学院の庇護を、早々に失くしたくなが？」

「買いかぶりだな。私はウェ斯顿家のグリゼルダ——」

ふふんと笑つて、剣の切つ先を突きつける。

「損得勘定など、母上の胎内に置いてあた——」

4

同じ頃、ロキはケルビムとともに、地下空洞を移動していく。
かたわらをちよこちよこ走るのは小素だ。左右で結った髪がふわふわ揺れて、何となく仔猫の尻尾を思わせる。

「ん? どうしたの、お兄さん?」

「……いや。おまえの魔術は本当に効果を發揮しているんだろうな?」

小素は心外そうに唇をとがらせた。

「發揮してるよー。雷真がかけたんだからねー」

「ふん、だからこそ信用できる——」ともないが……」

「魔術を使つたら解けちゃうから注意してね。特に、そつちの人形さんは」

逆に言えば、魔活性不協和の原理に抵触しない限り、簡単には解けないと云うんだ。
恐るべき魔術と言つていい。対象を隠すだけでなく、立てる物音や、気配まで隠昧にする。
使用時に効果が及ぶ範囲を指定できるのも強力だ。

これはどの魔術、人形だけでは制御しきれまい。魔術師にも繊細なコントロールが要求
されるはず。つまり、雷真はかなり腕を上げたのだ。

(……面白ふ)

そんなふうに思つてしまつて、ロキは自分で驚いた。少し前まで、雷真の成長ぶりには焦燥さえ覚えていたのに。すいぶん余裕が生まれたものだ。

「人と一体は断^{カット}り、中心部^ハと近付いていく。

ほどなく、前方に宮殿のような建造物が見えてきた。

距離にして四百メートル弱。敵の様子が肉眼で確認できる。ペイムガーダーが一〇体、人形使い^{ヒューマン}に待機中だ。ローゼンベルクの姿は……見えない。

「止まつて。」の先に探知境界を感じる。これ以上の接近は危険だよ

「ならば、ソリから仕掛ける。」

ロキは右手を相棒にかか^ル、「ケルビムに魔力を送り込んだ。

「見えたら、一〇体全部を機能停止に追い込む。撃ち抜くや、ケルビム」

【I'm ready】

主の意図を正確に理解して、ケルビムが翼を広げる。翼上にアカハラれた短剣が一斉にせり出し、射撃^{アサルト}体勢を整えた。

小素の人重^{ヒヂガ}が効果を失うと同時に、短剣が射出される。

一二本の短剣が切り離され、そのうちの一〇本が流星のように乗んだ。剣^{ヒサギ}、何者かの影がケルビムにかかった。

頭上、背後から攻撃がくる。ケルビムには防衛できない状況だった……が、二本の短剣が背後にすばり込み、敵の攻撃をブロックした。

攻撃してきたのは、金属製の自動人形だった。

大きな腕の先端に、こぶしとは別に鉤爪が突き出している。その威力はなかなかのもので、ケルビムの短剣はあつけなく折れてしまった。

その自動人形の向こう、闇の中から、金髪の美青年が歩み出していく。

「俺に気付いていたか、〈剣帝〉」

「……こっちの台詞だ。ローゼンベルク」

ロキは油断なく、敵の自動人形を観察した。一見すると、凡てにでもありそうな人形だ。

腕力は今見た通り、侮れない。ほかに目立つた特徴と言えば——ファントのようにボディを覆う〈魚鱗鎧〉くらいか。

人形は言葉を発することができないのか、「ああふー」という感じで鳴いた。

「……古めかしい自動人形だな。骨董品か？」

ローゼンベルクは余裕ありげに笑っている。

ロキはちらりと小紫に視線をやつた。意図を察し、小紫はあわてて距離を取る。彼女にはまだ八重霞の効果が残っているが、場合によらずは邪魔になる。

「どうした。骨董品に驚いたか？」

ローゼンベルクが挑発する。たまる怒りをおし殺し、ロキは攻撃を命じた。ケルビムが突進する。左右のブレードで抜み込むように攻撃。巨腕の自動人形は一瞬で消え——ケルビムの頭上を取った。

速い——そして、飛んだー

翼を大きく広げている。装甲のように見えたのは、翼だったのか——

「翼人——ハルビュニア？」

「そんなありきたりのモチーフではないぞ」

ローゼンベルクが腕を振る。その動きに合わせ、巨腕の自動人形が降下してきた。猛禽の襲撃に似ている。鉤爪がうなりをあげ、ケルビムを襲った。ケルビムはかわしたが、敵はかなりの機動力で追いすがり、ついにはケルビムをとらえた。

鉤爪がケルビムの装甲板に食い込む。

ケルビムのボディに、溶断されたような、ただれた傷が走った。

「炎の爪——」

ロキは一瞬で看破する。超高熱に高めた爪で、物質を焼き切る仕組みか。ケルビムに似ている——が、この程度の温度なら、ケルビムの方が上だ。追撃をもはねながら、ケルビムは空中で一回転、大剣の姿に変形した。

刀身から高圧の気流が噴き出し、一撃にケルビムを加速させる。

大剣が翼人にぶち当たる。命中の瞬間、刃からも超高熱が噴き出した。それは敵の表面に集中し、瞬間的には数千度にも達する。この仕組みで、いかなる金属をも焼き切ることが可能だ。ケルビムは翼人を真っ二つに——

……は、しなかつた。

さしものロキも目をむいた。受け止められた

押し切れない。ロキは即座にケルビムを反転させ、下がらせた。

再び魔族天使の姿に戻る。心なしか、ケルビムも不思議そうにしていた。

くくくと楽しげに、ローゼンベルクが笑い出した。

「……何がおかしい」

「貴公にそんな顔をさせたのだ。これが愉快でなくて何だと言うのだ？」

ロキは改めて、敵の自動人形を観察した。

熱による攻撃と、完全な耐熱能力。伝説級の自動人形で、熱に強い自動人形と言えば、

思い浮かぶのはフリスヴェルグか、そもそもなくば——

「炎を浴びて甦る、魔神……」

「ご名答。貴公の近闇な炎熱が、フェニックスを呼び覚ます……」

次の瞬間、翼人から炎が噴き上がった。

膨大な魔力の胎動を感じる。到底、ローゼンベルクが一度に送り込める量ではない。廢

するに、ロキが与えた數千度の高温が、そのまま敵の魔力となつたようだ。

翼人が姿を変える。ケルビムと同じ、機械的な変形だ。

両肩が左右に外れ、腰より下へと移動する。腹から大きな〈くわばし〉が飛び出して頭部と一体化、あいたスペースにはたたんだ足が入る。

一連の変形シークエンスが終わって見れば、翼人は巨大な鳥に変化していた。翼人の腕だった部分は、鉤爪つきの鳥脚に役割を変えていた。強力な武器——鉤爪を両形態で最大限活用しようという、設計の妙だろう。

ロキの背筋を冷たい汗が伝つた。今回ばかりは敵が悪い。フェニックスは自ら炎を生み出すだけでなく、受けた炎を魔力に変換することができる。不死と言われる所以だ。

「行け、フェニックス」

きゅいー、と高く鳴いて、フェニックスが飛翔した。

恐ろしく速い。まるで流星のようだ。

ケルビムと同じ原理か。熱の噴射を利用して、反作用で推力を得ている。

長くひいた炎が、まるで尾のように見える。まさに伝説の〈火の鳥〉だ。

ケルビムに突つ込んでくる。ロキはただちに魔力を送り、ケルビムを飛ばした。

高速の鬼ごっこが始まる。島田士の格闘に近い。位置を入れ替え、翼をひるがえしながら、ブレードと鉤爪、そしてくちばしが火花を散らす。

だが、分があるのはあちらだ。フェニックスは高圧の気流を吐き出すことで、こちらの攻撃をそらし、減衰させてくる。こちらも同じように熱風を吹つけてやればいいのだが、そうすると、それはそつくり相手の魔力に変換されてしまう。

時間が経過するほどに、あちらのリードが増えていく。

ついに鉤爪がケルビムのボディをえぐり、くちばしが穴をうがつた。しかも——

「お見さん！ 危ない！」

小素の警告を受け、ロキは反射的に跳躍した。

直前まで立っていた場所に、ヘイムガーダーの（電撃指）が突き立つ。

四体ものヘイムガーダーが合流していた。半数近くを撃ち漏らした計算だ。

警備に気を取られた瞬間、ハンマーのような蹴りがロキの頭を直撃した。ぐらぐらと視界が揺れる。魔術合金の地面に転がりながら、ロキは信じられない思いで頭上を見上げた。

フェニックスはケルビムと格闘していたはず。オレは一体、何に蹴られた……？

そして、理解する。

「貴様……まさか……！」

「そう——俺は機巧兵士となつたのだ！」

空中に静止したまま、ローゼンベルクは高らかに笑つた。

「お師匠さま……何でいりた……？」

雷真は呆然とつぶやいた。ダリセルダはふうと表情をゆるめ——

「この……う、バカ弟子が——」

雷真のわき腹に、劍の一撃を叩きこんだ。

とかん、と吹き飛ばされる雷真。天井近くまで打ち上げられてしまへ。とりおにアリスを放していなかつたら、彼女は大怪我をしていただらう。

雷真はぐしゃりと落ちてきて、

「いきなり何しやがる—— 金剛力が間に合つてなけりや、死ぬといふだつたやー」

「貴様、こんなところで命を捨てるつもりか?」

「今までに、あんたに殺されかけたんだよー」

「黙れー 貴様には倒すべき敵がいるだろうー」

言葉に詰まる。そう、雷真が倒したい相手は、学園長ではない。

「……あいつは倒す。だが、アリスも助ける」

「たわけ。そんなことはわからん。貴様が岡果だんじゅういふまな」

「じゃあ何でぶつ飛ばした!?」
「なぜ私を頼らんのだー」
俺の何が不満なんだ!?」

卷之三

びぐり」と学院長の眉が動いた。魔本（レムケトン）を指で撫でり、「聞か捨てならんな。本気で私に——学院に面向かうつもりかね？」「そんなりもりは毛頭ない。だが、教え子が殺されようとしているのを、れるほど、寛容な人間でもない」

「聞か捨てならんな。本気で私に——学院に専向かうつもりかね？」

「そんなつもりは毛頭ない。だが、教え子が殺されようとしているのを、黙つて見ていら
れるほど、寛容な人間でもない」

二人の魔術師がにらみ合う。怯えたように空気が震え、どこからか地鳴りが響いてくる。圧倒的な力と力、最强と最强の対峙に、夜々が奥歯を食いしばつた。気を抜けば、気力を根こそぎ奪われそうだ。

「行け、バカ弟子。私が時間を稼ぐ!」

「時間を稼ぐ——うー、勝てないつもりが？　あんたは魔王ワタツヤンだろ？」

「……貴様は思い違いをしているな。魔王とは同時代で最も優れた才能に与えられるべき称号。私はただ夜会を制しただけ——あの男が制したのは一九世紀だ」

学院長をにらみ、皮肉つけ白嘲する。

「私が隙をうへや。貴様たちは隙を見て走れ」

「だが……」

「案するな。今の私には、これがある」

ひょいと剣を手放す。剣は空中でバラバラと崩れ、機械人形に姿を変えた。夜々が驚いて「」を押さええる。

「雷真一……小さうけど、ケルビムです！」

確かに似ている。ケルビムの背丈は大人の男ほんもあるが、こちらは少女ほどの大きさで、ウェストのくびれが強調された、女性的なフォルムだ。装甲には繊細な彫刻が施され、美術品としても十分鑑賞に堪える。ケルビムが無機質な工業製品なら、こちらは工芸品といったところか。

ケルビムの翼が（ハンドガード）の部分なのに似し、こちらは（アレード）を翼の上へ背負っている。手足のバランスが人体に近く、ケルビムより洗練されていた。

同時に盾も変形する。剣とよく似た意匠だが、こちらはさらに優美なシルエット。盾を形成する装甲板が六枚、スカート状に腰を覆っている。

二体の自動人形は驚くほど似通っていたが、同時に、驚くほど対照的だった。

「こいつら、一体……？」

「サーバント・レプリカ。（ミカエル）型と（ラファエル）型だそうだ」

「その名前、やっぱケルビムの兄弟機——つか、といや間違したんだ？」

「知り合いの教授が試運転したい」というのでな。間に合わせの借り物だが、時間稼ぎの役には立つだろ？」

「間に合わせとは心外ですわ」

劍の人物がなめらかな合成音声を発する。雷真はぎょっとして、

「しゃべった！」

人物二体はそれぞの顔に手を当て、笑うような仕草をした。

「何を驚いているのかしら、」のマスケな坊やは、

「言葉が過ぎましてよ、お姉さま。事実はより深く馬鹿馬鹿を傷つけるやうですわ」

「しかも『悪いなー』ケルビムと全然違うじゃねーかー」

「なるほど、見事な自動人形だな、ミス・ウェ斯顿」

学院長が感嘆の息を漏らし——そして、ふつと笑った。

「だが、その人物で、私の女神に敵うかね？」

「試してみるさ！」

グリゼルダから魔力がほとばしる。二体は機敏に反応した。

左右に散開。両側から挟み込むように、学院長と女王に迫る。

アリスが目を見張る。雷真もまた、同じ気持ちで絶句した。

二体の移動はスムーズだった。ケルビムのように、熱風の騒音をまき散らすのでもない。

自分自身のベクトルを自在に操作するよう、この動きは——

「フ ラ ガ ラ ッ ハ —— そ ん な バ カ な 一 人 间 の 大 脑 モ ジ ュ ル を 使 わ ず に、 あ れ を 制 御 す る 思 考 プ ロ グ ラ ム な ん て …… 」

驚くアリスの眼前で、一匹がハムスターから逃げ出していく。アリスは

女王が撃ち出す怨靈を、慣性ゼロのジグザグな動きでかわし、ほほ一瞬で間合を詰めた。剣の人形が背中のブレードを抜き、女王に振り下ろす。

114

学院長がすぐり込み、光の魔法陣を展開する。

あいんわ、と甲高い音がして、魔法陣とブレードが競り合つた。

五五

一言妙语

学院長は女王の手を取り、魔力を渡す。

女王は剣の人形ではなく、グリゼルダに向かつて怨霊の辭れを放つた。だが、これが正是の人物が反応している。瞬時に射線をふさぎ、文字通り盾となって主を護る。
どんとんとんとん、と鋭い衝撃。怨霊の直撃に耐え、盾は傷ひとつ負わない。

グリゼルダは腰こしを下す

これは想像以上にいいな。こういう使い方も——できるんだからさ。

地を蹴らずに飛ぶ。雷真も、夜々も、アリスも、三人そろって體日した。

グリゼルダの動きは、シンと同じ——完全統制振動の動きだった。

盾が作った死角を利用し、学院長の頭上に飛び出すグリゼルダ。そのときにはもう剣の、人形が変形し、優美な剣となつて、グリゼルダの手に取まつていた。

グリゼルダの背中から、赤い光が飛び散つた。

血液が氣化して爆発的な魔力を生む。魔力は糸の形に修練し、右腕を通して剣に伝わり、魔術回路を極限まで稼働させた。

いきなり最高速に到達。捕妻のように降下しつつ、剣の一撃を見舞う。

学院長は頭上に魔法陣を展開し、受け止めた。が、衝撃までは殺せない——

爆音とともに、床が沈んだ。

頑丈な石の床がクレーター状にぐこむ。壁という壁に亀裂が走り、天井のガラスが砕け散つた。ガラスは相當に分厚かつたようだ。崩れた氷山のような塊が、落石よろしく落ちてくる。雷真はアリスをかばいながら、崩落するガラスを必死で避けた。

立ちこめる粉塵の中、グリゼルダはうつすら笑つて立つていた。まさに鬼神だ。

「信じられない……フラガラフハを……術者に採用した……初見で——」

アリスの声が震える。雷真もまた、改めて師の技量を知つた。

恐るべきはグリゼルダ。そしてあの、白く輝く機械天使。

Dワーフスの設計を盗み、ドイツの魔術回路を搭載した、ハイブリッドな自動人形——理屈を考えれば、それはただの寄せ集めにすぎない。

ケルビムは高熱の集中により、あらゆる物質を切り裂くという特性があつた。

機巧兵士は術者と人形、ふたりぶんの魔力を使えるという利点がある。

あの二体にはどちらもない。だが、グリゼルダには無尽蔵に近い魔力と、アリアドネの糸がある。彼女の手にある限り、あの二体は絶対の剣、絶対の盾となる。

シンが言っていた。アラガラッハとは本来、自らの意志で敵を倒し、手元に戻ってくる神劍——その一撃は鎧で止めることができないという。

その名に相応しい自動人形が、皮肉にも、技術の濫用によって完成したのだ。

グリゼルダの力は圧倒的だったが——

それは、相手にも言えることだった。

崩れ落ちた床の下から、巨大な魔力が噴き上がる。

「見事だ、ミス・ウェ斯顿」

粉塵の中、学院長の声が響く。

女王とともに、浮上してくる学院長。念動で体を浮かせて、いるようだ。

「……手」たえはあつたんだがな。一九世紀最強の名声は、嘘ではないか』

グリゼルダは苦笑した。一方、学院長も苦笑していた。大穴を見下ろし、あきれたよう

にあ」ひげをしげ。

「幾重にも物理防護を施し、強度を高めたこの場所を、こやまで破壊するとは——」

最後まで言わせず、グリゼルダは劍を投げつけた。

劍は一直線に突き進み、女王の首を狙う。させじと学院長が魔法陣でプロフタ——力と力が拮抗した瞬間、グリゼルダは叫んだ。

「もう行け、バカ弟子！ この櫻を逃せば、この男は突破できん！」

魔王がそこまで断言する。学院長にはそれはどの力があるのか。

雷真は決断した。素早くアリスを抱き上げ、夜々と二人で大穴を跳び越える。

「む——よいのか、エド。小僧が逃げるぞ？」

「かまいませぬ。行きたまえ、ライシンくん！」

学院長の意外な言葉に、雷真は思わず立ち止まった。

「魔王すら足止めに使う——見事な器だ。（下から一番目）と掲載された君が、そこまで
の力を身につけた。頑張ったこほうびに、私からプレゼントを贈りたい」

普段、学生たちによく見せる、穏やかな微笑みを口元にたたえる。

「千載一遇の好機を堪能したまえ。誰にも邪魔されずに、ね」

好機。千載一遇の好機。それは、まさか——

雷真は弾かれたように駆け出した。夜々を追い越し、狹い通路を駆け抜ける。

突き当たりは、先ほどのモザイクに形のホールだった。

広さはもちろん、天井のガラスまで同じだ。ただし、先ほどのホールにはなかつたものが、中央に鎮座している。クシラのような形の、硬式飛行船だ。

「船……でしょうか？」

夜々が小首を傾げる。雷真はあくとしだ。

「ダイダロスの縮小版……？」なや、「こんなものが学院に……？」

アリスに聞いただそうとしたが、それに気付いた。

「貴方はマスターの（敵）ですか？」

何の感概もなさそうな、形式的な質問。飛行船の上に覆面の少女が立っていた。

「火重……ついたか。おまえがここにいるつてことは」

「いたがらだ。（下から）（番目）」

疑問を肯定するように、声がかかる。

月影にあらめく銀の仮面。その下にのぞくのは、魔力を帯びた紅い瞳。

「マグナス……」

妹の仇が、そこにいた。

Chapter 7 お詫び

1

シャルとフレイは「最初の任務」をすんなりこなし、再び地下に戻り下へ下った。既に、シャルは元通りの大きさだった。着ているのはアリスが寄越した礼服だけだ。その内側はひょく頼りなうことにならへる。

シタムントはシャルの肩にとまり、オオカミ犬の「うん」はフレイの横を歩いてくる。先ほどの地上で見たものが脳裏に甦り、シャルはやえりと甘めの気をゆよねした。

「へ………シャル、大丈夫？」

「貴女、あんなの見て、よく平気ね」

「私たちが前にいたところには、ああいうの、だへやああつた」

「——うめんなわ。嫌なこと思ふ出でせ」

フレイは小首を傾げ、遠慮がちに、シャルのむだらに手を当した。

「歯でも、あるか？」



「なふわふい。私たの」「」ふむむむふ」 ふのふねえわよー」

「やあ、頬……赤ふ」

「モ、モモー——」

かああああいふるふに赤くなるシャル。頬から火が出せばえ。

「笑するなフレイ。先刻のアレがあまりに癡レーベ、余韻は残りてふゆるね」

「だい、だだ黙りなれンシタムハメー、そん、い、はがい、ヒムリ……」

「言葉とは裏腹に、シャルはめがるを隠リかへりふ赤面」した。

フレイはうつむく、すねたように言いた。

「めりもの、やらやましかりた」

「あああんなの、仕方なへ面りだりふにじやなふ」

「やあ、うひやましかりだ……」

「……りめんなれふ」

「わ、一度、フレイはシャルのひたにに手を当じた。

「や、い型り、然ある?」

「そんな」と言つてゐる場合に、作戦はまだ半分しか終わつてないのよー」

「まかすよ、にそ、う言つて、シャルは早足になつた。

ありうと無理やり顔を引き締めて、砂に足を取られながら大空洞の間に走る。

「シャル……困りたい」とがあったら、ライシングだけじゃなく、私も相談したい。

驚いて振り向くシャルに、フレイは「はい」と笑いかける。

「私たち、友達だから」

「——

にわいと派ぐみをやになるのを、どうにかいの?」
こんな私を友達だと育ててくれる。

ほんの少し前まで、そんな者は一人としていなかった。
皇太子に傷を負わせた一家として、世間からも嫌われて。

昔友達だった者も、みんな離れて行つたのに——

シャルは顔を赤らめ、怒ったような顔で、フレイを見つめ返した。

「私は誇り高きアリュー一家のシャルロット。世話になりっぱなしなんて我慢やしないわ。
だから……貴女が相談してくれるなら、私も相談するわ」

フレイは嬉しそうにうなずいた。その拍子に、大きな胸が「きゅう」と揺れて、芽生え
かけた友情に水を差す。

そのとおり、ラビが耳をびんと立てた。フレイもまた、びくっと顔を上げる。

「……近い……」

ラビが音を捨つたらしい。フレイはラビと感覚を共有する「ルビ」をアラウド。

シャルとフレイは速度をゆるめ、慎重に斜面をくだつた。やがて断崖ゼンカイに到達、眼下に宮殿が見えてくる。

うつすら神々しく輝く宮殿——まるで神殿のような眺めだ。

宮殿のバルコニーに十字架型の柱があり、そこにシンがぐぐりつけられていた。魔封じの鎖でぐるぐる巻きにされている。鎖はわずかに一本。一重の拘束で済ませたというには、よほど強力なものだらう。

「私たちの出番よ、シグムント！」

シグムントをうながしながら、アリスの言葉を思い出す。

「こいつの命が惜しかつたら——なんてお決まりの台詞ゼリフが聞きたくないなら、奇襲で護衛を無力化し、一気に奪還するのがセオリーだ。ただし、今回は具合が悪い」

開けた空間のため、接近が難しい。八重霞ヤエカサで隠れても、相手の結界に触れれば大まかな位置を察知され、広範囲魔術で殲滅ゼンスツされるおそれがあつた。

「そ」で遠距離から魔術で狙撃、拘束具を断ち切る。シンには自分で飛行能力があるからね。拘束さえ断ち切れば、助け出すまでもなく、自力で逃走である。狙撃役にはもちろん、シグムントが適任だ。

シャルはシグムントの視覚に意識を同調させ、距離を測つた。

五百ヤード少々。風はない。この距離なら——当たられる。

「チャンスは一度よ。私たちが失敗したら……フレイ、強攻はよろしくね」

「う、わかった」

フレイがうなずく。ゆるゆる。シャルのやる気が少し減退する。シグメントが地面に降り立ち、四肢を広げて体を安定させた。狙うのはシンをつない鎖。外したが最後、シンに風穴があく。シャルは魔力を練り、祈りを込めて、心の引き金を引いた。

2

倒れ伏したロキの頭上で、ローゼンベルクはにたりと笑った。

ロキの頭蓋骨を踏み抜く「パン」一聲で降下していく。ロキはまだ意識を失っていなかったが、反応できる状態ではない。死ぬ——

ロキの窮地を救ったのは、意外にも小素だった。

わざと八重音を解除して、銀剣でローゼンベルクの眼珠を狙う。

突然の襲撃に驚き、ローゼンベルクは身を退いた。完全統制振動を駆使すれば、眼珠へのダメージさえ無効化であるはずだが、本能的な恐怖が上回ったようだ。

そんな自分を恥じるよ^ううに、恥^{はず}を隠^かましげに舌打ちする。その間に、小葉は再び八重富を起動、ロキを引^ひ張^つて退避^{たいひ}した。

警備を含め、誰も二人を目^めで追^おわ^ない。こちらの姿は見えていな^いようだ。

「お兄さん、大丈夫^{だいじゆう}？」

「ああ……すまない。これはおまえがや^つたのか？」

「私だけ雪月花^{せつげつげ}のひとりなんだよ^う。——でも、私にできるのはかくれんぼだけ。深知系の魔術を使わ^れたら、すぐに見つか^かりちゃうよ^う」

「……先に警備を排除^{へきび}する。フォローを頼めるか、雪月花の人形？」

「できるよ^うう！」

強^{つよ}がる。ロキはふうと笑^{わら}うて、ケルビムに魔力を送り込んだ。

大剣が紅蓮^{こうれん}の炎を噴き上げ、ヘイムガーダー二体をなで斬^ねりにした。魔形^{まがたま}が解^{わか}け、一瞬見えたケルビムの姿は、小葉のフォローで再び姿を消す。

警備の人形使いに戰慄^{せんりつ}が走^はった。

これでは、暗闇^{くろやみ}から不意打ちされるに等^{あた}しい。

彼らのくだした判断は——（撤退）だった。

残存する二体の人形に背後を譲^{ゆず}らせ、四人がそろつて後退^{こうたい}する。

自動人形を無駄死にさせ^らざ^ることが警備の仕事ではない。逃走経路を前もって封じ、応援

を呼ぶのも立派な仕事だ。

(――だが、見切りが早すぎる)

ロキは違和感に眉をひそめる。噂のカツバルゲルが、こんなにありあがりしてゐるのは思えない。何か裏があるので……。

いや、今は目の前の敵に集中すべきだ。

カツバルゲルが撤退した今、残る自動人形はフェニックスだけだ。

「……正闘。だが、まあいい。貴公らい」と、フェニックスの敵ではない

ローゼンベルクは動搖した様子もなく、悠然と立っている。そして――

「そら、そこだ!」

こちらの位置を精確につかみ、フェニックスをけしかけてきた。

火の鳥がケルビムを狙つて飛ぶ。音速に近い。

対応が間に合わない。体当たりがケルビムを直撃し、刃を薙ねた鎧甲が一枚、へし折られてしまふ。態勢を崩したケルビムを尻目に、フェニックスはロキを狙つた。術者を狙う――かつてロキが教えてやつた通り、それが実戦の定石だ。

ロキは身を投げ出してかわす。マントが燃え上がり、制服の下の肌が焦げた。さらに追撃がくる。鉤爪がロキの喉笛に迫り、小棠が悲鳴をあげた。

一方、ケルビムが間に合つている。大剣に変形して鉤爪を受け止めた。だが、焼き切る

「」とは、もやるんできない。熱風噴射を使えば、相手の力が増すだけだ。

大剣が盛大に刃こぼれする。刀身が折れる寸前、ロキはフェニックスの真下から転がり出で、既とくケルビムを後退させた。

「ふふ……痛快だな。実にな」

言葉通り、ローゼンベルクは愉快そうに笑つた。

「甘美なひんともだ。この俺に手傷を負わせた、不遜な悪か者をなぶつけてやれる」「手傷……？」

ローゼンベルクは袖をまくつた。腕に、ただれた傷痕が残つてゐる。

「これは貴公につけられた傷だ。同じものが両手両足にある。この醜い傷痕を見るたび、俺の復讐心は燃え上がるのだ。このフェニックスのように。」の恨みを晴らす——そのために俺は力をつけた。だから勝つ

「恨み……？」

ロキの声から温度が消えた。

絶対零度に凍りつく声。ローゼンベルクの眉間にしわが寄る。

ゆうぐりと顔を上げるロキ。紅い双眸に射すくめられた瞬間、ローゼンベルクの表情がひきつた。はつきり恐怖を感じてゐる顔だ。

「そんな……ちつほけな……自慢にもならん……がすり傷が……」

「ううう」と音を立てて噴き上がる、途方もない魔力の炎。

「あいつの命と釣り合うものか！」

叫びと同時に、魔術合金の地面を破り、短剣が下から飛び出してきた。

最初に警備に放つたものだ。地中を通して、ここまで引き戻していた一かつて義父が使つたのと同じ技だった。四本の短剣が真下からローゼンベルクを襲う。短剣は見事に直撃したが、ローゼンベルクの肌には傷もつかない。

「無駄なあがきた。こんなものがフラガラフハを貰けるはず——」

ローゼンベルクの嘲笑が強張る。……違う。ロキの狙いは攻撃ではない——

短剣の一本がロキの左手首を裂き、どうと鮮血があふれた。

「……何の真似だ？ 自ら死を選ぶと……させるもののか！」

フェニックスを突進させるローゼンベルク。その速度が、不意に鈍つた。

進まない。見えない壁でもあるように、フェニックスが停滞している。

不思議の原因に気付いて、ローゼンベルクは目をむいた。

「念動……だと？ 他人が支配する自動人形を……念動で阻んでいる……？」

どれほどの魔力があれば、そんな芸当が可能なのか。

膨大な魔力があたり一帯を支配する。おりを受け、小窓が苦しげに腰をついた。

ロキが流す血は、血だまりを作らない。地面につく前に気化して、すさまじく高密度の

魔力となって、ケルビムに流れ込んでいた。

ロキの胸で機巧の心臓が暴れている。莫大な魔力を吐き出す、魔術の炉心が。ローゼンベルクが住んだ。しかし、今さら撤退する猶予は与えられない。大剣は真紅の光を放ちながら、音速をはるかに超えて回転した。

3

「感謝するよ、学院長」

グリゼルダは緊張を隠し、余裕ぶりで笑いかけた。

「私の弟子を見逃してくれた——そういう解釈でいいんだる」

「見逃したつもりはない。だが、努力には報酬が、若者には機會が与えられるべきだ。彼はそれに見合う収穫をあげ、功績を重ねてきたのだから」

「教育者の靈だな。それで、こわいの決着はもうつける。バカ弟子が突進した以上、私

はもう尾を巻いて逃げ出したいところだが」「そうはいがん。貴女が退けば、私はすぐにでも彼を追うし——学院の権威に盾突いて、無事でいられるはずもない」

「だろ？——なー」

前触れもなく、斬りかかる。

敵もさるもの、とつくに反応できている。女王が怨靈の群れで迎撃してきた。

盾の人形が先行し、グリゼルダを防衛。怨靈が阻まれ、噴煙のように飛び散った瞬間、グリゼルダは床すれすれを飛んで、足もとから女王に追つた。

学院長はこちらを見ようともしない。気付いていないのではなく——見抜いている。

学院長の頭上から、剣の人形が降つてくる。

グリゼルダは、因で、剣が本命の攻撃だった。剣は学院長にプロラクされ、グリゼルダには怨靈の軍勢が降りそそいだ。

あわてて反転するグリゼルダ。剣を呼び戻しつゝ、急いで後退。群がる怨靈を盾が受け止めたとき、背後から別の怨靈がきた。

死角から回り込んでいたようだ。だが、それはグリゼルダの読みのうち。そちらには日もくれず、剣の一閃で霧散させた。

殺到する怨靈の群れを剣と盾で蹴散らし、隙を突いては女王に接近、攻撃、防衛される繰り返し。そうした戦いが五分も続いた頃、グリゼルダは大きく飛び退いた。

グリゼルダのひたいには汗が光っている。だが、息は乱れていない。

他方、学院長は汗一つかいていない。だが、眸易はしているようだ。眉間にしわを寄せ、難しい顔でうなつた。

「これでは姫が明かんな……」

お互に決定打のない消耗戦だ。グリゼルダは笑つて、「淫魔の姫を引っ込めて、違う自動人形を出したらどうだ？ それが貴方の強みであり、最強たる所以なのだろう。」

「……ふむ、そうしたいのはやまやまなのだが」

「何だ、エド。わらわを用無しと申すか」

早くーーと不満そうに、女王は姫を膨らませた。

「何たる恩知らず。貧相な小僧にすぎなかつたおまえをそこまでにしてやつたのは誰だ？ 思うておる。わらわは悲しいぞ」

「お待ちください、女王イシュータル。そのようないとがありま」^{シテ}「もうよい。ならば、もうと魔力を寄せせ。第二の軍勢を」「ぐー」「——」

「——」

女王の言葉を聞いて、グリゼルダに戰慄が走つた。

悪魔アスタークトは四十の軍勢を持つといふ。グリゼルダは、女王が呼び出す悪魔「そが、その軍勢なのだと理解していた。

だが……あの怨靈が、群れ全體で「第一」の軍勢なら、女王はまだ、四十分の一の戦力しか見せていない……！

「やむを得ませぬな」

学院長が魔力を練る。荒れ狂う風のように空気が逆巻いた。巨大な魔力が女王の全身に行き渡り、さすがのグリゼルダも肝を冷やした。がちにやのふ——

「そりまでだ。シンシイ」

一陣の風のように、誰かが学院長のとなりに現れた。

ひゅんの、とサーベルを振り下ろし、学院長の進路を塞ぐ。

見覚えがある。この女は、英國政府が派遣した、学院長の秘書官だ。

「見ての通り、私は取り込み中なのがね、アガリルくん？」

「心配せや」と、やるの用件はありと取り込んでくる。国王陛下にかかわるお詫び出だ。たやねだらじある、とね。——グランビルの性や

「ふ……迅速なことだ」

学院長は面白がるような目をした。右手でレメゲトンを囲む。「リム、ムー——」ア い、う女王の非難が、その姿もろとも、一瞬で消え失してしまふ。

「うの紳士様」とした表情に戻り、学院長はグリゼルダを振り回した。

「ムズ・ウェベーン。今度、りりに起きた」今はすぐや「なかりたり」にこつたふと叫ぶが、貴女の意見はどうかね？」

「ふ……ふだんは」

「……」これは誰も「なかりた」、何も起らなかつた。貴女の行為をとがめるつもりはない。

「何も起らなかつたのに、処分などやれはせぬからな」

——裡親父め。グリゼルダは苦笑しつつ、

「貴方が何を言つてゐるのか、私にはわからぬ。今夜、……」でも何も起らなかつたといふ

「……」うなづいた。

学院長は満足げにうなづいた。

「では、行こう。地上まで送るよ」

「……」という意味だ。……は学院の最重要施設。これ以上、自由に歩き回らせるつもりはないのだろう。

アヴリルのうさん臭そうな視線を浴びながら、一人に統いて歩き出す。剣と盾も機械の天使に姿を変え、機械とは思えないほど優雅な足取りでついてきた。

暗い通路を歩きながら、グリゼルダはかつてない不安に襲われた。

この先では雷鳴が戦つてゐたはずだ。しかし、少し前から戦闘音が聞こえたない。

決着はついたのか。果たして、あのバカは……生きているのか。

学院長は悠然と歩いてゐる。その背中が、ひとくぼめしかつた。

〔偉大なる者〕……

銀の板面を見て、アリスははつきり恐怖を覚えた。

アリスだけではない。どんな窮屈でも笑っているような雷真が、張り詰めた表情で硬直している。夜々に至つては、かすかに膝が震えていた。

雷真より頭半分ほども背が高い。板面と礼服で、客姿が全然わからない。

強烈な印象を与えるのに、何一つ正体がつかめない、謎めいた存在。

彼の周囲には、自動人形が三体、親衛隊のように控えている。

身にまとうのは花のようなドレス。薄紺のヴェールには東洋の漢字。崩し文字だったのを、語学に堪能なアリスでも判読するのに時間がかかった。火、鑑、玉——彼女たちの名前の一節だ。とすると、あの三体は火垂、鑑切、玉虫か。

火垂は両手に短剣を、鑑切は柄の長い大鎌を、玉虫は剣をそれぞれ手にしている。構えてはいないものの、どれも抜き身で、臨戦態勢だった。

マグナスが率いる〈戦隊〉。六体いるはずだが、見えてるのは三体だけだ。

「……幹なはからいだぜ、学院長」

伝い落ちる冷や汗をぬぐつて、雷真はうつすら笑みをこぼした。

「丁度いい。今ここで因縁を断つー」

「待つんだ、ライシン。（剣帝）か（暴魔）か合流した方が——」

「そんな余裕はない。今ここから逃けば、シンもおまえも救えねえ」

「下がってくださいアリスさん。巻き込まれます」

アリスを気遣って、夜々が忠告してくれる。夜々もまた、やる気らしい。

マグナスは見定めるような目を雷真に向ける。うなずいた。

「腕を上げたと見える。一度は敗北した敵に、勝てるかとなく向かってくるか」

「勝てるさ。だが、それ以上に、俺は今おまえと戦いたい」

「蛮勇だな。おまえは試してみたいのだ。手にした力がどれほどのものか」

「ああ、蛮勇だ。だが、あのときと同じだと思うなよ？」

「ほう——何が変わったと言うんだ？」

次の瞬間、がいんり、と金属音が響き渡った。

雷真と密着する距離に、三体の乙女が出現していた。火垂は真正面から、玉虫と諫切は背後から、雷真に刃を舞り出したようだ。

三人の乙女が飛び退く。ヴェールがめくれ、驚いたような表情が見えた。

雷真は自分の左手、人差し指を見た。わずかに切れ、血の玉が盛り上がっている。針で突ついた程度の傷だ。察するに、火垂の一撃を受け止めたのか。

残り二体の攻撃は防ぎもしなかった。わずかな動きでかわしだ……!!

「さすがだな。そいつら、素の力で金剛力を貢きやがる」

雷真が笑う。マグナスは感心したように雷真を見た。

「大したものだ。あの刹那に、（金剛力）を援用したか」

「誓めてくれるのは、ちよいと早いぜ」

雷真は右手の布をつかみ、袖と一気に引き裂いた。

その下にあつたものを見て、アリスは目を見張る。雷真の右手には、不可思議な紋様が描き込まれていた。タトゥー、だろうか。迷路のように入り組んでいる。

空気に触れた途端、紋様は紅く光り始めた。

「夜々。吹鳴四八術」

「はい！」

夜々の背中に、雷真の指から五本の糸が伸びた。

青白く輝く魔力の糸。網膜を焼くほどの光だ。アリスは目を見張った。これほどの収束は見たことがない。父エドワードであつても、できるかどうか……。

夜々は爆発的に加速して、マグナスに突っ込んだ。

もちろん、（戦隊）は突破を許さない。鎌切が魔術を起動、火垂をマグナスの前に躊躇移させる。火垂はナイフを交差して、夜々のこぶしを受け止めた。

夜々の鉄拳に火垂は耐えた。だが、こらえきれない一

短剣が碎け、火薙が吹っ飛ぶ。そのまま壁に激突し、石の壁にめり込んだ。蜘蛛の巣状に亀裂が走り、ホール全体がぐらぐら揺れた。

アリスは驚愕した。マグナスの〈戦隊〉を圧倒した。

雷真は快心の笑みを浮かべ、右のこぶしを握りて見せた。

「俺には（糸）一〇本を操るだけの器はなかった。だったら、五本で十分だ」

雷真の腕を見て、マグナスは過屈そうに呟いた。

「片方の糸車を封じ、片腕のみで糸をつむぐ——裏門紅翼陣〈捨法散華〉か」

「——!?」

「何を驚く？ 赤羽一門が千年の時を刻む中で、おまえと同じ範囲に至った者が、ただの一人もいなかったと思うのか？」

紅い瞳で雷真を見据え、淡々と言葉を続ける。

「見たことのない呪式だが、やつてはいけないが。古上田へ、〈紅翼陣〉はいつの日あり——〈十重〉〈十束〉〈十匣〉なり。裏門はそのひとつをあわらめ、〈十重〉〈十束〉の二門で完成とする安易な道だ」

ふう、とため息をひとつ。マグナスは失望をこじませ、かぶりを振った。

「焦ったな。生まれ持った才を、自ら捨てた」

アリスは雷真の横顔を盗み見る。

雷真は顔面蒼白だった。だが、気力は失われていない。

「おまえに勝つためなら何だってするさ。そして、少ない才能を捨ててもいいねえ。そんなことより——おまえは今、決定的なじくじくをやらかしたぜ?」

「……何のことだ?」

「俺の前で、赤羽天全だと認めた!」

「おおおつ、と潮のうねるような音がする。

憎悪が力を呼ぶのか、途方もない魔力があふれ出してくる。

魔力は雷真の右腕に集まり、収束した糸となり、それは夜々の体に流れ込んで、彼女の五体に強大な力を与えた。

ふわっと髪が浮き上がり——夜々が消える。

違う。駆けたのだ。衝撃波がアリスの頬を叩き、髪を吹き散らかす。

夜々は一瞬で敵陣に入り、起き上がったばかりの火垂を狙つた。

そこに、別の乙女が転移で割り込んでくる。

入ってきたのは玉虫だ。手にした剣ではなく、左腕で夜々のこぶしを受ける。

押し切られそうになるのを、火垂が後ろから支えた。それでもなお、夜々の方が勝つている。このまま押し切れば——

そのとき初めて、マグナスが乙女たちに右手をかざした。

指先から五本の糸が伸び、一本は火垂に、一本は玉虫に到達した。二人の力が一挙に増して、夜々の力と拮抗する。と同時に、玉虫の魔術回路が起動した。

いかなる魔術だったのか。変化は玉虫ではなく、夜々に生じた。

がくんうと、夜々から力が抜ける。

雷真の反応は速い。右腕に左手を添え、さらなる魔力を練り上げる。夜々はすぐに立て直したが、全然、出力が上がらない。

（夜々の魔力を減退させて……いや、奪つている！）

玉虫はどんどん魔術の効果を高めていく。ドレイン系の魔術は極めて高度なプログラムと、繊細なコントロールが必要だ。それを平然とやってのけながら、マグナスは三体もの自動人形を同時に操っている――

そう、三体いるのだ。

気付いたときにはもう遅い。〈糸〉の最後の一本は謙切に到達している。謙切は大鎌を振りかぶり、雷真の背後に転移した。

大鎌が雷真の首を狙う。雷真はかがんでかわしあま、謙切の腹を蹴つた。

反撃した一目を見張るアリスの前で、雷真はマグナスに笑みを向けた。

「空間転移は確かに脅威だ。が、別に速度が増すわけじゃない。仕掛けてくるタイミングと、位置さえわかりや対応できるさ。タネの割れた手品はお遊戯にすぎない――おまえの

「言葉だったよな？」

「……学院に席を置く者として、後輩にひとつ、知恵を授けよう。魔術の有用性を決めるのは性能の優劣ではない。重要なのは——使い方と、使いどころだ」

再び鎌切が消える。と同時に、夜々の頭上に出現した。夜々を狙つたようだが、夜々は玉虫と力比べ中で、まだ金剛力が効いていた。あんな鎌でやられはしない。

「下だー ライシン——」

アリスが言い終わる前に、雷真も気付いた。

鎌切の派手な動きは陽動だ。本命は——火垂！

雷真の眼前、視線より低い位置に、いつの間にか火垂が転移していた。

火垂はほかの二体より、はるかに攻撃速度が速い。

まさに、目にも留まらない。稻妻のような掌底が擦り出される。

反応できたのは本能のなせるわざ。少なくとも、「見て」よけたのではないだろう。

雷真は地面を蹴つて飛び退いている。草はぎりぎり、届かなかつた——

——はずだった。

それなのに、雷真の口から、血とも胃液ともつかない体液があふれた。

「が……は……っ！」

体内で爆薬が炸裂したような衝撃。立っていられず、雷真は床に手をつき、自分が吐いたものを凝視した。自分が何を喰らったのか、理解でない。

「衝撃波」ではない。

あの一瞬、雷真は金剛力を自分に使ったようだ。草底が衝撃波を生み出したとしても、硬化した筋肉の装甲が受け止めてくれたはず。

夜々が泣きそうになりながら、雷真の元に戻っている。

「雷真！ しつかりしてください雷真！」

「何……だ……今のは……？」

マグナスはむしろ喜ぶように、紅い瞳で雷真を見下ろした。

「火垂の力を見直したな」

「……そうか。勘違いしていたのだ。

火垂は夜々と同じく、魔術で自らの身体能力を高め、物理攻撃で戦うタイプに見えた。アリスもそう思つたし、雷真もそうだったのだろう。

だが、あの身体能力が別の魔術の〈副産物〉だとしたら？

魔術の効果を授用して、ついでに身体能力を高めていたのだとしたら？

「純だ、おまえは」

というマグナスの声は、雷真のすぐ真後ろで聞こえた。

空間を転移したようだ。いつの間にか、その手に短刀が出現している。

夜々は反応できていない。短刀が雷真の首筋を切り裂く——寸前。がきんつ、とアリスの左腕が力を阻んだ。

「……アリス・ザフード。何の眞似だ？」

マグナスが意外そうな顔をする。

アリスは左腕——機械義肢——を力任せにねじり、シリンドラーをわざと破損させた。

途端に、割れた金属管から赤いガスが噴き出した。

「マスター——下がってください——」

火垂ほたるが叫ぶ。浮き足立つスカーラン（戦隊）を尻目に、アリスも叫んだ。

「夜々——ライシンを——」

夜々はあわてて雷真を抱き上げ、転がるようにマグナスから逃げた。アリスもまた飛びのきながら、左のピアスを外し、ガスの中心に投げつける。

魔力を送つて、魔術を起動。ピアスから火花が散つて、それはたままちガスに引火し、大爆発が起こった。

煙に紛れ、ホールの端へとエスケープ。あらかじめ日星をつけていた出入口に、夜々と一緒に飛び込む。

その先は階段になっていた。最悪なことに、下り階段だ。

「アリスさん、エバ……エバ……だら……だら」

「しー 聽れでー」

夜々を黙らせ、階段を駆け降りる。

二階ほど降りたところで、うす暗い横穴を見つけた。通りさに雷真を放り込み、頭上の様子をうかがう。マグナスは近づいてきている……が、その痛みはゆりくりだ。やはり、この先は行き止まりなのだろう。

「雷真……雷真……？」

声を殺して、主を描き見る夜々。雷真は答えない。どうやら、気絶したようだ。出血はほとんどないものの、相当なダメージを受けている。

ボロボロの雷真を見ているうち、アリスの視界がぼやけた。
馬鹿な男だ。本当に。どうしようもないくらい。

胸が熱くて、熱くて、たまらない。

他人を欺き、隠れ、自分のために利用してきた僕。

彼は、その対極にいる。他人のために、自分を欺き、自らを窮地に陥れる。
この稀少な、珍獣みたいな男を、人類から奪つてはいけない。

彼を死なせるわけにはいかない。死なせては、いけない。
こんな綺麗な気持ちが、薄汚れた僕にも残っていたなん——正直、意外だ。

笑いが込み上げる。生まれて初めて、神戸市に感動したくなった。

（そうだ、僕にはまだ、最後の武器がある）

このときのために用意されたいたんじゃないかなと思へば、ひとりの武器が。

「夜々。頼みがあるんだ」

夜々は切迫した表情で、すがるよに見上げた。

「戦いが終わった後、僕の死体を運び出してくれ。誰かが見つけたら死んでしまう」

「え……アリスさん……ふうふう意味ですか？」

「僕の魔術回路は優秀だよ。何せ、あのヒューラー・サザフォーンが作らせたから

ね。それでも、数日もすると効果が切れちゃうんだ」

憑戯つぼくウインク。そして、魔術回路〈虚像〉を起動した。

変化したアリスの姿を見た、夜々は大きく目を見開いた。

そして、すぐてを理解して、涙をこぼした。

「おや。僕のために泣いてくれるのか？」

「だいじ……」

「君は優しいね。僕は君にひよこりんを書いたのに」

そりと、細い肩に手をかける。

「手を貸して貰えるね？ 僕は彼を助けたいんだ」

うなずく。夜々の瞳に映っているのは、もうひとりの雷真だ。

傷のつき方も、にじんだ血も、何もかもがうり二つ。

雷真に化けたアリスは、本物の雷真にも〈虚像〉をかけた。

雷真は瓦礫の一部に姿隠して、櫛穴の奥に押しやられる。腐つても〈諜報活動専門〉の魔術、よほど精緻な探査をしなければ、見つかずに済むだらう。

「さよなら、ライシン。君との婚約者——ことは——榮しかったよ」別れを言つて、アリスは横穴を出た。夜々とともに階段に戻る。踊り場の手前で気配を殺し——

降りてきた火垂に、夜々が奇襲を仕掛けた。

蹴りが直撃。火垂を弾き飛ばす。大したダメージではないが、奇襲は成功した。火垂が反転して着地する。その背後に、マグナスの影が立つた。

アリスは雷真のイントネーションを真似て、

「勝つたつもりでいたか、マグナスさんよ。僕はまだ死んでないぜ。」

声のピッチは魔術が調整してくれる。だが、自分で確かめることはできない。そりへりに聞こえているだろうか。不安は尽きないが——やつて見せる。僕はずつと、多くの人間を騙してあたんだ。今さらマグナスひとり、騙し通して見せる——

「行くぞ、夜々」

「はいー」

力強くうなずく夜々に、アリスは魔力を送り込んだ。

戦闘が再開される。夜々は体ごと火垂にぶつかっていく。

だが、〈戦闘〉は三体もいるのだ。玉虫が剣を抜き放ち、火垂に加勢する。夜々はたちまち追い詰められた。

鎌切が大鎌を手に、アリスの方に跳んでくる。

——潮時だ。アリスは心の中で微笑む。

首をはねられても、〈虚像〉は効果を失わない。ここには雷真そつくりの死体が残り、本物の彼は見向きもされない——はずだ。

そんな欺瞞がマグナスに効くのかどうか、それは賭けだ。だが、アリスの読み通りなら、多少の疑惑が残つても、マグナスは深追いしないだろう。

(さよなら、ライシン)

アリスはもう一度、心の中で別れを言つた。三日月のような軌跡を描き、アリスの首を刈り取ろうと迫る白刃が……不意に止まる。

「…………」

アリスの眼前で、鎌切が苦しげに身をよじりてゐる。身動きが取れないようだ。気がつけば、青白い魔力の糸が、鎌切の体にまとわりついていた。

何だ、と思う間もなく、アリスの肩に誰かがもたれかかってくる。その拍子に、魔力の糸がアリスにも接触し、アリス裸身の擬態はいともたやすく壊れてしまった。

抱きついてきたのは、雷真だった。

浅い呼吸を繰り返しながら、アリスを抱きしめる。いや、寄りかかったのか。「ライシン……何を……やつてるんだー。僕がせうかく……馬鹿だよ君はー」「馬鹿はおまえだー」

怒鳴られる。熱い息が耳にかかり、アリスはびくりとした。

「身勝手なんだよー。俺を巻き込んで……ハヤルやアンリを振り回して……がんばれと好き放題やつておいて、馬鹿じゃないのか……ふざけんなー」

「でもり、僕は君たちを……ー」

「頭罪の気持ちがあるなら——」

肩が折れそうなほど、アリスを強く抱きしめる。

「生きて、償えー」

思わずあふれそうになる瞬間を、アリスはともに噛み殺した。

生きろ、と。生き続ける、と。

そんなことを他人に言われたのは、初めてだった。

雷真はマダラスを見上げ、自分の相棒に呼びかけた。

「やるぞ、夜^や」

「はい」

エリにこんな力が残っていたのか。雷真から、さらなる魔力があふれ出す。

だが——結論から言えば、その魔力が發揮される前に戦いは終わった。

「時間切れたよ、マグナスくん」

階段の上から、学長の声がした。

5

魔術合戦の地面を蹴り、キンバリーが疾走していく。

金糸で縫い取りがされた、アードつきの黒マントを羽織っている。その動きは飛鳥よう

に軽やかで、さうたゞ無駄がない。

例の（聖堂）から四百メートルほど離れた地点で、ロキを発見する。

大剣を地面に突き立て、杖代わりにしている。何をやらかしたのか、魔力は尽きかけ。

色白の顔は普段にも増して青く、体が小刻みに震えていた。

驚かさないよう、わざと足音を立てて近付く。

「ふうやら、私は必要なかつたようだな」

あたりに敵の気配はない。焦げた自動人形の残骸が転がっているだけだ。

「この残骸、コードP.X.だろう。君がやったのか？ ケルビムの炎で？」

「……不死鳥を炎で殺すことなど、できはしない」

ロキは厭懶としているらしい。言葉に力がない。

「では、どんな手を使った？ ありふれた手品じゃないだろう？」

「炎は何も……相手に叩きつけるばかりじゃない……」

「——純粹に推進力として使った？」

答えないが、肯定だろう。大剣の質量を加速してぶつけた——そんな原始的な手段で、あのフェニックスを叩き斬ったというのか？

フェニックスの炎は攻撃に使うばかりが能ではない。相手の攻撃に噴射をぶつけ、威力を減殺することもできる。その防壁を突破できるほどの加速を得たのなら——衝突の衝撃でケルビムが折れてもおかしくはない。

ケルビムは確かに満身創痍だが、まだ剣の形を維持している。

念動によって強度をカバーしたか。かかる衝撃を計算に入れれば、必要な魔力は人間の限界値をはるかに超えている。数百人がかりの儀式魔術なみだ。

「……只事だ」

心底から感服して、キンバリーは嘆めた。ロキは皮肉げに唇をゆがめ、

「あんたに譽められる」と……喜を感じてしまふ」

「本心からの言葉か。ローセンベルクは殺さなかつたようだな。死体がない」

「魔術師としては……殺した。利き腕を奪い、魂に恐怖を刻んでやつた……」

伝説級の自動人形を持ち出した相手に、絶対に超えられない力の差を見せつけて、完膚なきまでに叩きのめした。ます立ち直れない。仮に立ち直れたとしても、心的外傷を抱えて生きることになる。戦場に復帰するには不可能だ。

ふと、呻めりと羽ばたき音がした。

振り向くと、竜が滑空していくのだった。もちろんそれはシグムントや、シャルとフレイを背中に乗せていた。シャルはキンバリーに驚き、しかしそれ以上にロキの様子に驚いて、あわてて飛び降りてきた。

「何をやられたのよー死にかけじゃないー」

「……死ねえには關係のないんだ」

「ロキ、めーーシャルは心配してくれててるのにーー

弟に叱られ、ロキは閉口した様子で顔を背けた。ふらりと倒れそうになるのを、フレイがたわわな胸で受け止める。

「ロキー 大丈夫?」

「……悪い、バカ鈍音。今日は……いいやだ」

がくう」とロキの首から力が抜けた。全体重をフレイにあずけてくる。

「ロキ!? ロキー!」

「心配するな——とは言えんが、魔力の使いすぎで気を失つただけだ」

口では軽く言いながら、キンバリーは急いでロキの体を点検した。

左手首の傷に気付く。腕にはビモが食い込み、強引に血を止めた後がある。左手首には血が通りていらない。動脈をやつたのか。急いで処置しなければ、命に關わる。

「これはますいぞ。今すぐ上に運んで、あのヤブ医者に処置させろ!」

普段は出さない大声を出してしまふ。シャルもフレイも真っ青になり、あわててロキをシグムントに乗せ、地上に向かつて飛び立つた。

あわただしく龍が去ると、キンバリーは急に可笑しくなつた。

「それにしても——大した小僧だ」

笑うキンバリーの背後には、二十メートル近い亀裂が生じていた。

ケルビムが叩き割つたのだろう。魔術合金製の堅牢な地面が、本河の裂け目のように、ぱつくりと口を開けている。

「本当に、大したものね」

琴の調べにも似た、しおりとした声がかかる。

キンバリーは驚きもせず、背後を振り向いた。艶やかな着物姿の女性が、同じく着物姿

のいろいろを連れ、リサウアへ歩み出だした。

「（）」これは花柳新羅。」のようないいからしてや」と

「貴女と同じよ。可愛い坊やたちが気になつてね」

「私にそんな優しさはないよ」

蘭子は眼帯のレンズをぐるぐる回して、あたりを見回した。

「……（）」や、ローゼンベルク家の（）騎士がうぶおれたるね」

「ああ。ドイツは（十字架の騎士団）を見限るだろう。フランツ・ハ計画は頓挫、ドイツの神聖戦功開発は大幅に後退だな」

「（）騎士をやつたのは、ロキヒルア、あの坊や。」

「やべら」

「やべら（）」の騎士は（下から一番目）の仕業として記憶されるのや」とうね

「髪をかみ上げ、やりきれない様子でため息をうべ。

「（十字架の騎士団）との対立、一度は不幸な行き違いで済ます」とやめた。やべら――

日独にはもう遺恨がやましくなつたわね」

その通りだ。たとえ表沙汰にはならなことしゆも、軍首脳は怨恨を抱えた。やめたる世界大戦では、日本とドイツは敵対するにとなるだらう。

「またちと、平和のかせが外れてしちやうだ……。ありとも、私は世界の行く末になんて

興味はない。私の興味が向かうのは——」

「神性機巧、かね？」

ふうと妖艶な笑みを浮かべ、硝子はかぶりを振った。

「私の望みは人間を造ることよ。神さまの子とおを、ね」
さびすを返し、去っていく。いろいろ「礼」として、その後に続いた。

「謹の多い御仁だ。おまけに毒がある。もりとも、他人のことは言えんがね」
キンバリーは苦笑して、硝子とは逆の方向に歩き出した。

6

雷真は睡然として、学院長を見上げた。

「状況終了だ、マグナスくん」

「——はい」

火垂、錬切、玉虫の三体がたちに下がる。

学院長は雷真を見下ろし、ゆつくりと階段を降りてきた。

雷真の腕の中で、アリスが身を硬くする。そんな娘の様子をじっと眺め、それから雷真を見て、学院長はにこやかに言った。

「君たちの勝ちだ。あれはおまえが手配したのかね、アリス？」

アリスはうつむき、消え入りそうな声で応えた。

「……はる」

「よしやうた」

小さな声だったが、雷真の耳には確かな聞こえた。学院長は「よしやうた」の声だ。言われたアリスが呆然としている。何を責められたのか、理解できない。だが、確認する間もない。学院長はやうやく背を向け、

「では行こうか、マグナスクくん」

雷真は瞬時に沸点を超えた。

「待てよ、クソ親父（おやじ）ーほかに何か、こら（に）何う（な）はー」

「いいんだ、ライシン」

雷真の腕をつかみ、アリスが止める。

「いいんだ」

そう言つたアリスは、はがなげに——「いのち」を諭らしげに、微笑んでいた。

「……ふりまやアリスさんを抱ひこしてるんですか雷真」

夜々の冷たい声で我に返る。雷真はあわててアリスを放した。よろよろとゆきゆづくのも、夜々が素早く身を離れて、支えてくれる。

「……」めん、僕は先に行へよ。シンが心配だ」

アリスは申し訳なさそうにそそり立つて、学園長に続き、階段を上がりて行った。

「あいりが素直に「シンが心配」なんて、うす気味悪いな」

苦笑する雷真。釣られて、夜々もぐすと笑った。

アリスとすれ違う形で、グリゼルダが姿を見せた。二体の機械天使を引き連れて、早足で階段を降りてくる。

「バカ弟子ー 無事か?」

グリゼルダの顔を見た途端、雷真の中で、張り詰めていた糸が切れた。今度はのよ／＼に敗北感が込み上げてくる。

——負けた。

完全な、敗北だ。勝負にもなり得しない。

マグナスは右腕一本、《戰隊》を二体しか使わなかつた。それなりに——

(俺は一体、何に追いついたつもりでいたんだ……?)

紅翼隊が使えば互角か? 同じ土俵に立てると思ったか?

違うー 少しも縮まつていないー 兄との絶対的な差はー

「お師匠がおーーーもう一度、俺を鍛えてくれ。徹底的に……」

何が万全の体調だ。そんなものを維持しても、あいつには届きもしない。

死ぬほどの——死を超越するほどの——修練が必要だ。

頭を下げる、懇願する雷真を、グリゼルダはじうと見つめた。

そりとふところに手を差し入れ、封筒を取り出す。

「そう言えば、渡しそびれていた」

「……手紙？ 差出人はエリアーネ——ウディオラ」

イオネラからの手紙だ。雷真は紙片を取り出し、急いで読んでみた。

「親愛なるライシンぐ。(ミカエル)と(マファエル)を納品するついでに、君への手紙を書いています。これまでの私の作風とは一八〇度違うけど、どちらも可愛い自信作だよ。機会があるたら、会ってみてね。二人にも君のことは伝えてあるから」

「……しあなり謝罪されたけどな」

「一体に目をやる。あちらは雷真に興味がないらしく、目も合わせない。

「实物を見たら驚くと思うよ。エヴァとは全然、コンセプトが違うからね。私が作りたいのは人間そっくりの人形だけ」、その目的に近付くために、敢えて真逆の方向性を試してみたの。と言つても、基礎設計は先方のオーダー通りで——

相変わらず、自動人形のことになると口数が多い。

イオネラの天真爛漫な笑顔を思い出し、雷真の胸がぽかぽかとあたたまつた。

紙幅の大半を一体の説明に費やし、よくわからない手紙は終わる。

ただし、最後に嬉しい文章が添えられていた。

「齊問にはもう少しかかるけど」（ミカエル）と（ラファエル）のおかげで、思ったより早く戻れそうだよ。じゃあまたね。再会を楽しみにー」

イオネラの明るさが伝染したのか、いつしか雷真の気分も軽くなっていた。
ひょっとして、グリゼルダは雷真を励まそうとしたのだろうか。
顔を上げる。そこにあつたのは、予想外に冷たい表情だった。

「何を和んだいる。読めと言つたのはその先だ」

「あ？　えーと……」「貴方のイオネラより裸の愛を込めて〇〇」

イオのやつ、爆弾を置いていたやがったー

「どういう意味だ、それは……」貴様、またしても女を手籠めに……〇〇

「違うー　あいつは単に眼を着るのが嫌いなだけでーーー」

「夜々もその点には関心があります。大いにあります」

「妙な関心を持つなーーーつか、おまえはイオを知つてゐるだらーーー」

「雷真、いつの間に裸の愛なんて……」

「私を弄んでおきながら、修行をつけてくれなんど、よくもぬけぬけと……ーーーええい、
劍よーいーーー」いつを斬り捨てるーーー

殺氣立つ二人。身の危険を感じ、雷真は覗鬼の如く逃げ出した。

「ああ、ついに階段を上がつてこむと、不意に悲鳴のよがり声を聞こえた。

「シンー ルニー」

アリスの声だ。三人は顔を見合せ、地上へと駆け上がった。

一階に飛び出す。建物の出入口のところで、一人の影が重なり合つていた。ほろほろのシンに、アリスがしがみついた。

「シンー この不思軒!」

月光がシンの表情を照らし出す。既に外傷は修復されたが、シンは血と泥で汚れ、憔悴しきりてらるよう見えた。

「すみません、お嬢さま……。自決すぐきだいの時いたのですか……」

心底から「」の不甲斐なさを悔やむよに、頭をしげりとや。

「思つて」いるがあり、「生」を決断しちゃう。やだもん、この間お手間を——

「この間のわけがあるがー」

アリスはもう涙を隠さず、泣きながらシンの胸を押した。

「そんな」わかからぬのかー わせんはバカだー ライシンなみのバカだー

「俺を基準にするなー おーシン、何を悲しそうな顔してやがるー」

思わず突っ込みを入れてしまう。だが、主従にはもう聞こえてしない。

アリスはシンのシャツを握りしめ、血まみれの胸にひたいを押しつけた。

「おまえは僕のものだ。」れまでも、これからも、おまえが死んでいいのは、この僕が許したときだけだ。それまでは、死ぬ「人間」ではなくなる「人」も生れない。やめやない、このうすのろ野郎……！」

上下に揺れる主の肩に、シンはおやすみと手を伸ばす。

「アリス・ラザフォードの歎事は完全無欠ではございませんが——」

触れようとして、ためらう、さんざん迷うて、最後にはそういひやむ。「お嬢さまの」命令とあらは、たやすく、です

かすかに微笑んで、そう告げた。

アリスはもう返事をしない。夜々がとなりでしゃくり上げ、グリゼルダが顔を背けた。

一人とも、魔術師と自動人形の關係には、感じるものがあるのだろう。

寄り添うシンとアリスを見て、當真も胸のつかえがとれたような気がした。

そして、改めて自分の目的を思い出す。

俺は負けた。だが、まだ死んではない。

この次戦うんだ——勝てばいい。



Epilogue

憾魔が語る

「今や心からおこう。オーススメはしないからね」

モヤ報告されたにもかかわらず、シャルル・雷真は即時の解説を始めた。
シル・新造作戦の開始前、地下ホールの「ルビア」。

アリスは魔術田を壁に埋め、祭壇代わりのチャーブルを設置した。その上に妖精サイズの
シャルをのせ、雷真をシャルの前に立たせる。

フレイムロキ、夜々とシグナルメントが見守る中、アリスが手順を説明した。

「これが心解説に入るけど——ハイン、君はシャルロクドが君がうえ」

「何だい、あなた？」

夜々の瞳孔があきらめたりと早鐘ある。シャルとフレイム真剣な面接の口雷真を見ている。
普段なら「あなたがいいのだが、解説は腰掛する質問であれば、やつてこなさ」。

「好きか嫌いなど相談せ、せあ…………せあだ」

「なる、その気持ちを改めておこなへ」

「やめないと君ヤ一せめか解説口アヘンリト……だ」

「へん。コトハニセ「I love you」だ」



「ああー よりにもう一回、何で台詞を設定しやがったー」

「解説は三つのトリガーからなります。まず、10センチの距離で見ぬやうに。次に、コマンドを正確に告げる」と。そして、発話行為に嘘が交じらないこと

「……嘘…」

「心を込めて言えりゃいいんだよ。対策として私は——そうだね、シャルロットのふぶきいふを思ひ出すかぐれはる。失敗したひ、シャルロットは一度と戻らな」

「やれるなー そんな危険な」

「やるのかい… やらないのかい…」

シャルはうつむいてしまひだ。不安なのだろう。無理もない。

雷真は腹をくすぐりた。「やるしかねえだらー」と呟きに答える。

フレイと夜々の視線が痛い。雷真はやぶれかぶれで、シャルに顔を寄せた。

シャルの瞳が熱いほく潤む。心細げな表情が妙に可憐だ。雷真は赤面しながら

「シャル。おまえは、その……乱暴だ」

がくりと口れるシャル。

「素直じゃないし、何なりわやラスター・カノンを手の放す」、人の話を聞かない

「何よー ケンカ売つてのり?」

「だが、おまえは〈高貴なる者の義務〉を知つては、相手や相手の自動人形を気遣う、

優しいやつだ。俺はそんなおまえが……好きだ」

利郎、ほんと、と軽い破裂音がして、ありけなく呪いが解けた。

「やつたわー 元の大きさに——」

台詞の途中で、シャルが凍りつく。

シャルは全裸だったし、そから一〇セントの距離に青真の頭があった。

「ら……ラスター・カノンー」

「あのときのシャルロットったら、傑作だつたよ」

くわくわと楽しげにアリスが笑う。

医学部五階、〈付属病院〉の入院病棟。アリスはベッドサイドに座りて、入院中の女子学生と談笑していた。

「あの〈慢闘〉がな。彼女もまた、少女だったといつてな」

ふふっと晶よく微笑んだのは、蜂蜜色の金髪が美しいオルガ・サラディーン。アリスの変装ではなく、本物の学生姉代だ。

アリスは居正まいを正し、オルガに真摯な瞳を向けた。

「礼を言うよ、オルガ。君の迅速な対応のおかげで、僕らは王室に〈慢闘〉の存在を伝えたの」「おやた」。……セドリックの亡骸が学院にあることをね」

轟動役の雷真とロキが暴れでいる隙に、潜入役「兼」主力のシャルとフレイがロッカーに潜入、安置されていた遺体を運び出したのだ。

「なに、相利共生というものさ。……それでも、思い切ったな。学院長は懲免されてもおかしくないや」

セドリックはドイツによりて暗殺された——とふうことになっていた。だが、学院から遺骸が出たことや、ドイツに対する疑惑は晴れた。英國とドイツは急速和解し、世界大戦は一時的に回避された。

「パパは冷徹で狡猾な人間だよ。あの程度の失点で退陣することはないさ」

「結果を見る限り、そのようだ。『学院に苦意を持つ者の工作である』なんて言い分を、いつもやつて王室に認めさせたのか……おまけに、君たちもねとがめなしどは」

「僕らはその『工作』を、パパの命を受けて暴いたって扱いだからね。処分といふか裏切るものだよ。それに——パパはたぶん、あれを公表したからなんだ」

「公表？ なぜだ？」

「世界大戦の勃発は少しだけ早い——パパの意図したタイミングじゃない。かと言つて、パパが自分であれをさらせば、関与を認めるようなものだ。誰かに……僕らみたいな連中に暴かせたかったのさ」

「そうすれば、連に『隠れられた』と言ひ訳が立つ……か。言われてみれば、今回のことを

も、結局は学院の意志なのか、そりやないのか、あやもやになってしまったな。人を煙にまくのが上手い——あの穢らしいやり口だよ」

オルガは「ほほわしそうに笑う」。それから、壁の時計に目をやった。

「——うん、もうこんな時間が。車椅子を押してくれないか、アリス?」

「出歩していいのか?」

「来周には複帰する。君に代役を任せたいとは、何をされるかわからんからな」「君の縁談はアチ裏してあげたじやないか」

「おかげで私は勘当されるところだつたよ。君のやり方は過激すぎる」

苦笑するオルガに手を貸して、車椅子に座らせる。そのまま車椅子を押して、アリスは病室を出た。手回し機巧のハンベータード一階に下り、廊下に出たところだ。

「」機嫌よう、学生総代。お通えに上がりました

見目麗しい男子学生が、爽やかに声をかけてきた。

金髪、色白の好青年。穢やかな雰囲気をまとつてゐる。その後ろにもう一人、背の高い男子学生がいる。こちらは黒ずんだ金髪で、目つきが鋭く、攻撃的な雰囲気だ。

ゼカルロス兄弟。兄弟そろつて(十三人)に名を連ねる実力者だ。ちなみに、好青年の方が弟で、無愛想な方が兄だった。

「すまない、アリス。」「やふふ」

「代わりますよ、ミス・バーンスタイン」

ゼカルロス弟が気さくに微笑み、懐かしい名前を口にした。

嫌な予感……と言うほどでもないが、いい予感もしない。アリスは何とも言えない気分で、オルガと兄弟を見送った。

一〇分後、オルガは中央講堂の会議室にいた。

そこには大きな円卓が置かれ、そろそろたるメンバーが座っている。

「（）臨席、感謝する。」これより（円卓会議）を始めよう。——（十三人）諸君」

オルガは睥睨するように、ぐるりと一同を見回した。

オルガの対面に座すのはマグナスだ。今日は火垂のみを連れている。

そのとなりにはロシアの（女帝）ことソーネチカ。一時は制服を着ているが、どう見ても特注品で、長いスカートはバニエで膨らませ、ベストはコルセット風。ブラウスの胸元は大きく開き、学生というより前世紀の貴婦人めいた仕立てだった。

目を惹くと言えば、その対面。二人の男子を従者のように従えて、ハカラ姿の大和撫子が座っている。こちらは制服ですらない。リボンとアーツだけが洋装だ。

一際異彩を放っているのは、雑誌を頭にのせ、足をテーブルにのせた男子学生。この場でただひとり、礼儀をわざわざえていない。

ほか、インドからの留学生と、セカルロス兄弟、黒塗りの剣を抱いた女子学生、一〇歳くらいに見える幼い少女……と続く。

最後の一人が、英國が誇る秀才、執行部議長セドリック・グランビル——これが替え玉であることは、この中でオルガとマクナスだけが知っている。

呼ばれなかつたシャルとロキを入れて、計（十三人）だ。

「」足労願つたのはほかでもない、（下から一番目）と（女帝）の件だ。知つての通り、彼らは破竹の勢い——もはや誰にも止めることができない

ゼカルロス弟がレジュメを回す。そこに計画の全貌が書いてある。

黙読する一同。表情の変化を冷静に見極めつゝ、オルガは続けた。

「学生たちはもちろん、学外からも苦情がくる始末だ。執行部としても好ましくない状況だが——あいにく、夜会規約上は何の問題もない。そこで、我々が一致団結して、あくまでも（アエアな手段）で介入した」と——

すうと優雅に、ロシアの（女帝）が立ち上がりつた。

「——帰るのか、ソーネチカ？」

「」めんあそぼせ。わたくし、徒党を組むつもりはありませんわ」

物腰（そめい）そ慢やかだが、瞳は火のようになえている。腹を立てて立つた（女帝）はスカートをひるがえし、ピールの音を響かせて、会議室を出て行った。

ゼカルロス弟が苦笑いを浮かべる。

「あちゃや。早くも一人、計画から外れちゃいましたね」

「彼女は「徒党を組むつもりはない」と言った。どう出るかはわからんよ。案外、彼女が率先して実行してくれそうなものだが——マダナス?」

「対面に目を向ける。銀の仮面の男が、音もなく席を立つていた。

「貴方も退出されるのか?」

「そちらの提案は理解した。だが、あいにく興味がない」

「火垂を連れて去つて行く。オルガは一同を見回した。

「反対の者は遠慮せず申し出してくれ。イザナギ流のお姫さまはどうかな?」
大和撫子に話を振る。少女は「あり」とオルガをにらみつけ——

急に元気を失くし、しおれたようになつむいてしまった。

「……どうした、顔色が優れんようだが……うん、泣いているな?」

一同の視線が集まる。オルガの言葉通り、少女はほろほろと涙をこぼしていた。
しゃくり上げそうになつていて。とても返事ができる状態ではない。

従者の片方、体格のいい男子が立ち上がり、主に代わって頭を下げる。

「すんません、学生時代。お嬢は今、その……ハートブレイクゆうやつで

「傷心——失恋でもしたのか?」

禁句だったらしい。少女はわざと泣き出で、顔を覆って走り去った。

「お嬢!? ええりょ……かんにんしたうてください」 お嬢、持てコテー

「ほな、僕らはこれでー」

もう一人の従者、緑の細い男子が愛想笑いを振りまく。何だかわからないうちに、二人はあわただしく出て行った。

「うん……まあいい。そちらの新入り君はどうだ?」

態度の悪い、一番やる気のなしそうな男子に水を向ける。

彼は氣だるげに雑談をとかした。その下にあったのは、意外な美貌だ。退廃的な無氣力が、不思議な色気を発散している。

ほんやりオルガを見て、そしてため息をつく。

「いやでもいいさ。そんな話なら帰らせてくれ。昼寝がしたいんだ」

あくびをしながら去つて行く。セカルロス弟が噴き出しだ。

「やる気のない人だなあー」

「それはそうだ。何せ、彼が（下から一番目）なのだから」

「フェリクスの代わりに（十三人）入りしたんですね?」

「彼の成績は最低だ。定期考査はすべて白紙、レポートは提出しない。そんな彼が放校にならずに済んでいるのは、ひとえに——」

「すば抜けた才能を持つてゐる？」

「そうだ。本氣でやれば〈元帥〉園下に迫る——と言われてゐる。もりとも、彼は一度も本氣を見せたことがない。」

「くえ……それは楽しみですね」

「ほかに不参加希望の者はいるか？　この集まりに強制力はないから。」

「では、残った者で実行に移すと」とや。〈十三人〉は順次（自主降格）し、夜会の舞台に立つ。下位の参加者を助けるも、排除するも自由だ。ただし、我々全員が参戦するまで

——七ないし八夜のあいだは一切の交戦を行わないものとする」

「我々は」という意味ですよね？」

セドリックが挙手して確かめる。オルガはうなずいて応えた。

「ライシン、フレイ、ロキが攻撃してきた場合、撃退して構わない」

「了解しました。このプロジェクトを何で呼びましょうか？」

「そうだな、〈十三人〉が他の〈手袋持ち〉を味方につけ、軍團を組織」とや」というのだ。騎の奪い合い、廻し討ち、計略策略何でも、それの争い——であれば

しつくりする単語に行き当たり、首肯する。

「〈甲車戦争〉云々うのは云々か？」

見回す。」といふと、一回が机を叩いた。承認されたようだ。

「では、」れより〈円卓戦争〉を始める。諸君、群魔翻訶と云ふべきやないか。不敵に言い放つオルガの膝で、赤い仔童がにたりと笑つた。

医学部一階、おなじみの病室で、雷真は恍然としていた。

「まったく、反吐がくる」

「…………」

「極めて不愉快だ。気分が悪い」

「…………」

「ふうも放血して、血管を洗いたい気分だ」

「だったらそうしろ——俺にふりしゃが言うな——」

ついに怒鳴りて、起き上がる。

となりのベッドに寝てゐる口キが、ありあからうやれこのだ。

「何が不満なんだ——俺が血をわけてやつたりてのに——」

「恩着せがましい東洋人め。やつたものを少しばかり返してもらひただけだ」

「だったら気持ち悪いとか言うな——もともとおまえの血だろ——」

「黙れ。借りたものは現状維持して返すのが礼儀だらう。不純物を混ぜるな」

「どうやつて分離したんだよー つか、不純物扱いやめろー」「言い争つてゐると、不意にドアが開いた。

「元気そうだね、ライシン。廊下まで聞こえてきたよ」

豪爽のアリスが入つてくる。ロキと雷真は同時に口をつぐんだ。

「おや、歓迎されてないね。ひょうとして、愛の苦みを邪魔しちゃうたかな？」

「ふざけた誤解はやめろー」

仲良くハーモニー。アリスはくすくす笑つて、

「元気なら、少し付き合ひなよ。シンが紅茶を淹れてるんだ」

かなり血を抜かれたので、体力が戻つていない。夜々ヤクルーエルに無断で外出するのも気が退ける。が、ここでロキと屬り合つてゐるよりはマシだらう。

アリスに導かれるまま、医学部の前庭に出る。

前庭には白いテーブルセラフが置かれ、シンが午後の紅茶を用意してゐた。

「どうぞ、ミスター・アカバネ」

椅子を引いて勧める。雷真は警戒しながらも、大人しく座らせられりた。

しばし、アリスと雷真は無言で紅茶を楽しんでいた。

ゆつたりとした気分で、色づき始めた樹木を眺める。

やがて、ひとつ疑問が浮かび上がつた。少し迷つた末、雷真は口を開く。

「なあ、おまえが言つた、心の機が入るのって話か」

「——神性機巧の?」

「あれは、夜々じやなへて、おまえの「心」を『育つ』んだろ?」

「——」

「おまえには魔術回路が内蔵されてて、学院長は神性機巧^{トランシーブ}を求めてヒ——セの上、おまえは「こいつの育つたんだ!」「僕が田舎^{シキ}なじがりで、心のないかに期待^{シカシタ}してた」のにな。つまら……おまえが学院の神性機巧^{トランシーブ}、なの?」

「……かもしけないじや、僕が勝手に思つただけだ」

アリスはぶりと寂^{ソロリ}けに微笑み、カツブ^{カツブ}を置いた。

「僕はね、ライシン。五体満足では生まれなかつたんだ」

左手をさわる。見たといふは何の魔術もなし、本当は機械仕掛けの腕を。

「僕の命をひがむには、ユハ^{ユハ}したりヒ魔巧^{トランシーブ}手術が必要なだ。僕が一歳の頃^頃、パパは学院をのりといふ、強烈に神性機巧開発を推進した。娘なら誰だつて開発^{ハサハサ}しかやうじやないか。僕を「まともな」人間にしたないと、そう思つての行動じやなじがりでさ」

「じゃあ、おまえが学院長の言ひなりなのは……」

「パパが僕のためにしてくることなら、僕は手伝^{ハサハサ}いた」と、もつやる義務がある」

「……学院長は、ユハさんだ。あれから」

「何も変わらないよ。何も」

立場も、態度も——とか。

「君といっしょで紅茶を楽しむのも、これが最後かもしねないな」

不意に、アリスの声が震った。

そう言えば、彼女は言つていた。寿命がとうとか——

雪真はよほど深刻な顔をしていたらしい。アリスは笑い出した。
「何で顔してるんだよ。ほんとが冷めるまで、身を離すつて誰だ。そのあいだに、君が
バカやつて死んだりしたら、もう一緒に紅茶は飲めないだろ?」

「……俺の心配かよ」

だが、動作は治まらない。何と言つても、アリスは他人を離すのが得意なのだ。
ふと、アリスは真剣な眼をして、まっすぐに雪真を見つめた。

「ねえ、ライシン。本当に、僕のものにならないか?」

「……断る」

「なら、前に君が言つた通り……僕を、君のものにしてくれないか?」

「それも断る」

「……そ、うか。残念だ」

「おまえは、おまえのものだ」

「——」

「それをおまえが理解して——対等の存在としてなら、選んでやる」

アリスは呆けたように雷真を眺めた。

それから、ほんのりと頬を染めて、恥ずかしそうに横田を見た。

「それは……プロポーズと受け取つていいのかな?」

「駄目だ——曲解するな——」こう考へても「仲間」の話だら——

「発話行為つてのはね、語り手がどんな意図で発したかよりも、受け手がどう感じたかの方が重要なんだよ。君にそのつもりがながらうと、君の言葉で誰かが傷つけば侮辱になる——僕がプロポーズと受け取つた以上、君は責任を取るべやだ」

「言うが早いか、雷真の膝に移動して、もたれかかっていく。

鼻先で髪が香る。少女の体温と体重に、雷真の理性はたちまちあやしくなった。

幸い——と「どうか何と言つたか、雷真が間違いを犯す暇はなかつた。

そくりと背筋に悪寒が走る。おそるおそる振り向くと、うつむかひ微笑む麗利……のむる夜々が、雷真の背後で妖氣をまき散らしていた。

「アリスさん……雷真から離れていたる……夜々が笑つてゐるやつだ……」

「落ち着け夜々——笑つてはいるが、すく怖いぞ——」

「雷真は黙つてしまつたさ——この女狐は特に危険なんです——雷真を騙して婚約に持ち

込むから朝飯前なんですかー」

「おや、聞いたなんて心外だね。ライシンは本当に僕と結婚したからなんだよ」

「嘘うそアリスー 何これ？」投票発言してんだー

「誰なんていってないよ。玉川」

アリスが右耳のピアスを指で彈き、魔力を送り込む。その途端——

[卷之三]

[卷之三] 亂世之書

とくに、アリスの悲鳴の声が聞こえてきたが、

やがて、最初に口を開いたのはアリスだった。

「僕は謹報活動が専門なんだよ？」
記録用の魔具は常に持ち歩いてるさ

「雪真……本当に重いんだですか？」

真っ暗な廻が雷真を見る。雷真のひたむかひ、ふりふきのよかな冷や汗が出た。

「知らないから本当のことを言ひてください……首を絞めるよりして頭骨を握りのよした
り、頭を頭蓋骨（かぶつぼ）に引ひかいたりしませんから……」

「する気まんまんじやねーかー」

「雷真はバカですーーーうわーんっ！」

夜々が襲いかかってくる。間一髪、雷真はアリスを見しのけ、逃げ出しだ。

庭先で鬼」いうのが始まる。そんな二人を、アリスは笑うて見送った。

主のカップにおかわりを注ぎながら、シンが不機嫌そうに顔をしかめる。

「」機嫌ですね、お嬢さま」

「ああ、」機嫌だよ」

「それはナヘリがおもしただ。一方、私はおもひたが煮えぐりの通りであります」

「男の姫姫は見苦しいね。でも――今回は許そや」

「それは――スター・アカバネを始末しておふぶく、せやいう意味ですか?」
「わふりと――何で余話してるのよ――」

横から少女の声が飛んでくる。

帽子に仔竜をのせたシャルが、腕組みをして立っていた。

「貴方まで夜々みたいない」と言わないで――余計な危険が増えるじゃない――」

「ラザフォードの執事は優秀ですが、ゆえより危険です」

「困る事な事でよ」

「からかうなよ、シン。シャルロットはラインンのことが心配なのさ」

「違うのかい?」

「違うのかい?」

答えられない。シヤルは耳まで赤くなつた。

ふたしかれた様子で、とすんと首筋の筋に腰を下ろす。

「ええ。車にもお菓子をいれたがけで。」

「卷之三」

シンは手際よく紅茶を淹れ、シグメントには鳥肉のサンドイッチを勧めた。

「えい？」 たんだが？ 我も書いたが、ソルがあるんだもや。

「…………ながれ、
祝20周年記念コンサートなどあります。おうどあんな…………やう

「へんな言葉を設定したのよー」

「彼が間違つても言わないうような言葉、しないような行動を選んだつもりだ」

「な
貴女、
性格最悪ね！」

「知ってるよ。でも、それはお互にどちらがいい。」

「……そんな「あり得ない」言葉を設定して、私を睨い殺すつもりだったの？」「

「彼が解説にいわうる以上はわからへばたよ。何にいふん……」

その意味がわかったのか、シャルは口をつぐんだ。

アリスは雷真が解説することを知っていた。シャルが元通りになることも。雷真があの

「イヤハニを言う」「えー……」

「だから、あれは僕なりの誠意だ。お気に召したようで何よりだよ、姫」「ああ、氣になんて全然、召してないわよ」「あんなの——」

思ひあり否定してから、シャルは悔しげに、上目遣いでアリスを見た。

「……なんて否定したといひや、貴女は、全部お見通しけ」

「やうだね。僕は君の三倍くらい賢いからね」

「むむ……」

「まあ、君が彼にやういんなのは、学院中のみんなが知っているだけだよ」「嘘……やしう？ 嘘はね？ 例によると、私を追い詰めて楽しんでるのやね？」「わー、ユーハーうーー」

「本当のことを言つやー」

腕をひかもうとするシャル。笑つてかわすアリス。

はた目にはじやれ合つてゐるようにも見える。二人のそんな姿で、鬼のいのちの書真が氣付いた。夜々に飛びつかれながら、

「何か仲いいな。何を話してんだ、あいりゅ」「さあ……でも、夜々のセンサーにびりびります。えす黒い殺気が勝手に……」

「出すな。それはしまっておけ」

夜々は雷真の音中から降り、ふわっと微笑んだ。

「よかったですね、アリスさん」

「ああ」

シンもな。

無表情のまま、淡々と紅茶を淹れる不良執事。一見、退屈そうに見えるが——彼が職務にどれだけ充実感を覚えているか、雷真はもう知っている。

学院長とアリスのあいだに何があったのか、これから何が起るのかは知らない。だが、とりあえず、笑っていられるだけの余裕がある。

それはいいことだ。間違いなく。

だが、雷真の戦いはまだ終わらない。

マグナスと再戦するまでは、もう一ヶ月少々しかない。

それまでに——身につけなければ。敵を上回る力を。

そして今夜も、夜会の幕は上がる——



あとがき

こんには、**深冬レイジ**です。

おかげさまで機巧少女も『黒田となりました！

今回は「死んでるわけがなかった」あのキャラに焦点を当てています。作者もお城に入りのキャラとして、4巻201Pのイラストをいたいたいとき、その（麗）な美しさに一発でやられてしまいました。既に今回のカバー絵もいたいたいでいるのですが、はかなくも美しい素敵カバーで作者大歓喜！僕は大変幸せ者です……

実は今回のアサ、個人的に頑張った点がありまして。

心の見貴と暮らサイトウケンシさん（MP文庫）では「101番目の百物語」を書かれています）から、「ハヤルがちょいちょい寂しきやんじになるのを期待」とリクエストされたので、僕なりに無い知恵をしぼりました。果たして期待に応えられたのかどうか、それはぜひ貴方の目でお確かめくださいね！

本文をこ覽になつた方はもう予想されている（？）と思いますが、次巻から（十二）人群雄（十二）開幕の予定です。

「……これにて夜会の本番ですね……?」こうひらをやりあめりたらもう、あとはロキヒンシャル、そしてマグナスしか残ってないですからねー

シリーズが始まる前、編集部さながら「夜会で戦うてほひかりのお話にはしないでね」というアドバイスをいただきました、そこはかなり意識したりもつたんですが、リリマダを振り返つてみると——

夜会の「戦」で戦つてほひかりたりた件。

おひいきイー 根本的なところでアドバイスを生かせてねーじやねーかー

でもヒンマリー 次回からマジ「夜会がクライマックスー」になりそ�で、作者もわくわくしてらます。ヒローグでもよろいと顕見せしてらますが、連中、(十三人)の称号は伊達じやならうほひかるを見せてくれるに違ひないー

るるおさん、いつも素晴らしいイラストをありがとうございますー そして過酷なスケジュールを強いてすみません……。

既刊を読み直すたび、「夜々のアザインは神の領域に踏み込んでる……」と衝撃を受けてねります。今巻のイラストも超☆美しみですー

高城計さんのおミック版機巧少女は3巻まで発売中です。原作1巻の『魔術喰レ』編が終了して、ロキ・フレイ登場の『剣天使』編に入りました。ロキがたまらなくカッコイイです。そしてフレイの巨乳小動物つぶりがバネエー！

高城さんもまた、お休みがまったく取れない超過密スケジュールで……すみませんありがとうございます……

海冬レイジの面倒を見てくださった担当さま、超ややこしい本文をチエックしてくださる校正さま、営業さま、書店さま——本書の出版にお力を貸してくださったすべての方に、謹んでお礼を申し上げます。

そして本書をお買い上げくださった貴方に最大の感謝を——海冬レイジが折れずに今日も戦っているのは、貴方の支えがあるからです。雷真と夜々が戦いの果てに何を見るのか、ぜひ完結までお付き合いくださる——

ではまた次回、機巧少女のお金いだりますように——

こんにちは。
蛤の人です。
7巻になりましたよ？

ところで、今回の引き。
あれはとってもズルイと思います。
最後のなになにー！？
そんな訳で、次巻読みみたいです。
あとスコードロンさん達も描きたい。





マシンドール 機巧少女は傷つかない？ Facing "Genuine Legends"

発行 2011年12月31日 初版第一刷発行

著者 海冬レイジ

監修人 三坂景二

発行所 株式会社 メディアファクトリー
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-6

字幕・脚本 株式会社廣済堂

©2011 Reiji Kuro
Printed in Japan ISBN 978-4-8601-4336-3 C0193

＊本書の内容を無断で複数・複写・放送・データ配信などをすることは、固くお断りいたします。

＊宣傳はカバーに表示しております。

＊亂丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

＊その他、本書に関する問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話 0570-002-001

受付時間 10:00～18:00(土日、祝日除く)

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

お問い合わせ先 T150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-6 NBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー
MF文庫J編集部窓口 T海冬レイジ先生便 「海冬先生便」



お問い合わせ窓口に
向けるアンケートに
ご協力ください

★お寄せいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料
権利を受けプレゼント！ ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送
信時にかかる迷惑度はご負担ください。 ★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。